

一拾四萬八千八百五拾貳軒 戶數  
 内  
 四千貳百八拾壹軒 藩士  
 壹萬五千百拾八軒 兵卒  
 參千八百拾五軒 從前陪臣  
 七百拾七軒 兩末家藩士兵卒  
 拾壹萬四千五百拾軒 農  
 六千九百六拾五軒 商  
 貳百七拾七軒 社家  
 千貳百四拾四軒 寺院  
 五百七拾參軒 盲人  
 千三百五拾貳軒 穉多  
 右之外女人口稜分ニ至候而者御當地ニ而何分兼申候  
 且又非人之儀者全體取調不申候付右兩條共申遣追而御  
 達可申上候  
 一兵隊人員之規則左之通

一士隊二大隊  
 但隊士四拾八員ヲ一小隊トシ六小隊ヲ編テ一大隊ト  
 ス  
 一砲隊六隊  
 但一隊佛製四斤半砲四門砲手四拾八員宛  
 一銃隊四大隊  
 但銃手四十八員ヲ一小隊トシ六小隊ヲ編テ一大隊ト  
 ス  
 右者城下之兵員ニ而御座候尤本書ニ相顯置候藩士兵卒  
 ハ帶刀以上之大數ニ而郷兵等ハ未だ一々兵隊編入之都  
 合ニは至兼申候且又隊名之儀ハ番號を唱來候迄ニ而外  
 ニ隊名逆ハ無之候  
 右之稜々御尋ニ付御當地ニ相分候丈先御達申上候以上  
 熊木藩  
 十二月 井上謙治  
 辨官御役所

明治三年正月三日天皇神祇官に行幸あり天神地祇八神及び歷代皇靈を親祭あらせ給ふ  
 〔從東京西之下廻〕

來ル正月三日神祇官に  
 行幸  
 天神地祇八神殿  
 御歴代御靈御親祭被爲  
 在候旨被

仰出候事  
 但勅任官以上並非役華族辰半刻無遅々同官に可相詰  
 候事  
 十二月 太政官

正月四日日本藩井上多久馬病氣の故を以て東京遊學を免す

〔慶應元年ヨリ明治三年迄  
 遊學一卷帳〕

一米田波門殿家來井上多久馬東京遊學被仰付置候處病氣差起旅行難相成常人且主家方内意之趣ニ付左之通  
 御家來井上多久馬儀東京遊學被仰付置候處病氣差起旅行難相成山御内意之通ニ付遊學被成御免候條此段可被成御申聞  
 候以上

正月四日 學 校 局  
 米田波門殿

正月五日天神地祇八神及び皇靈を神祇官に奉祀する旨を布告せらる  
 〔從東京西京之下廻〕

午正月五日辨官傳達所を御呼出ニ而橋本官掌を以御  
 渡之御布告書寫  
 神祇官神殿鎮座  
 東座  
 天神地祇  
 中央  
 八神殿  
 西座

明治三年

御代々神靈

右之通候條相違候事

正月

太政官

正月八日我藩有栖川宮家の依頼により藩士林市之助を藩用の餘暇を以て該宮家に勤仕せしむ  
〔明治二年四月以後 東京より之御用狀扣〕

林 一市之助

右者 有栖川宮様兼而御存知之者ニ有之候處此節東下罷在候由ニ付御雇被召仕度思召候旨尤此方様御用有之御廻し難相成候者御双方懸持ニ相勤候而も可然との趣御頼被仰遣候段御同方様御家來太田義雄公用方に罷出申述候此段相違申候以上

正月六日

公用人中

飯田熊之助殿

〔從東京西京之下廻〕

林 一市之助

右者御藩用之透々當分之間有栖川宮に被差出候段正月八日違有之候事

正月十日大森縣石見を濱田石見に移し濱田縣と改稱せらる

〔從東京西京之下廻〕

正月十日辨官御役所へ御呼出ニ而御布告書寫

今般大森縣濱田表に相移シ改テ濱田縣ト被稱候此旨爲心得相違候事

正月

太政官

正月十日脱籍者復籍の件に關し諭達せらる

〔從東京西京之下廻〕

〔正月十日辨官御役所へ御呼出ニ而御布告書寫の内〕

先年來舊籍ヲ脱シ諸方流浪罷在候者共ニ付テハ厚キ思食被爲在其舊國ニ於テ大逆無道ヲ除クノ外御一新更始之御政體ヲ體認シ舊惡ヲ不糺夫々復籍生活之道無差支様可取計旨毎度被 仰出有之候處間々 御趣意ニ違ヒ苛察之處置致候向モ有之哉ニ相聞ヘ左候テハ 御趣意モ難被行候條府藩縣ニ於テ尙亦篤ト相辨ヘ復籍人被引渡候節者前罪ヲ不糺早々舊籍ヘ引取生計相立候様可取計旨更ニ 被仰出候事

正月

太政官

正月十日日本藩少參事井口呈助を長崎に派遣し高田源兵衛をして之に隨行せしむ

〔明治三年 記室日記〕

口達

覺

軍備局 少參事

井口呈助

高田源兵衛

其方儀就御用早々出崎被 仰付之

以上

右者御用有之井口呈助一同長崎に被差越候條此段可被 違候以上

正月十日

正月十日

正月十日岡山藩知事池田章政献金を請ふ

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

岡山藩献金之事

明治三年

一金五千兩右之 朝廷御用途百萬石御不足之段相聞差々當所ニ有合文ヶ差上早々國許へ申遣改革以來ハ減祿等ニ而定而少々ハ積金ニ相成居り可申今日之御急務郡縣之制ニ至リ候上ハ有餘ハ悉ク差出候心得ニ御座候段願出申候ニ付尤之次第ニ被 聞召候由桑名方も一萬金差出候へ共是ハ文意も違ひ救民扶助等ニ可致様とて御差返之事一橋藩方も藩知事願ニ付七萬五千兩差出候へともいまた御沙汰無之由  
右備前某聞書自然ハ聞違も可有之か御斷申上候事

〔近世史料編纂綱例〕

十日(正)池田章政金五千ヲ獻シ度支ニ充テシコトヲ請フ

正月某日大村兵部大輔刺客處刑に關し彈正臺との間に紛議を生し各官睽反の狀あり

〔明治三年ヨリ探索書控〕

(午正月初旬西京ヨリ發シ同中甸東京藩之某氏書翰之中抜寫抄略)

大久保參議ハ暫時當地滯留定而昨今ハ下坂と奉存候當時當地爲差異事も無之候得共何様諸官中ハ乍恐モカたノヽといたし過日も大村兵部大輔との亂入之筋御處置御座候通ニ而大混雜全彈臺都府之二官不和より斯ル不都合相生シ候ものと相見へ申候依而漸ニ昨冬廿八日鼻首相成申候右件ニ付彈正大忠門脇海江田京都府知事公並ニ大參事松田至急ニ御召ニ而廿八日此地發足貴地ニ罷越候將又十津川郷中兼而兵部省に不服之處此度彈臺より少々世話いゝし候趣ニ而大ニ心服向後彈臺支配相受度旨願出候趣ニ而是亦二官不和ヲ生シ十津川郷士に謹慎被命鷲尾との同郷に發向京都府ハ大不評加之長官公ハ醜シ誠ニ朝廷之大政も斯相成候とハ何とも申上様も無之恐入候次第 皇威之衰へ今日ニ始ルニ而ハ有之間敷哉私ニ長大息罷在候

正月廿七日

毛利 莫

〔明治三年ヨリ探索書控〕

三論確執刑究一話書抜

一朝廷ノ曰今般京都府ニ於テ不束出來之件大村兵部大輔ヲ切害シタル者ヲ斷然所置伺濟之上ニテ其當日彈正臺方拒ミ差止メ政府ノ名聞ヲ汚シタルハ是所謂朝憲ヲ蔑ニスルノ當然ナレ共何ノ言ヲ以之ヲ憤フヤ  
京都府ノ曰朝憲ヲ汚シ奉り候段ハ深ク恐惶ノ至ニ奉存候雖然當今御仁恤之御趣意ヲ奉休セハ人命ハ抑天下ハノ至寶トスル處ナレハ其生ヲ得ルハ難キニ在リテ死ハマタ一旦ニシテ易シ王政ノ御情休願ル仁政ヲ基トス素ヨリ彈正臺ヲ被爲置候ハ府藩縣ヲ始朝廷ト雖モ其至當ナラザルヲ糺スノ職務タルヲ御布告ニモ相成候依之強テ朝憲ヲ蔑ニスルニアルトイエハ當ルカナレハ彈正臺ハ彈臺ニシテ其職權皆朝廷ノ嚴掟ヲ守ルニアリ一旦伺被濟ノ事情モ一時不被爲得止御採替ニ相成事御一新後マタ不珍御仁政御救助之所詮ヲ存ル限リニハ彈臺ヨリ拒ミト言ハ、拒ムトモ言始末ニ及へリ之以テ不條理ナリトシ朝憲ヲ一ニスルト言ハ、是ヲ除テ外事ニ伺濟之事件ヲ御止リニ相成候例無キカ如何各其職務ノ規定ヲ重シ存スル是則朝憲ヲ輕蔑スルニ似タリト題セラル、ト雖モ決シテ輕スルニ非ス重スル處ヲ以テ爲ス然ハ則我政府ニ於テハ朝憲ヲ重大ニスルヲ以輕スルノ汚名ヲ蒙レリ此輕重ニ差別表裏ノ有ル處ヲ議セラレタリ之ヲ以共價トスルニ足レリトス

彈正臺ノ曰極罪ノ者アリ其罰刑至當ナラサル所アルヲ拒ムハ我臺ノ掌ル處ナリトス朝憲ヲ奉休シタル所ノ證據ナラスヤ然ルヲ今般其節止メタルヲ不屈キト有リテ政府モ却テ是カ爲メニ俱ニ御糾問ノ筋アルノ御旨趣是ヲ恐懼スル處ナリ然トいへとも人命ノ活亡是以テ天下ノ大重事トスルヤセサルヤ彈正臺ハ此事件アルヲ專務ノ職掌タル處ナリ是ヲ政府ヨリ朝廷に伺濟ナリト臺ヨリ傍觀セハ彈正臺ハ不用ノモノナリサレハ此例ニテテセハ彈正臺ニ不限神祇官モ神主計リニテ朝廷に伺被濟神祇官ハ傍觀シテ可然其以下民部省大藏省其外各省トモ此例ニシテヨロシ免テモ角テモ朝廷ニ御

明治三年

三三七

治定之事ハ假令不可然事件ニテモ其儘御所置アラセラル、御規則ト相成朝廷ハ御直ノ御所置トサヘアレハ非ヲモ是ニ  
スル云ハ、其適宜ト云スヲモ、モハ何レノ處ニアルモノソヤ譬エハ今日一時朝廷ヨリ不圖天下ノ四民不殘斬罪ニ所ス  
ヘシト被仰出タランニハ日本國中ノモノ皆其刑ニ可被處賦若是ヲ非ナリトシテ止ムルモノアリシトキハ則其者天下ニ  
リ先キ立テ罪ヲ得ルノ御規則トナルトキハ自今後正理ヲ唱義ヲ重シテ士氣ヲ張ルモノ一人トシテ無キニ似タリ自然獨  
其至當ナラサル罪ヲ止ムルモノハ各國ノミ賦是ヲ確執刑究論ト云フナラン

右東京より或藩士之書簡

正月傳寫

〔防長回天史第六編下〕

(補遺、大村遭難ノ停刑事件抄略)

停刑後十二月中京都彈正臺官吏及京都府知參事ヲ東京ニ召致シ停刑事件審問ノ爲メ明年正月京都府知事長谷信篤ヲ宮  
内權大丞平松時厚ニ付シ京都府大參事松田道之彈正大忠門脇重綾少忠足立正聲ヲ鳥取藩ニ同大忠海江田信義ヲ鹿兒島  
藩ニ付シテ之ヲ監守セシメシ如キ紛紜アリシハ事體尋常ナラサリシヲ察スヘシ

正月某日京都府は先きに大村刺客の處刑に臨み彈正臺より交渉ありて一時之を猶豫せし件に關  
し意見を條陳す

〔明治三年ヨリ  
探 索 書 控〕

二月十三日林祥之助報告書

天裁濟死刑舊臘廿日刑處ニ臨ミ俄ニ彈正臺ヨリ猶豫之指圖有之行刑延引ニ及候處假令彈正臺申旨ニ候共當府心得方も  
可有之處以之外之次第輕 朝裁儀ニモ相當リ甚以不濟事ニ候旨 御沙汰相成且ハ知事大參事御糾問之筋有之旨ニ而至

急東下被仰出奉畏候就而ハ當府心得不得不申出事左之通言上仕候

一職員令ニ云彈正臺掌執法守律糾彈内外非違又云巡察宮中府中糾彈非違ト然ハ彈正臺ハ法律之在ル處非違之彈糾其職ニ  
候得ハ標目模範ト爲ル所ニシテ殊ニ當京師ヲ被立置候ハ戮力可致旨別段當府へ御沙汰之旨も有之候得共素ヨリ法律歷  
正條理明瞭之義ト相心得候既ニ如此シテ此度休之舉動有之候後ニ至リ假令彈正臺申旨ニ候共當府心得方以ノ外ト被仰  
出候而ハ實ニ迷惑至極奉存候

一人ヲ殺ス者ハ死ス古今ノ通典殊ニ 天裁既ニ至當ニ出候得ハ假令彈正臺之指圖候共猶豫狐疑可仕管ハ不可有之哉ニ候  
得共 御一新已來横井平四郎ヲ殺害之賊徒ハ凡此度大村旅宿へ亂入之ものト其所業似寄候得ハ自然前後混亂杯之處ヨ  
リ非違ヲ生シ候故乎ト疑惑不少候へ共臺中之儀ハ敢テ府ニ於テ不得聞候何分執法守律之職ト被 仰出候上ハ其指圖ニ  
隨ヒ暫ク猶豫候處今日ニ至リ以之外之次第ト御察當ヲ請候迄ニ之不立至哉ト相心得候處此度之 御沙汰ニ而ハ實ニ迷  
惑至極ニ奉存候

一彈例ニ云刑部省死因ヲ決セハ斷案を臺ニ移ス可シ又云死罪既ニ奏報スト雖モ猶冤枉ヲ謝者事疑アラハ推覆シテ以狀奏  
聞スベシ又云 朝議法律ニ關スルモノハ彈正臺悉預知ルヘシト此彈例ハ依 天裁決定ト有之上當日彈正大忠申分ニ順  
序ハ不歴 天裁候異議有之ト云々其歷異論ハ當府の可知事ニハ無御座候得共何分彈例之旨執法守律之職たる彈正臺よ  
り指圖ニ候得之不得止次第ニ而暫ク猶豫候共今日ニ至リ以之外之次第ト御察當ヲ受候迄ニ之不立到哉ト相心得候處此  
度之御沙汰之趣ニ而實ニ迷惑至極奉存候

一行刑ハ人ノ死生ニ係リ候事ニ付既ニ相濟候上ハ如何成事有之候共馴迫不及况猶豫迄ニ而 勅を矯め 天裁ニ背キ候儀  
ハ無御座即刻奏聞御伺書ヲモ差出し且其夜引續議論談判中ニ而全ク 天裁之刑ヲ止メ候譯ニ而之無御座唯刑ヲ憚ニ立  
候上ニも憚ニ 朝憲遺失無カラシコトヲ希ヒ候事ト心得候處知事大參事御糾問ニ御座候而ハ實ニ迷惑至極奉存候

一知事大參事等侍罪書指上儀之元來大村旅宿へ亂入之賊徒共初探索捕亡拘獄ヨリシテ伺書迄悉皆當府ニ而取調候處非違

彈糺之職タル彈正臺ヨリ俄ニ猶豫之差圖有之候就而ハ右探索之疎漏有之候歟或ハ鞠獄ニ不行届有之歟伺書誤謬在之丁重及覆取糺シ候得共萬々一も其等之事ヲ輕易ニ 天裁之伺書差上候ニ立至リ何分天下之標目非違彈糺之職より猶豫之差圖有之恐縮且留守官へ御届ハ仕候へ共届ケサル前ニ相伺可申處手落ト考候儀ハ可有之然ハ猶豫指圖之得失ハ當府よりハ決而可致儀ニ無之指圖ヲ受候前條廉々申上候通不得止次第知事大參事等ノ待罪モ是等ノ處御瞭察被成下度奉願候事

一前顯申上候通彈正臺之職務且當府に別段戮力之 御沙汰モ有之故行刑猶豫之指圖有之候迄ハ東京より行刑之指圖有之候とも何分ノ議論之有之義ト相考候處廿九日行刑之義法之通前夜ヨリ相届立會之義も掛合刑日巡察立會候得共何之議論も無之候得之前日之指圖非歟後日之無論是歟當府へ對し候而も何と歟挨拶も可有之處其儀も無之ハ執法守律非違糺彈之職トシテ其舉動今日ニ至リ更ニ不得其意候依之已來ハ當府心得方も有之候得共是迄之心得ハ前顯之通ニ御座候間共是非屹度御糺被下度全躰右様之彈正臺被立置殊ニ戮力之御沙汰有之期ニ舉動之後ニ至リ假令彈正臺之申旨ニ候共當府心得方も可有之以外之次第ト被 仰出候而ハ實ニ迷惑ニ奉存候間是亦御瞭察御評議被下度候事

正月

京都府

辨官 御中

(未定書) 二月十三日

(未定書) 林 祥之助

正月十二日京都警衛諸藩兵隊の進退は自今兵部省より指揮すへき旨の達あり

〔從東京西京之下廻〕  
午正月十二日辨官傳達所方御呼出ニ而澤官掌を以御渡之御書付寫

京都御留守警衛藩ニ諸兵隊太政官方被 仰付置候處以來進退之儀從其省可申達旨被 仰出候事  
兵部省

正月

太政官

右之通 御沙汰相成候間爲心得相達候事

正月

正月某日本藩兼弘安之助開拓權大主典に任せらる

〔從東京西京之下廻〕

(正月十二日民部省達と正月十八日兵部省達との間にいつ)

兼 弘安之助

任開拓權大主典

〔全書〕

(正月十三日附東京よりの下廻)

兼 弘安之助

右者正月十日致着候事

正月十四日京都兵部省を廢して大坂出張所へ合併せらるゝ旨の達あり

〔從東京西京之下廻〕

肥後藩 京都詰

御用之儀候間明十四日巳ノ刻出頭可有之者也

正月十三日

口達覺

一今般京都兵部省被廢大坂出張所に合一被 仰出候就而之當所之儀之戊兵官轄等之ため藤村兵部權少丞兼京都少參事其  
外官員とも京都府中ニ役所被建置候間爲心得申入候事

但是迄仕掛之御用向等ハ前顯京都府中ニ申出可有之候也

庚午

正月

兵部省

追而當省廿日よ<sub>レ</sub>被移候也

正月十六日日本藩宮崎八郎に東京遊學を命ず

〔遊學一卷帳〕

(弟小姓列)

宮崎長兵衛伴

宮崎八郎

正月廿五日委許差立  
候段上田休兵衛達受

右者爲遊學東京に被差越候條此段可有御達候以上

正月十六日

學校局

上田休兵衛殿

(備考、從東京西京之下廻に「宮崎八郎二月十四日齋坂三月三日東京藩」とあり)

正月十七日宮中にて軍神を祭り給ふ

〔從東京西京之下廻〕

正月十三日辨官傳達所々御呼出ニ而澤官掌を以御渡ニ相成候御書付寫

來十七日本丸ニ於テ軍神御祭り祝炮有之ニ付爲心得相達候事

正月

太政官

來十七日本丸 出御軍神御祭ニ付重輕服者並僧尼之輩參 朝可憚事

正月

太政官

正月十八日日本藩權大參事奥村軍記に免官辭令書を傳達し更に鶴崎主事並に鶴崎兵隊長心得を命ず

〔轉職進階帳〕

正月十八日 御渡

依病免本官

十二月(明治二年)

太政官

〔安津免久佐十一本田文書〕

奥村軍記

右者權大參事被 免旨從 朝廷之御書付被相渡右ニ付座席三等官首座ニ被附置直ニ鶴崎主事被 仰付同所兵隊長之場  
茂相勤候様被 仰付旨昨日辭令被相渡候尤出府之節ハ政府に茂罷出拙者共申談候様被 仰付候此段爲御存知申達候條  
御同役有之面々ハ御通達候様存候以上

正月十九日

少參事

明治三年

三四三

正月十九日中御門經之大納言に任し京都留守長官を命せらる

〔明治三年ヨリ探索書控〕

中御門留守長官

昨十一月大納言兼留守長官 宣下之節御猶豫願立之處今般再度御沙汰ニ付奉命有之候此段爲心得相違候事

正月十九日

留守官

正月十九日鳥取藩知事池田慶徳は濱田地方一揆の偵察及び鎮撫の爲め人を派遣せし旨を申告す

〔明治三年ヨリ探索書控〕

〔長谷川六右衛門書取抄出〕

二月二日鳥取藩届

別紙之通大森縣より通達有之候處隣縣不容易事件不取敢藩兵差出シ鎮撫可仕候處隣縣之動搖ニ付私ニ藩兵ヲ動シ候儀未御規則等も拜承不仕候ニ付先見合申候追々跋扈致候ハ自然藩兵差出鎮撫可仕候尤賊徒蜂起申儀ニ候得之臨機之所置可有之候得共士民飢餓より起り候儀被察候ニ付可相成之兵器ヲ動不申鎮撫相成候様致度依之上官貳人不取敢爲探索差向置候猶追而動靜ニ寄可申上候此段御達申上候以上

正月十九日

鳥取藩知事

辨官

御中

昨晚浮浪徒之煽動ニ依而濱田表へ俄ニ一揆相起り所詮兵力ニ非サレハ鎮定之勢ニ無之ニ付至急御出兵被下度委細之儀ハ大木權大屬へ申合置候間御聞取被下度此段及御掛合候也

正月十五日

鳥取藩

米子詰御中

〔全書〕

〔二月栖本突之充報告抄出〕

大森縣に返書之寫

大木權大屬を以其縣一揆暴發ニ付出兵之儀御懸合有之隣縣之情誼早々可任來意之處素より出兵之軍事且私ニ藩兵及動し候儀未だ 朝廷御規則をも伺居不申猶此外跋扈横行ニ之非常之決斷を以臨機之取計方可有之候因而右不取敢右趣意申合大西清太秋田稻兩人差出鎮撫方申付候此段及御報候也

大森縣

鳥取藩

正月十九日鳥津久光同忠義速署上表して金穀を獻し外債及び海陸の軍費に充てむことを請ふ

〔明治三年ヨリ探索書控〕

臣久光忠義言ス伏テ按スルニ方今海内干戈初テ治リ瘡痍方ニ癒ユ蒼生各其所ヲ得テ四民終ニ其業ニ復ス百度維新ノ運ニ當リ大綱宏張ノ時ニ臨テ聖明上ニ立テ賢哲下ニ在リ策謀不善無ルヘシ。雖モ凡兵馬ノ儲備ヨリ海外各國ノ事務ニ至テ冗費亦不少此時ニ當リテ會計理斷商務至要トス加之舊政府ノ積債外邦ニ夥クシテ今 天朝其宿弊ヲ受ク是ヲ償フニ至テハ實ニ易々ナラス其害モ亦細小ナラス臣父子竊ニ憂之拳々ノ情日夜不可止也今別紙具載スル所ノ員數ノ如祿並金謹而是ヲ闕下ニ奉獻ス此レ聊外債及ヒ海陸ノ軍費万一二供シ國家多事ノ後ヲ善クスルノ一助トセント欲ス伏テ願クハ 聖明臣父子カ丹心ヲ照鑑シ賜ヒ臣久光忠義誠恐誠惶謹以聞

庚午正月十九日

鳥津久光

明治三年

三四五

辨 官 御 中

一 高拾壹万七千七百六十四石昨巳年ヨリ三ヶ年ノ開拜領ノ譯

内 一万三千五百十四石

一金十六万九千七百九十九兩昨巳年十二月高

内 五万三千九百六十九兩三分二朱

永三十七匁五分

六万七千七百六十四石

代三分一

所務米

右三月六日御許容ニ相成候由(防長回天史には三月四日ニ至リ)

正月廿日桃園天皇外三帝の祭日を定めらるゝ旨達せらる

〔從東京西京之下廻〕

正月廿日辨官傳達所ヨリ御呼出ニ而佐竹官掌を以御渡

之御書付寫

桃園天皇

御崩日七月十二日

御發喪七月廿一日

後桃園天皇

御崩日十月廿九日

御發喪十一月九日

後櫻町天皇

御崩日閏十一月二日

御發喪閏十一月三日

仁孝天皇

御崩日正月廿六日

御發喪二月六日

右

四帝 御崩日ヲ以テ 御祭日ト被定候事

正月廿日財産沒籍法を廢する旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

(正月廿日辨官傳達所ヨリ御呼出ニ而佐竹官掌を以御渡之御書付寫の内)

刑法新律追而被仰出候得共差當り財産沒籍之法被爲停度思召ニ付各地方官ニ於而も御趣意ヲ奉體可致旨 御沙汰候事

正月

太 政 官

正月某日薩藩士數十人神戸交易所に闖入して外人を傷く兵庫縣管轄屯所の兵悉く之を捕ふ

〔探 索 書 控〕

(長谷川六右衛門ヨリ差出寫の内)

一 正月中旬比攝州神戸交易所御關門へ薩士二十人計來て無鑑札ニ而入ント云警衛ノ紀藩士カ之ヲ差留入ルコト不許然ル處孰も拔刀ニ而押入夷人五六名程爲手負依之兵庫縣管轄所持之屯所カ多人數打出悉生捕候由右ニ付薩州家カ引渡與候様申入ルト雖モ伺之上ニ無之而者難相渡旨斷候由

正月某日杵築藩士某防長視察の状況を大坂より東京の同藩士に報告す

〔從東京西京之下廻〕

然ハ長州茂斷髮脫刀論並ニ癸亥己來軍功之賞典無之由ニ而意外之沸騰諸隊山口ニ押寄兵器を備己ニ一戰ニ可及之處知事公御出馬ニ而下々御說得尙徳山公長府公御拔ニ而賞ハ二人口ニ三石被下置功之輕重ニヨリ或ハ二十年二十年之御約定ニ而一旦相鎮ヲ申候然ルニ其前諸隊長官之内御拔擢ニ而定備軍ト唱候餘ハ御廢之御沙汰御座候趣ニ而諸隊ヨリ定備軍を如難敵挟ミ隔意尤甚去十二月廿七日木戸準一郎廣澤兵助歸國被致候へと茂諸隊之憤氣一時御避ニ相成哉ニ而一旦山口ニ出頭之上馬關邊に潜伏之由未々居所不相分尙諸郡ニ黨民憤發方今連ニ蜂起最中ニ御座候諸隊大村氏之墳を穿チ死



體ニ尿水ヲ灌シ大村氏ヨリ三田尻廟堂に預置候金子三千兩掠奪悉配分致候由如斯各隊亂暴甚敷故廣澤木戸も潜伏と愚考仕候

一諸隊勢ニ乘シ暴行甚敷御座候處定備軍ニ報國隊尙候仕方今之形勢多分及一戰可申も愚察仕候

一廟堂之役員悉ク退隱或ハ脱走神戸邊潛居ル族茂可有之由松原音三當時山縣穴戸備後之介當時諸隊ヲ押立大參事役相勤居申候

居申候

一各藩々籍奉還ニ於テ藩中變革論ニ而大ニ内割沸騰仕候

一諸藩ニ攘夷之說壯ニ御座候と茂方今 天朝之御形勢ニ被押活眼家時を得候故攘夷家内心切齒太政官之御所置を可奉怨

哉も見聞仕候自然一事變動之上如何可相成も難計甚心痛仕候

一楮幣内相場相止不申光々錢六文八文或ハ十文十二文諸所ニ而違ヒ又ハ諸藩國中融通之楮幣引替無之藩有之民間頗窮迫

仕候而人氣不居合如何と職御所置可相成様御盡力被降 天朝之御威光を以萬 御布告ニ相成候儀 皇國中違背仕者無

之様御國體赫然タル御所置奉祈候右急便大略如斯ニ御座候

正月

右梓築藩士長防に罷越被居候人正月十八日三田尻發船ニテ着坂ノ上東京に仕出ニ相成候書翰寫之由ニ而同藩小野子方

被差廻候を寫取候

正月廿一日我藩小倉戰役の功勞者志方長平吉津辰熊を賞す

〔御國東京往來狀扣〕

一御紋附御上下一具

志方長平

右者小倉戰爭之節大谷間道赤坂鳥越に應援として罷越差入及苦戰陣拂之節茂諸事行届候付被下置旨

一右同一具

吉津辰熊

右同斷之節於大谷間道追打をもいたし格別相働候付被下置旨

右之通被仰付旨去ル廿一日御書付相渡申候

正月廿五日

正月廿三日外國渡航出願規則を發布せらる

〔從東京西京之下廻〕

正月廿三日辨官御所方御呼出ニ而館山官堂を以御渡相成候御布告書寫

外國航海之儀出願之規則向後左之通

一 帶刀以上之者之管轄府藩縣に願出府藩縣於テ篤ト取糺之上外務省に相伺彌不都合之廉無之候ハ、御印章御渡開港場方乘船御許可相成候事

一 其餘之者ハ管轄府藩縣ニテ相糺不都合之廉モ無之候ハ、其旨書面ニ認メ當人に相渡開港場裁判所に右書面持參願出可申同所於テ更ニ當人糺方は迄之通相心得彌以不都合之儀も無之候ハ、同所方直ニ御印章相渡追而外務省に相届可申事

正月

太政官

正月廿三日日本藩知事詔邦小橋恒藏に上京を命し且つ軍艦獻納の事を斡旋せしむ

〔小橋私記〕

正月廿三日詔邦は小橋恒藏を召喚して親しく藩議の決する所を示し其方針を執りて上京盡力すべく且英國に囑托製造

明治三年

三四九

せしめたる軍艦長崎に廻着せしを以て予か素志の在る所を具陳し 朝廷に献納の幹旋を爲すへきを命したり

正月廿三日兵部省及び大坂兵學寮職員任命のことを報する者あり

〔明治三年ヨリ 探案書控〕

東京ニ而左之通被任候

兵部事務	鹿兒島藩 岩倉大納言殿
御用懸り	靜岡藩 田外務大丞
兵部大丞	同 勝安房
武庫正	同 尾兵部權少丞
兵部大丞	鹿兒島藩 平尾兵部權少丞
兵部大丞	同 河村與十郎
兵部大丞	同 藩木ノ、
兵部大輔	山口藩 山田市之丞
	前原 參議

大坂兵學寮役々左之通

御用掛り 總 波殿

正月廿四日久世通熙宮内大丞に任せらる

〔明治二年己正月ヨリ 京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

正月廿七日久世様を使者持參之口上書

手覺

熊本藩知事様

權頭

原田 吾市

教授方面々

福岡 藤次

大島 万兵衛

給用學 市川 齋宮

技戰摘要 大島 泰次郎

數學 片倉 孝三郎

兵要彙覽 佐々木 二郎

荒井 鐵之助

右分課ニテ翻譯御開板ニ相成候事

正月廿三日紀州藩玉城靜逸ヨリ承ル

從二位殿方

愈御安全被成御座珍重被存候然者從二位殿昨廿四日宮内大丞被蒙 宣下畏入被存候依而御吹聴以使者申入候事

久世從二位殿使者

近藤 恭

正月廿五日

正月某日京都留守官を京都留府に合併し知事大參事等を任命せらる

〔明治三年ヨリ 探案書控〕

〔二月十三日附林祥之助報告〕

一密々風聞

一昨日之依 御沙汰留守官京都府ト合併同官中之役員夫々轉任ニ相成候一舉ニ付川田氏大參事ノ趣ニ候へ共病ト稱シ未  
 登京之無之在京之權大參事榎村氏も辭職被申立候哉ニ而候處□居合不申候其譯之元來舊職中栗田口刑罪人ノ一件ニ付  
 京都府彈正臺兩局於東京御糺問中ニ而末々所置不相決候得共種々内情御聽込齟齬之趣も有之哉ニ而京都府知事大參事  
 トモ御役被爲免候迄ニ而彈正臺に門脇氏海江田氏トモ格別嚴詰之御處置ニモ可被 仰出哉之御評議振相成此ノ一舉ニ  
 關係ノ諸藩士草莽ノ面々人氣沸騰ニテ中御門殿並宇田殿ニ者兼而岩倉公ヨリ引力強く候處今般彈正臺ヲ嫌忌之私怨有  
 之さかしら之内通有之歟之由ニ而於東京前書兩局ノ間之御所置偏頗ノ御糺問ニ立到候儀ト粗露顯諸藩士草莽之奮發甚  
 敷暴發鋒銳之萌立依而之岩下氏上表不取敢被差出權大參事榎村氏辭職之事ニも可立到候將川田氏ニも病ト稱し有之廉  
 々不被應哉ニも密說相立實以不容易形勢ニ立到日比尤此御下知トし而從東京烏丸宮内太輔殿土方太政官中辨殿御登京  
 候處西京實地の形勢等御見聞東京之朝議トハ懸隔相違之情實不一方被致憂心有志之官員密々會議孰ニも人心ヲ治メ且  
 朝憲を不被爲失樣致度盡力有之哉之由

中御門大納言兼留守長官

以本官京都府事務取扱被 仰付候事

兼任京都府權知事

岩下留守次官

明治三年

三五二

久世留守判官

被免候事

任宮内大丞

正月

宇田留守判官

右之通ニ付爲心得相達候

兼任京都府權大參事

正月

世古留守權判官

今般當官京都府に合併被 仰付候間此段爲心得相達候

任宮内權大丞

但同府へ引移候義ハ追而可申達候事

六條宮内大丞

正月

鴨脚宮内少丞

留 守 官

勤仕中格別勳精之段神妙之事ニ候今般御改革ニ付本官

正月某日京都在住の士族卒族の貫屬を留守官より京都府に移さる

〔探 索 書 控〕

京 都 府

今般士族並卒地方官貫屬被

留 守 官

正月

正月某日本藩照幡列之助彈正大忠に任し京都在勤を命せらる

〔從東京西京之下廻〕

照幡集議判官

正月

太 政 官

任彈正大忠右 宣下候事

〔別紙〕

照幡彈正大忠

但至急出張可致事

京都在勤被 仰付候事

正月

正月廿六日本藩水田文九郎囚獄權少佑に任せらる

〔從東京西京之下廻〕

私儀東京府少屬被任徒刑場掛被

仰付置候處徒刑場之儀刑部省御引渡相成候間職務被免候段青山權大參府事被申渡候

同日(廿六)刑部省に禮服着用已ノ刻出頭候様尙個人ヨリ被申渡候ニ付出頭候處別紙寫之通囚獄權少佑被任候段被 仰

付候此段御達仕候以上(別紙略す)

正月廿七日

水 田 文 九 郎

正月廿六日井上馨長州より歸京し京攝間に在る長防兵士を集め且つ兵部省の兵隊を請ひて軍艦に搭乘せしめ馬關に向ひ暴徒を討たしめむとす

〔從東京西京之下廻〕

長防動亂聞書

一昨廿六日井上民部大承長州ヨリ歸坂ス曰長防兩國奇兵隊ニテ鎖國シ要所口々關門ヲ設ケ井上出國大ニ困難漸ク一道ヲ得テ上坂スト

一右鎖國陽ハ攘夷ヲ唱エ實ハ私怨之由既ニ山口萩並末藩各別通路ヲ遮斷シ石州ヲ説キ入候由

一石州濱田縣、大森縣ニ移 知事始行方知レス津和野説論同藩力ヲ計リ表ニ同意ス

一逆勢ニ千人計是ハ馬關攘夷ヲ始メ北越奥羽ノ戰ヲ遂シ功者ノ士ト云奇兵隊純粹ノ兵士ノミ逆煙ヲ揚タル由

一當今奇兵隊巨魁松原音藏ト云フ人ノ由此人政府關係人論ニヨリ幽閉セラレ今度逆勢ニ與シ同シ幽閉家ヲ引卒ス

一右奇兵隊農兵ヲ頻ニ入ラシム其策別人ヲシテ百姓一揆ヲ催サシメ其一揆エ奇兵隊出張説得米錢ヲ與ヘコレヲ徒ニ引入ル、由

一廢寺ノ説ヲ大ニ唱エ僧徒ヲ引入ル、由不日總勢五六千ニ至ルヘシト云

一知事公始末藩知事一同ヨリ直ニ説諭アレトモ更ニ聞入レス知事公ハ山口ニ擁護サレ君側ハ弱兵ノミノ由名士ハ木戸君側ニナリシ由

一彈藥糧米多クハ逆勢ニアリト糧米ハ積登シ新穀不殘引取リシ由政府ニアルハ軍艦ノミコレハ彼レ乘リ得サル故ナリト

一逆徒ノ氣脈京坂東京共大ニ通達シアリト當地ニモ聞者多人數入込アリト

一右ニ付井上ハ一昨日着京攝間ノ同國兵士ヲ集メ兵部省ノ兵隊ヲ借り軍艦ニ乗セ馬關ニ向ケ井上ハ昨夜出立東京ニ飛行

ス京攝間ニ得シ藩士武百人兵部省ヨリ得シハ八百人也ト云學校ニアリシ同藩五人井上ノ命ヲ

一當地ニ得シ兵士不殘明廿九日軍艦ニノリ馬關ニ行キ長府城ニ入り合力シテ出戦ハント學校出立ノ書生等奮發ス

一奇兵隊何國何處ニ同黨アルヲ知ラス既ニ肥後國に説得ニ行シカ彼ノ藩ニ縛セラレ説諭事ナラス

一松原音藏佐々木正一富永有隣ノ三人巨魁ノ由

右ハ長藩ヨリ直ニ聞シ儘前後トナク書記スモノ也

正月念八夜

右ハ高松藩香川精一郎洋學校ニ在勤同校ニアル長藩人ヨリ聞取ノ趣爲知越候由ニテ同藩彦坂小四郎大久保來兩人昨夜直ニ私御小屋に罷越見セ呉候ヲ寫取候事ニ御座候尤昨夜外席ニテ福岡藩中村章ヨリ承リ候趣モ大休同様ニ御座候得共如斯不悉是モ同藩人洋學校ニ修學致シ居候人同校中之長藩人ヨリ承リ候トノ事右ニ付同校留學ノ長藩人ハ不殘一昨日廿七日夜蒸籠ニテ歸藩致シ候由申居候事

一久留米藩官脚本月十日十一日頃黒崎ヨリ乗船ノ者囁ニ小倉ニ百姓一揆甚敷同所放火致シ候ヲ目撃シ來リ候由同藩雨森

傳左衛門昨夜前條福岡中村章ノ囁ニ付テ囁申候事  
右之段御達仕候以上

正月廿九日

猪 俣 才 八

正月某日本藩士益田勇長州暴動の原因及び其首謀者人名等を探知報告す

〔明治三年ヨリ探 索 書 控〕

此一級益田勇方相達候書付

一昨年十月來山口藩政府ノ議ニ而是迄兩國之兵隊往年ヨリ戦功盡カニ而跋扈之勢有之候ニ付其弊ヲ除カン爲一先ツハ諸隊ヲ解キ別ニ精銳ノミ編制セントシテ是迄之兵隊ニ壹人ニ付三百目ツ、遣し解隊歸農之令ヲ下シ候處諸隊とも不當ヲ憤り沸騰イタシ候ニ付知事自ラ出馬説諭ニ而先之鎮定相成居候處當年又々四十歳以上之兵隊丈歸農いたし候様布令相成候處今日之紛動ニいたり候也

一右之内ニ之前年より攘夷ニ而國名ヲ轟シ藩ニ而當時御一新後之藩政を執り朝臣ニ相成候者杯開港説ニ變シ言語同斷ノ事故ニ國之兵隊ニ而皇國之爲攘夷之素志ヲ遂ケ存亡ニ關セス一度憤發致るく議論之隊も有之候也

一右何れも藩制改革下ヲ困メ在官ノ有司ノミ利ヲ計ルト云私心ヨリ起リ

山口藩沸騰兵隊中ニ名アル面々左之通

穴 戸 備 後 介

右者政府ヨリ兵隊ニ意ヲ通シ先ハ沸騰之總督たり

松 原 音 三 榊 取 素 彦

右者智謀人ニ絶シ沸騰隊中之謀主たり

明治 三 年

瀧 彌太郎 吉川 敬三 久保無二三

右三人之先年より軍事ニカヲ用ヒ老練之精銳たり

岡村 熊七 大樂源太郎

右沸騰兵隊之參謀たり

一山口城兵隊ニ而守居候由

一金穀彈藥ハ兵隊ニ而奪取居候由

一兩殿とも擁し居候由

一執政ハ多ハ脱走いたし候由

一兵隊精兵ハ二千人ト申候

但長防二ヶ國ノ人心之悉ク兵隊ニ屬居候由

一木戸準一郎ハ此節長府ニ預ケアルヨシ是ハ政府ニ召シ未タ朝臣ナレハ暗殺等之事有之候而之條理立不申候故斯計リタルヨシ

一品川彌次郎ハ彈正少忠ニ徵シタル人之由右之隊中ニ捕ヒ番兵付置候よし

一大村兵部大輔暗殺ニ逢候後死去其骸骨長州へ持歸り葬埋相置候處沸騰兵隊ヨリ其墓ヲ仆シ打碎キ骨ヲ掘出し踏散シ候由

是之兵制改制賞典等も論を立シテ怨ミク様之事ニ立至り候よし

一兵隊ニ而當時朝臣ニナリ或ハ山口藩政府ノ役人ヲ怨ミ斬首イタスヘキ人數十七人アリト云

正月廿九日長崎に於ける耶蘇教徒取締に關し外國人の抗議せし事情等を探り報告する者あり

〔明治三年ヨリ探索書控〕

一邪宗門之儀昨冬浦上村邪徒四千餘人之内千七百八人丈御召捕連島被仰付候處未タ殘徒凡三千人且長崎市中之分凡八九千人共儘ていつま當春之御積ニ御座候哉今度邪徒取締掛り渡邊彈正大忠も當月中旬東京より再着ニ相成申候處右ニ付各國之教師大ニ奮激仕候間正月二日英國コンシユルより近日殘徒又々召捕之由實否如何と尋問仕候其内本國ニ布告し既ニ十三日佛蘭西軍艦一艘十五日英軍艦一艘入港仕候二日之應接ニハ左様之事風説ふるへし役所ニ在て其意ふしとの返答ニ御座候此節又々軍艦を居置ての應接ニ御座候へハ強て進めハ兵端ホリ退カハ昨冬以來之所置寒氷ニ湯を投するの風情返而彼盛ニ我自然減ニ押至り進退實以テ一大難關之時運ニ相成申候而官府ニ被爲於ても不一形事件ニ御座候へハ當春之處てハ未タ一人も召捕ニハ相成不申右等之事情逆も愚筆ニ難奉述御推察奉願候

一肥後一道と申候僧昨春來耶蘇教師エンソールニ出入仕居候處昨冬邪徒御制禁之節同人官府召捕ニ相成入牢仕候夫ニ付右エンソール大立腹仕英コンシユルを以テ裁判所に訴出如何之御處置哉尋問仕候依之知縣事野村方エンソールあて書通して彼ハ肥後ニ返し決而嚴科ハ不仕と返答ニ御座候即其書狀エンソール旅館ニ而直見仕候其外一道身上逐一聞糺候處洗禮驚入王法佛法之事情一ニ彼レ布告仕反テ彼カ探索者ニ相成申候由エンソール方直聞仕候此等之事件外夷方隙を伺れ候由ハ勿論公論へ對シテ御一派之御恥辱乍恐御深察奉願上候

一一道儀彼ニ出入仕候間ハ我々共探索之道閉り居申候處昨冬已來彼エンソールニ偽親仕時々彼へ到り邪教學考候哉當節軍艦差向候故是又長崎市中宗門改之事聞附申候而當月十三日夜又々彼レに參りエンソールシク此節市中ニ於テ宗門改之由其時ニ於て此聖經ヲ讀者偽而信セぬ杯といふ事大ニ神ノ道ニ背ク尙又今日佛蘭西軍艦來る英も近日來るいつま様ニテハ騒動相起り候哉依之アナタ早々明晩之便よて上海へ相送り申度何ぞ不遠免許を取る積ふまハ其節歸國よて万民之爲ニ説法を願度此儀如何哉と申出候依之私シ同遊山村三部儀大ニ驚愕仕候返答して私シ他國ふれハ當節宗門改ふし其内萬一之節ハ宜敷位ニ紛らかし早々歸宿仕候

一天主堂も此節ハ少々用心仕候相手へ相成不申依之事情も不分明ニ御座候共私ニ見聞仕候ニ日本人貳十人拜借居申候處

此節上海ニ陰ニ相送り候由エンソール方聞取申候

正月廿九日長崎認出

二月十二日 京着

湯淺五郎兵衛寫得

正月某日静岡藩知事徳川家達は一族清水家再興につき戸主たるへき候補者三名を推薦して拔擢せられむことを請願す

〔明治三年ヨリ探素書控〕

（正月廿七日毛利莫聞取書之内）

今般御詮義之筋ヲ以清水家名更ニ被立下ニ付血脈之者相撰可申上旨奉蒙御沙汰再造之天恩臣家達ニ於て誠以難有仕合不堪感泣之至奉存候就而ハ津山藩知事松平正四位養父隠居確堂儀先代家齊之庶子ニ而血脈至近既ニ前臣慶喜家政向後見委托ヲも仕置候程之者ニ御座候又水戸藩知事徳川從四位弟恒三郎儀血脈ハ稍疎遠ニ屬シ候得共兄從四位儀ハ先年中一度清水家相續罷在一藩依頼仕候縁故も御座候者ニ御座候並ニ前文松平確堂末男朋麿儀當時手明ニ而父手元ニ長成罷在申候此段依御沙汰一族縁類等之内普途撰擇候處右三名之内ハ清水家相續被仰付可被下候依之恐多ハ御座候得共偏ニ奉仰天裁候間御高鑑ヲ以前三名中誰ニ而も一人御拔擢被下置候ハ、重々御仁慈臣家達之至幸不過之候此段奉仰願候誠恐頓首

午正月

辨官 御中

徳川新從三位家達

二月二日仁和寺宮自今伏見宮と改稱の旨を令達せらる

〔從東京西京之下廻〕

二月二日廻狀寫

仁和寺宮自今伏見宮ト稱候事

二月

太政官

〔全書〕

（二月十八日猪俣才八報告の内）

一仁和寺宮様此度東伏見宮と御改之由

二月二日杵築人某、高田源兵衛を尋ねて鶴崎に來たり高田不在の故を以て同地兵隊指揮士に面會し長州藩諸隊沸騰の情況を語る

〔嘉永年間以降記録〕

今日杵築人高田ヲ尋來り候得共高田之留守之事故野生共而會仕候處此杵築人長州之三田尻迄參り候由ニ付彼地之形勢相尋候處いや近日之處者不怪事ニ而右杵築人先月廿三日ニ三田尻より凡二里計下之西浦に着船致候由之處三田尻に者整武隊出張致候由ニ而右西浦杯者整武隊之受ニ而着船致候得之右之整武隊之兵士共參り如何ふる用事ニ而參り候哉杯と嚴密ニ相尋候由右杵築人之先年來長ニハ餘程知音も有之候由ニ而段々嘯之末格別疑敷者ニ而ハ無之者も存候故賊何様三田尻之本陣迄參ルルしと右兵士共西浦より三田尻迄同伴仕候其途中ニ而兵士共之嘯ニ我藩ニ茂大分奸人有之此奸申ハ當世派之變脱色々形ヲ變シ此當リニ參り我隊之動靜ヲ窺又既ニ昨夜杯者彼奸人共蒸氣登艘何レニか乗出脱走致候テも有之候間此之當リハケ様ニ晝夜無怠見廻り致し居候と申候由又右兵士共之嘯ニ我輩杯之馬關一舉以來此節御一新迄七八年之間茂幾戰爭ヲカ經其中ニハ同志之者幾百人歟戰死致候右之通骨折致候而も今日之運之様ニ成行候而者頓斗水泡畫餅骨折損且何分是迄先年來戰死致候者共に對候而も相濟不申譯ニ而もふ此節ハ我等杯之說相立一國中夫レニ

成レハ幸ニテ天下ニ押出可申若説國中ニ而立兼好人杯ヲ拒マレ候節之先ツ國中ニ而一掃除可致候間何レニセヨ我等杯者長イ事テハ無之杯嘶申候由夫より三田尻之本陣に參り候得者本陣之役人山根某隊中之役人岡某杯に而會致し候由右役人共に之杯築人初而會之由ニ有之候得共先年來右杯築人者長ニハ大分知音も有之事故段々嘶之末彼地之様子少々ハ嘶候由既ニ一旦之君公之御諭ニ而此市集之兵茂解候場合ニ相成居候處其機會ニ乘し彼ノ當世派之洋辭家共兵ヲ引卒シ都々好合有之候ハ、討テ取ル存念ニ而參り候間諸隊も夫レヲ悟り覺悟致候間其備アルヲ知り何事ホシニ引上候事有之候以來尙又愈諸隊同志之者共屯集致シ當時ク様ニ嚴重ニ致候様ニ相成申候此三田尻之我輩武隊屯集山口に之奇兵隊宮市にハ遊撃隊杯と申様ニ凡諸隊貳千七八百三千近く相起り所々口々に屯集致居候由然し君公に茂先年馬關之一舉以來今日ニ至り候而も今度起り候諸隊之説にハ御同意之事ニ而段々政府其外諸隊之役人も正議之者ニ打替り候折柄今暫之處大事之時節ニ付他藩人杯參り候ニ此節起り候者而會仕候得之若も山口に右起り候諸隊ハ内々ハ他藩之力ヲ借り候而奮起致候様ニ共聞へ候得者甚以都合悪しく且口惜次第ニ有之候間決而他藩人者表立タル御使者賦何賦テ無之外ハ壹人も入レ不申足下ハ先年來我藩エハ段々知音も有之事故此三田尻迄ハ通し候得共是ハ一刻茂早ク歸リ可給今暫致し何ニか決着致し候上ニ而ハ兎もアレ何様一先之早ク歸ラレト頻ニ促し候間三田尻に一宿直ニ上船歸藩仕候由

一木戸井上ハ先日一旦一寸歸國仕候得共何分國中ニ而ハ都合悪く候而尙何レに賦參り候由

一先日迄政府ニ而全權之當世派之役人諸隊之今度起り候者其目的と致し居候者兩三人片野とか申者ハ當時者何をへか遁出居候由

一諸隊之役人中ニ茂政府之役人ニ阿諛シ其説ヲ主張致し候者右有之候由ニ而隊中よりも甚迫り候故右様之者ハ當時ハ被召込居候様之事茂有之候由

一當世派之者五六拾人當時長府に脱走致し居候由

一全休馬關一舉以來數戰場ヲ經候而今日ニ至り候處其數戰場ヲ經候諸隊に之格別之事茂無之只上ニ舉リ事ヲ執リ候者ハ

當世派之洋辭家計リニ而右之候故下ニ而ハ憤懣ニ堪兼候處大村ヲ切り候末段々京師ニ而捕レ其中長人壹人ハ姫島とか申處に潜伏致居候處右大村ヲ切り候長人者多ク長之儒者大樂之門人ニ而右之候故大村一件ハ右之大樂内々尻押致タロウト申候處カシテ右大樂之重キ御咎有之候間姫島とかに潜伏致し居候者右之様子承り直ニ歸國致し自分政府に訴へ大村ヲ切り候中之壹人ニ而右之候が大樂杯者決而右大村一件ニハ預リ不申段申出大村罪狀數ヶ條枚舉致し其激論致し候由右ニ付政府當世派之役人共右之者ヲ公然とハ不殺シテ姓名ヲ變シ殺候由是又此節諸隊憤激之一之由

一此節洋辭家被髮脫刀之説ヲ唱候節最初奇兵隊甚沸騰致し隊中四拾六人一同ニ隊ヲ離レ候是皆是迄戰功アル者ニ而其中同論之者壹人ハ如何様ニ茂足ヲ繫レ隊を離レ候事難叶處よりシテ同論之者に信義を立且ハ鼓舞センタメ居腹仕候者も有之候由然ニ右四拾六人も當時之本々之隊に戻り居候由其外不平ニ而引入居候者此節ハ出或ハ諸方に不平ニ而去リ居候者も當時之大抵歸參仕居候由右杯築人嘶之大略ニ而御座候委敷事ハ山口に被參不申候間分り兼候得共何様右迄之處之相分り甚以當時ハ彼表茂切迫之様ニ見受候由嘶申候

二月二日

指揮 上 中

緒 方 様

(緒方とは鶴崎郡代緒方嘉右衛門にて指揮士とは木村弦雄等なるべし)

二月三日彈正臺より阿蘇大宮司阿蘇惟治を召喚す

〔男爵阿蘇家文書京都御記録〕

於當臺相尋候筋有之不急上東京致候様昨十二月中神祇官より相達置候處今以參府不致候ニ付至急罷出候様更相達候也

午二月三日

彈 正 臺

肥後國

明治三年

三六一

阿蘇

大宮司五位殿

三月三日德川家達再ひ清水家戸主選定の諮詢に奉答す

〔明治三年ヨリ探索書控〕

今般清水家名被立下候ニ付奉蒙御沙汰一族縁類之内相撰奉仰天裁候處德川恒三郎松平明丸兩名之内差定可奉伺段猶御沙汰之旨奉畏候得共於臣家達何分果斷再應蒙守奉申上深恐入候得共右兩名中ニ而御拔擢被成下候様只管奉仰天裁度此段再應奉仰願候誠恐頓首

二月三日

靜岡藩知事 德川家達

二月某日德川常三郎を清水家相續人として華族に列し東京府貫屬たらしめらる

〔明治三年探索書控〕

御沙汰書

德川水戸藩知事

右 同人

其方弟常三郎儀清水家相續被 仰付候事

清水常三郎

今般家祿被下定候付而之相當之家令家扶家従已下仕召候人員殘置其餘從來召抱置候士卒之儀ハ地方官貫屬被仰付事

華族列ニ被置東京住居被 仰付候事

右 同人

但家令已下殘置候人員姓名可届候事

現米二千五百石

叙從五位

右家祿として永世下賜事

右 宣下候事

明治三庚午年二月

二月

今般清水家被相定德川常三郎に相續被仰付家祿被定候ニ付其家令已下召仕人員其外士卒共其府貫屬被仰付候事

東京府 同 府

元輪王寺宮家來東京在住之分并元東叡山日代手代已下其府ニ於テ管轄可致事

但右之者共身分御處置之義之追而 御沙汰可相成候間委細取調可申出事

〔編者曰、常三郎の名前條には恒三郎とあり又海舟日誌三年正月十八日の條に「清水家相續確堂殿は老我に付明丸水戸啓三郎殿兩人の内可申上旨御内沙汰」とあり常、恒、啓、三探あるはいつれ正しきか後考を待つ〕

二月三日山口藩は暴動諸隊を討する檄文を發す

〔從東京西京之下廻〕

長州國內檄文

〔本田家文書安津免久佐には長藩奇兵隊滿騰之叫高札之寫奇兵隊ヲ討スル檄文とあり探索書控には「長州一藩に出ス檄文寫」とあり〕  
下を以上を犯すは 朝廷ノ大憲力を以テ理を滅するハ天地之重罪此二ノ者を名つけて逆臣亂賊と稱す逆臣亂賊ハ天下人々之得テ誅する所也去冬脫隊之騷亂を原ぬるに兼而 天朝より被 仰出たる 御趣意を以テ國內之制度改革被 仰出御兩國を以テ益 天朝を輔翼被遊候 君上廣大之御盛意ニ悖リ兵隊一時ニ脫走忽チ附和雷同千百群を成し其一己之私欲より國家無限之騷擾を引出し山口兩道之關門を奪ひ數十之砲臺を築き農商之私財を掠め 官庫之金穀器械を竊ミ 朝廷官人之墳墓を毀チ無罪之兵士を捕縛し愚民を煽動して全國に蜂起せしめ己が惡を掩んとして長官の刑罰を議シ 御國是を誹謗して官員の黜陟を論す蓋其之恃ム處兵力ニ在りて 君上政府を壓し 君威を破壞し政治を攪亂し賞罰を盜ミ大權を弄ス其惡念罪行尤深重東海之水を以テ之を洗フニ盡きかたし然るに 君上如天之廣仁を以共無知を憫ミ親から銃砲紛錯之間ニ立チ百方説諭決シテ前罪を問すと迄被 仰出四藩 君公ニ於テモ往來奔走鎮撫之力を被爲盡候へと茂巨姦大猾共間ニ逆謀を主張し兵士を搖惑し先非を悔悟せざるのみならず 君意を蔑如し凶器を舞弄し番兵

明治三年

三六三



を分遣し農兵を欺誘し恣ニ佐々並ニ出張し終ニ正月廿六日千餘人を以テ 御屋形を圍ミ出入を絶し 君上之御膳米を  
 茂閉チ強詞奪理 君上ニ逼り奉り候ニ至リ實に狂暴凶逆大地茂覆載する事能ハざる處試ニ看ヨ上下古今數千年之間如  
 是之逆臣如是之亂賊ありや苟モ人心を存し耳目ありて今日の形を見聞する者誰カ感激憤懣其肉を食ひ其皮ニ寝ぬるを  
 思はざらん嗚呼 朝廷之德意何を以テカ徹せん藩内之政權何を以テカ立ん 君威何を以テカ挽回せん紀綱何を以テ振  
 作せん紛亂此極ニ至りてハ只一刀兩斷の決あり素より 天兵御征誅被 仰出候ハ必然不日之中ニ有之候へと茂片時茂  
 難捨置四藩を首とし二州ノ間忠憤義烈之士大義に依り精銳を盡し順を以逆を討チ衆を以寡を誅す必摧陷廓清之功を奏  
 し 君上の御憤懣を光霽し春風和氣之域ニ復せん事其期速キニ非ス邦内之士庶名ニ眩せず實ニ迷ハす理を奪ふ力を畏  
 れず上を犯スの惡を助けず順逆を辨し方向を定メ唯國家之急難 君上ノ定意ニ注目し不義亂賊之名を取り千載之辱を  
 貽す事なかれ故ニ檄文を傳へ以テ聾盲之耳目を驚スもの也

明治三年庚午二月

右之外録呈之筋無御座候以上

二月廿九日

西

京

坂 梨 様 三月九日着

熊 本 様 三月十三日着

(編者曰、防長回天史第六編下に二月三日藩廳警備ニ任セル千城隊一申隊ニ酒及ヒ肴料ヲ賜ヒ勞ヲ慰ス此日常備軍ノ名ヲ以テ總ヲ諸  
 郡ニ飛ハシ脱隊ヲ討ツと記シ此の文を掲げあり)

二月某日山口藩は先に暴舉に與せし諸隊の謹慎者に諭達す

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

謹慎之諸隊のものへ

昨冬已來多人數相集種々之難題申募り候ニ付而者御兩殿様御末家様共孰茂御説諭御手ヲ被爲盡候得共更ニ御沙汰筋を  
 奉せず剩へ器械ヲ以テ御屋形に迫り御末家様之御出山を妨ケ或ハ召出候干城隊ヲ遮り其他亂暴之所業不少依之嚴重之  
 御咎被仰付之處前罪を悔ミ改心せしめるニ付格別寛太之思召を以御免被仰付候向後屹度上下之分を考ヘ不義不法之振  
 舞無之様可相嗜もの也

午二月

(編者曰、防長回天史第六編下に五日兩公並ニ三支藩知事<sup>山口藩及ヒ大參事以下列座シ</sup>諸隊役付ヲ召シテ淳々懇諭スとあり蓋し本書  
 は其際のものならむか)

二月五日在大坂本藩猪俣才八長防二州の事情探索書を得て報告す

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

高知藩より藝長二州探索人差出候處左之通申出候由ニ而川原庄太郎田岡祐吉より指出候書付寫

長防二州事情左之通

一 彼藩政府之兵隊ヲ干城隊と相唱孰も世祿之上已八萬余之人員ニ而諸隊よりは是ヲ極因循隊ト相賤メ干城隊ハ諸隊ヲ度  
 外ニ成物數奇ニ勞ヲ好ムカ如ク卑シメ互ニ相讐敵トシ來候先年内亂ヨリ之事之由  
 一 諸隊ト唱候ハ公明正大之義ニヨリ尊攘之大典ヲ踏同志兄弟之約ヲ結父兄顯職ニ在ト雖正義ニ不叶者ハ子弟是ヲ敵トシ  
 去テ同志之隊ニ入奇兵隊報國隊綱常者八幡<sup>ナシキ</sup>〇〇神武御盾宵登狙擊行學遊擊其餘數十隊都而二萬餘人は是ヲ諸隊ト唱へ其  
 餘農商輕卒ハ兵隊ノ數ニ不入二國上下之兵舉テ拾一萬四百七十餘是戊年取調ニ相成候由  
 一 諸隊者多年日夜憤發沐雨栴風之勞ヲ不厭政府者是ニ相反シ尊攘藩屏ノ任タルヘリニ可立至様之政跡不相顯反テ大ニ相  
 忌憚シ益因循之形勢ニ相至ヨリ諸隊議論熾ニ相發御預慮企救郡長防海岸悉皆諸隊ニ御委任ニ相成候ハ、藩屏之職掌ノ  
 任タル成功可相立旨敬願申出候處政府不許由

十一月十八日諸隊山口ニ迫ル知事公御取扱ニ而一度三田尻ニ引干城隊ヲ諸隊ニ器械可指出旨申來候ニ付悉皆指出追而諸隊より探索ニ及處右之通兵器ヲ取上置諸隊ヲ千人已屋へ集置一時ニ可燒討勢ニ付諸隊郷町ニ有之候器械悉取上諸要所ニ砲臺ヲ構へ三田尻山口森宮市等ニ有之候器械ヲ諸隊方取固嚴然ト戰爭ノ勢ニ及千人已屋ニ迫ル

一同廿三日干城隊より千人已屋へ切入干城隊即死拾貳人諸隊即死壹人怪我人二人此一舉ニ諸隊山口ニ討入終ニ干城隊ヲ追拂ヒ諸隊知事公ヲ守護シ山口三田尻兩處ニ屯集知事公御扱ヒヲ以平治ニ至是より干城隊諸事諸隊之指圖ニ隨ト云

一同廿六日再知事公御取扱ニテ干城隊ハ萩ニ引御處置ヲ待ト云

一宍戸一統御一門タルヲ以是迄國政ニ不預此度論議條理相立候依テ一同諸隊ニ組シ就中宍戸備後介殊ニ兵府ヲ司リ自家來ニ大隊余有之由

一諸隊ニ出頭盡力之面々ハ兒島直三郎中島勝助瀧家太郎

一軍監之如キ職務ニ而出頭品川彌次郎梶山禎助福原幾彌

一表軍監ニ而者杉孫七郎兒玉内人

一德山藩ハ舉而諸隊ニ結ヒ下ニ〇〇隊ト唱ルハ五六百人計ニ而倍臣ヨリ里正共諸隊ニ隨然共諸隊ノ數ニ不入ト云々

一政府出頭ノ奸物ト唱ル金友幸之進無敵幸之丞出仕往來之節有志之徒七八人計ニ而令斬殺候由

一十二月十三日知事公命ヲ以豊前企玖郡ヨリ長防海岸一切諸隊ニ御委任ニ相成野村和作中島勝助松田勘藏三人右之趣太政官へ達之たま上京之由

一當節諸隊より有志之面々皆千人已屋へ集候様諸巷へ立札ス干城隊より追々日増ニ合會之由

一知事公初より諸隊ニ御同志ニ而當時政令大概諸隊より出候追々政府一變シ諸隊も安堵ニ至ト云

一老公ニ者萩御在城干城隊彼之處ニ有之由諸隊此節持場々々に引取候由

一岩國堺より山口近海者諸隊是ヲ固長府ノ海者報國隊引島者農兵五六百有之諸隊より固之萩海岸菊濱者五六町計リヲ砲

臺築切力士農兵輕卒三大隊ニ而固之云々  
右書付高松藩彦坂小四郎が借受寫得候ニ付御達仕候事

猪 俣 才 八

二月二日

二月六日府藩縣公廳を自今廳と稱せしめらる

〔從東京西京之下廻〕

〔二月六日廻狀を以申來候寫の内〕

府藩縣公廳自今總テ何藩廳ト可稱事

但支配地下方ヨリ差出候諸願伺届等ハ某御役所ト認メ不苦候事

二月 太 政 官

二月七日西班牙國公使參朝し諸藩兵途上を警衛す

〔從東京西京之下廻〕

來ル七日西班牙國使節參 朝候間此旨相達候事

二月 太 政 官

明七日第一字西班牙公使參 内候ニ付道筋警衛中付候條別紙繪圖而之通分配差出可申候事

但第十一字出張公使通行之節之捧銃可致候事

二月 兵 部 省

別紙圖略  
熊本藩兵二十人馬場先邊

二月七日山口藩公用人宍道直記同藩兵隊沸騰につき干戈を以て之を鎮定すへき決心なる旨を申告し又輩下守衛の藩兵一大隊に歸藩を命せられむことを請願す

〔明治三年ヨリ探索書控〕

長州より届書

去冬兵政革一條より隊卒沸騰鎮撫相加候得共彌我意申察候ニ付時宜ニ寄干戈ヲ以處置致候心得ニ罷在候此段前以御届仕置候様山口表より申付越候以上

山口藩公用人

宍道直記

二月七日 辨官御役所

別紙之通御届仕候ニ付而之兼而爲 御守衛差出置候藩兵一大隊暫時歸藩被 仰付度此段御願仕候様山口表より申付越候以上

山口藩

同

人

二月七日 辨官

御傳達所

二月七日防長暴徒沸騰につき諸藩兵に各地の警衛を命せらる

〔明治三年ヨリ探索書控〕

〔正月十九日の條掲記せる栖本英之允報告書の續き〕

一 二月七日兵部省より御呼出寺西權大屬を以別紙御渡且鹿兒島藩へ一大隊兵庫爲警衛出兵申付候間鹿兒島藩兵出張之上ハ大坂表に轉し警衛可致旨口達候也

但糧食屯所諸事其藩ニ而計ひ可辨事

鳥取藩

鳥取藩

一 其藩精兵一大隊兼而西京警衛申付候所今般改而大坂并兵庫警衛申付候條半大隊宛右兩所へ出張可致此段相達候事但到着之上ハ當省大坂出張に可届出事

二月兵部省より鳥取藩に御達

一 其藩兵之儀貳百人十八才ヨリ三十才迄軀幹長大強壯之者撰出し當省大坂出張に早々可差出事

一 兵庫表へ 一大隊鹿兒島藩 四百人計之由

一 西京表へ 一大隊高知藩 七百人計之由

一 東京表へ 一大隊佐賀藩 (下略)

栖本英之允

〔明治三年ヨリ探索書控〕

〔二月十三日附林祥之助探索書別紙の一節〕

一 和歌山藩に浪華おゐて被 仰出候者草莽沸騰をるニ付兵隊千五百相揃置候様云々  
一 備前藩に早打到來候得共さしたる事件も不相聞山口藩云々ニ付兵隊ヲ備置脱走人參候ハ、召捕可申との御趣意之事

〔防長回天史第六編下〕

(明治三年春期ノ大勢抄略)

(前略)時ニ山口藩暴徒益々勢ヲ加ヘ敬親父子數次懇諭スレドモ服セズ狂激益々甚シ二月七日ニ至リ藩知事遂ニ上書シテ藩兵ヲ以テ臨機處置スルノ已ムヲ得ザルベキヲ陳シテ其允許ヲ請ヒ又在京公用人ヲシテ長藩兵一大隊徵兵トシテ東京ニ在ルモノ一時ノ歸藩ヲ允ルサレシコトヲ請ハシム朝廷件ニ之ヲ許シ更ニ三府五畿山陽山陰西海四國ノ藩縣ニ令シ山口ノ暴徒力竭キテ遁走スル者アルベキヲ以テ豫メ之ニ備ヘ緝捕ヲ嚴ニセシム翌八日民部大丞井上馨ノ請ヲ許シ之ヲ山口ニ差遣ス

二月八日山口藩隊卒處置に關する令達あり

〔東京より之御用狀扣〕

二月八日辨官傳達所より即刻御呼出ニ付御所使罷出候處別紙御書付一通林少辨を以御渡  
山口藩隊卒沸騰ニ及ヒ處置方之儀伺出候ニ付不得止節者臨機之取計可致旨被 仰出候就テハ萬一右之徒脱走ニ可及モ難測候條兼而無油斷取締可致候此段相達候事  
但シ脱走之者見當次第召捕可届出事

二月

太 政 官

二月八日日本藩の甲鐵艦天覽の爲め品海に廻航すへき旨の令達あり

〔東京より之御用狀扣〕

二月八日辨官傳達所より即刻御呼出ニ付御所使罷出候處別紙御書付一通林少辨を以御渡  
兼而言上候其藩甲鐵艦此程到着致候様ニ付 天覽被遊候間至急品川海へ差廻候様 御沙汰候事

熊 本 藩

二月

太 政 官

二月九日桑名藩士貳百七十一人の謹慎を宥免せられ且つ我藩に保管し居たる徳川伊達二家の臣亦禁錮を免除せらる

〔明治三年ヨリ探案書控〕

公用方より廻來長谷川六右衛門書取  
二月九日御達

免候事

二月

兵 部 省

桑名藩知事

松 平 定 敬

別紙名前略之

貳百七拾壹人

〔東京より之御用狀扣〕

二月九日兵部省傳達所より即刻御呼出ニ付御所使罷出候處井後大録を以御渡之御書付一通  
熊本藩知事

細 川 韶 邦

別紙之者共兼而禁錮申付其藩に預置候處今般被差免候條藩々に可引渡事

二月

兵 部 省

(別紙) 元徳川慶喜家來

山 田 八 郎

淺 田 麟 之 助

同

幕 内 幡 次 郎

同

小 原 弘 藏

同

明 治 三 年

三七一

同	石崎益之助	同	杉浦多嘉吉	同	久保常吉
同	田中銀次郎	同	關彌太郎	同	伊久間市之助
同	小宮山彦之丞	同	森川善之助	同	土屋文次兵衛
同	蓮沼清三郎	同	小坂三十郎	同	小澤敦治
同	青木由之助	同	中村兼太郎	同	元伊達慶邦家來
同	淺井陽	同	龜谷丑太郎	同	小竹銚之助
同	海原老 鍵三郎	同	武川勇次郎	同	小田邊其九次
同		同		同	大宮靜橘

二月九日築地運上所より民部省へ電信線を布設す

〔明治三年ヨリ探索書控〕

(二月十四日附在東京毛利莫探索書の内)  
午二月三日東京府鳥取藩に申越書寫

一今般築地運上所方民部省に之傳信機出來候ニ付而ハ般治橋御門馬場先御門内に引通相成候間爲心得此段申入候也  
右ニ付二月九日鳥取藩邸(上八代洲河岸大)外往還ヲ深サ壹尺五寸計リ鑿リ竹の筒ヲ埋其中ニナニカ塗タル細引ヲ引  
通候よし尤其細引ハ金ニ而ハ無之よし

(備考)

二十五日(明治二年)是レヨリ先キ八月横濱ニ於テ燈臺寮ト裁判所トノ間ニ電信線ヲ架設シテ試ムル所アリ此日横濱裁  
判所ヨリ東京築地海關ニ至ル遠距ノ架設ヲ竣工ス初メ安政元年亞米利加合衆國使節水師提督ベルリ再來シテ日米條約  
ヲ締結スルヤ幕府ニ贈ルニ汽車鐵道ノ模型ヲ以テシ其運轉ノ狀ヲ示シ又電信線ヲ假設シテ通信ノ敏速ナルヲ實見セシ  
ム幕府當事者只設備ノ奇ニ驚嘆セシノミ是ニ至リ始メテ其設置ヲ見ル(防長回天史)

二月九日豊津藩元小倉藩知事小笠原忠忱汽船を献納せむと欲し該船購入費の内金八万兩の貸下を請願す

〔明治三年ヨリ探索書控〕

先般蒸氣船壹艘并乗組入費共献上仕度奉願其後彼是穿鑿仕候處下直ニ而者好敷無之拾五六万兩已上之代金ニ無之而ハ  
十分御用途ニ相立不申候然ル處右高之金子當分取合兼候間明年分被下候御藏米引當ニ而當分八万兩急速拜借被仰付被  
下度奉願候然ル上ハ船之儀當藩ニ而相求早々献上可仕候此段奉願候以上

豊津藩公用人

平井節藏

二月九日 辨官 御中

(備考)

明治三年

三月十五日豊津藩舊小倉藩知事小笠原忠忱蒸氣船一隻大有及ヒ其運用費ヲ献セント請フ此日之ヲ聽ス(防長同天史)

二月九日高知藩京都出兵費金壹万兩の借用を請願す

〔明治三年ヨリ 探案書控〕

此度當藩精兵半大隊西京御警衛被 仰付候處至急之儀ニ付手當方難澁仕候廉御座候間金壹万兩暫時御取替拜借被 仰付度奉願候已上

二月九日

高知藩副公用人 原 四 郎

願之通聞届候間大藏省ニ於て可請取事

二月九日長州支藩は藩内暴徒を討伐するに際し豫め敗兵の逃亡せむことを慮り其の警戒處置等を隣藩に託す

〔明治三年ヨリ 探案書控〕

一筆致啓上候知事様益御機嫌能可被成御座奉恐悅候各様愈御堅剛被成御勤珍重存候然之山口藩内近日之形勢略御聞及も可有御座先般從 天朝被仰出候御趣意ニ基キ舊冬以來藩内常備兵制改革仕候處森猶不平之徒一時之紛更ニ乘シ千百嘯聚處々炮臺ヲ築反形顯然ニ候得共素ヨリ無知之兵隊ニ候得之寛容之取計を以種々説諭仕候得共兵力ヲ恃ミ暴威甚布官物ヲ掠奪シ無辜ヲ捕縛シ愚民ヲ煽動シ一揆強訴ヲ起さしめ候杯無限暴逆絶言語候次第一々縷述仕候も不可堪事共ニ御座候終ニ今日ニ至リ議事館ヲ圍糧食ヲ閉チ凶器ヲ以知藩事ニ逼候次第古今未曾有之大逆最早寛宥之道も盡於知事も奉對 天朝申譯無之判然討伐ニ決心被致候得共何様圍城中致方無之因四藩始國內之義兵ヲ以征誅仕候邦内動干戈候儀之如何ニも 朝廷列藩ニ對シ不相濟事ニ候得共千萬致方無御座委細之儀之 朝廷に御届申上候事ニ御座候然ル處干戈

ナ用候時ニ至リ萬一敗卒兵境ヲ出御隣藩ニ罷出候義可有之哉難測藩内より手ヲ下し候義も一時難相届候間天下之惡皆一と被思召境上ニ御兵隊御操出御取押可被下候御手ニ餘ハ、盡く御誅代被下候様奉願候此段以書中得御意候間可然御所置所冀候恐惶謹言

二月九日

清末 大 參 事  
岩國 大 參 事  
徳山 大 參 事

香春藩 大 參 事 様

〔編者曰、防長同天史第六編下に七日四支藩大參事連署シテ書ヲ廣島津和野兩藩ニ送リ今ヤ兎徒ノ暴戻寛恕シ難キヲ以テ將ニ義兵ヲ募リ勸滅セント欲ス其時ニ當リ通官スル者アルヲ慮ル因テ豫メ境上ニ兵ヲ出ダシテ之ヲ捕縛シ若シ反抗セバ假藉ナク誅伐セントヲ囑シトあり〕

二月九日山口藩、藩内沸騰諸隊を討伐す馬關に在る常備軍等豊浦徳山岩國三支藩の兵と共に三道より進み暴徒と戦ひて之を破る

〔明治三年ヨリ 探案書控〕

〔在兵庫長州人内海精一より在東京伊藤俊輔に與へたる書簡 簡イ〕  
一書拜啓仕候爾來之益御壯健被爲成御盡力奉大賀候然之同藩脫隊之始末之是迄確報無之處昨十四日木戸氏使として大賀幾助と申者下ノ關七日出帆ニ而當港へ罷越且同氏之書面も有之候間時機之緩急諸兵之分配前途之目當逐一期取候處今朝又々近報有之一昨十三日三川尻出帆ニ而丁卯艦入港いたし候ニ付船長佐藤に面會相尋候處大概大賀之中分と符合いたし大賀之出兵之決議ヲ聞直様乗船佐藤之戰爭後出帆其邊少々之行違ハ有之候得共大同小異ニ而先佐藤之方戰爭後之確報ニ有之候戰爭之始末諸兵之手配等聞取之儘形行申上候一ノ手常備軍三百人四番大隊貳百五十拾人大坂伏水ヲ引取之人數八十人上ノ關ヲ援兵百人計福原一ノ手軍艦ニ乘込小郡へ上陸同所關門ニ而相戦候様子二ノ手長府清末一番隊一

明治三年

中隊舟木山ノ井ニ而相戰候よし三ノ手海軍三田尻へ應援陸軍岩國徳山之兵勝坂關門ニ而相戰諸手大勝利を得直ニ奸賊追拂候様子初日九日夜軍艦馬關を發し翌十日十字比古諸兵小郡へ上陸十二字比古争鬪を初メ大激戰ニ相成凡七方發之彈藥ヲ費し候様子死傷人ハ唯今取調中ト申事ニ御座候山ノ井ノ戰之賊兵一大隊位ニ而左程苦戰ニも無之様子其内一小隊之直ニ銃ヲ組ミ降伏いたし候様子其殘兵大道之本陣を襲ひ一日本陣ヲ退キ候様子候得共忽チ引返り賊兵悉ク退散徳地口迄押退ケ候様子其内一大隊計宮野は屯シ器械ヲ山口へ出し是又降伏致し候様子唯今殘賊ト申者徳地口一手ト遊擊軍ノ花岡へ脱シ候三小隊ト萩口ニ屯集する赤川敬三一手ト僅ニ三手ト申事ニ御座候是も不日追討ニ取掛候様子賊魁佐々木正一内藤源吾等捕縛いたし候様子其内富永有隣潮原恭藏等ハ手廻り不申様相聞候井上氏引卒之東京兵之間ニ合不申候戰之十日十一日兩日ニ而過半打片付候様子井上氏之十一日夜五字當港場相成候残り三百人ハ十三日ノ夜五字比出港いつきも初手之間ニ合不申候先之今日迄之形勢荒増右之始末ニ相聞候間至急大亂筆を以申上候ニ付前後御推讀可被下候右委敷ハ後便を待御報知可申上候余取紛レ讓後期之時急々頓首

二月十五日夜

内海精一

伊藤藤様

二白檄文寫一卷差上申候山田氏鳥尾氏楡氏へも不惡御鶴聲奉願上候

〔從東京西京之下廻〕

二月十八日朝鹿兒島藩脇田市郎山口藩船越虎之助方に罷越聞取之趣廻報  
 三田尻邊ニテ戰争海陸發炮之風説之萬一賊徒逃走等之節取押に之ぬめ所持之蒸籠二艘廻船陸軍ト爲相鬪折々發炮いたし候儀ニテ三田尻ニテ海陸之戰争ニ之無之戰争之次第ハ三田尻ヨリ一里半余もあらん厚狹市多尾ト申所之賊ヨリ之關門に政府之隊横合ヨリ不意ニテ攻撃直キ賊敗夫ヨリ厚狹市川船橋ヲ奪取關門等相固メ居同所之要具器械等も相揃居候ニ付大ニ難澁相考居候由候得共存之外賊急敗之由又小郡大道往ニテ大ニ苦戰之由ニ候得共是又賊敗走戰死降伏又ハ脱

走等ニ相見一先靈靜相成山口往還も相披キ安堵いたし候由尤三田尻其外燒拂等之説更ニ右様之儀無之井上氏東京表ヨリ引揚來候兵隊茂右戰争之間ニ逢不申哉之山漸去ル十一日片付之由且御隣藩等ヨリ御應援之儀も無之由  
 福山藩關根敬三ヨリ廻報

規唯今長州舟越氏弊宅に來訪話曰去ル十三日出帆之同藩人昨夜神戸に着港致し藩内之事情報知有之候者去ル九日未藩之人數本藩之常備兵長府ニ出等邊力山口四ヶ所之要路ヲ專領致し候過激之徒ヲ横合之上山上ヨリ打下シ候處激徒ハ不意ヲ被打候儀ニ付狼狽大ニ敗北致し死傷も夥數藩軍終ニ四ヶ所之道路ヲ排き翌十一日ニ至而之全鎮定致し候よし一説之双方共餘程苦戰致候よし

右等も未タ知事ヨリ申來り候譯ニも無之候得共確乎之藩報ニ付今日右之次第坂府は一應御届申置候吉田氏來話ニ御座候乍序御報知申上候草々如此々々

十七日

右之段御達仕候事

二月十八日

猪俣才八

二月九日在東京山口藩兵本日より逐次歸藩の途に就く

〔探索書控〕

（長谷川六右衛門より差出寫の内）

一山口藩東京守衛人數三百五六十人二月九日ヨリ追々出立歸國相成候由但國許ニ而兩度戰爭有タル由

二月十日日本藩太田尙彦に北海道支配地開拓用懸を命ず

〔記室日記〕

明治三年

三七七

明治三年

覺 郡政局  
少參事に

太 田 尚 彦

右者蝦夷御支配地開拓御用懸被 仰付候條此段可被達候以上

二月十日

二月某日名古屋藩集義隊長渡邊美太丸等軍務官に林鋼せらる

〔明治三年ヨリ  
探索書 控〕

(公用司より米長谷川六右衛門書取の内)

名古屋藩内情風聞

二月十日比同藩集議隊ノ隊長渡邊美太丸千賀半五郎太田圓藏軍務官ニ而嚴重禁鋼梶川吉介角田某此外ニ三名禁鋼被中付右趣意未タ不詳一説ニ渡邊千賀等巨魁トシテ同盟多人數大山藩知事蕉邸ニ未タ家族等在留スル所ヲ放火シ其舉ニ乘シ大參事權大參事田宮如雲渡邊遠山等ヲ斬奸スヘキ陰謀同盟中ヲ反覆訴訟セシ者アリテ露顯シ渡邊千賀以下巨魁捕縛セラレシ也既ニ毒殺ノ企モ有之其原山ハ不知私怨ノ山右渡邊千賀以下何レモ勤王ヲ主張シ一昨年渡邊新左衛門已下三十餘人嚴科ニ被處右之内十四人斬首申付タルモ此黨ノ議論ニ出タルヨシ渡邊新左衛門等伏水事件不慮之變動ニ付事情方向不分明方宗家之爲ニ義ヲ唱ヘタル迄ニ候ヲ如斯殘酷ノ所置セシ豈天理ニ適センヤ

〔全書〕

一名古屋藩動搖之儀者田宮如雲殿ヲ惡ミ候者多分ニ而大宮ヲ起サント欲スル所ヲ程能露顯及依之如雲殿大參事職之其儘ニ而春來太田宿ニ出役之姿ニ而被居候由丹羽大參事者右等之事件東京に内奏ニ罷下ル當時中村大參事ニ而國政掌ルノ由尤右大書ニ申實情ハ万石以上以下之輩減祿ノ論ヲ不平ヲ抱居如雲ノ機柄ヲ惡ミ候由也

五月

二月某日山口藩は沸騰諸隊の誘惑に迷はず正道を守るへしとの旨を藩内諸民に諭達す

〔明治三年ヨリ  
探索書 控〕

山口藩在々に御布令

去冬從天朝御沙汰筋ニより御軍制御改革被仰出まゝる新除隊之兵士とも騒立其上猥りニ徒黨を結び遂ニ宮市ニ屯シ諸方之農町之兵士等を呼集メ多人數引纏ひ其威勢を恃ミ勿躰なくも御上に迫り種々難題を申募を共深く御了簡ありて御咎もなく却テ御兩殿様を始メ御末家様方執も御入割御論サレ御手を被爲盡是迄之軍功之御賞美も御手厚く下し賜レ共一向御沙汰之旨を畏レズ而已ならず剩へ御用ありて召出たる干城隊を佐々波にて支へ又ハ銃炮構エ候テ晝夜御屋形を圍ミ御用之往來等迄丸々塞ぎ御當役方之御出仕を押留御目附を自分共之陣家へ連歸り又ハ豊浦様山口御出迎之道筋を妨ケ殊ニ御藏之米銀を盗出シ自儘ニ取遣ひ又ハ諸郡固場之鐵炮彈藥を掠メ取其外兇憎千萬之振舞言語同斷一々數へかたし實ニ御上ミを恐レ奉らす御國恩を忘却しふる事有間敷事而已ニ候御兩國ニ住居數百年之御大恩を蒙りふるもの其有様を見てハ如何ニも手を懐ニしてハ居らぬ事故右等之亂暴をなし上を犯すものを義兵と申候而御末家様方其外忠義之人々憤り餘り之處より起り御威光之立候様ニと手段を盡したる事なきハ態々其筋相考へ在之もの迄も心得違之なき様ニモあし是迄隊中之者何と歟言葉を工ミよし世間之人心を惑しふるより不得心之者ハ隊之世よりなりぬらハ田畑ハ作り取りニもなり御藏之米銀ハ皆下々の自由ニもなるやうにおもひたるものニあるへけを共全く左様之事にて御國を治るものにてはなく御上之御威光はまハこそ追制も強盜もなく下々のもの安穩ニ暮さるゝ事なり扱前段之通り御上は對し奉り御無禮を働きたるものハ重々御咎あるべき苦なき共是迄之惡事を後悔し御斷申出をハ格別御心入之恩召して此度ハ寛大之御沙汰あるなり已來一統之もの共彌下として上へ背き非道をふしてハ迎も送らるゝものニ而えなく天

明治三年

三七九



雲のまたニ住居ふらぬものと申事能々合點をありし

二月

〔編者曰、防長回天史第六編下を見るに二月十日農商ニ布告シテ兎徒ニ助力シ或ハ食糧ヲ供給スルヲ嚴禁スとあり或は其頃の書ならむ歟〕

二月十一日日本藩鎌田平十郎權大參事に任せらる

〔從應二丙寅年正月至明治三年  
江戸京都來狀扣〕

以別紙申達候鎌田平十郎儀權大參事被 仰付旨 宣下之趣御書付去ル十一日相渡翌日 朝廷御請相濟申候且又集議院之儀之舊職閉院被 仰出候付同人儀一ト先歸藩被仰付同十三日妥許差立候此段爲可申達如是御座候以上

二月十七日

井澤權大參事

大參事衆中

權大參事衆中

二月十一日山口藩は藩内暴徒を掃蕩し翌日使を隣藩に遣し逃竄者の處置を協定せしめ且つ各官の黜陟を行ひ暴徒の巨魁を獄に投し連累者に謹慎を命す

〔防長回天史第六編下〕

〔明治三年春期ノ毛利氏抄略〕

十一日豊浦藩知事第二軍ヲ率テ舟木ノ脱兵ヲ破リ先ヅ山口ニ入ル第一軍第三軍亦大ニ脱兵ヲ破リ接踵シテ到ル兩公庭上ニ引見シテ勞ヲ犒フ木戸孝允ハ憚ル所アリ山口ヲ避ケ常榮寺ニ入ル召命アリテ登館シ兩公ニ謁シテ兎徒敗走シ重圍解ケタルヲ賀シ其今日ニ至レル經過ヲ語り夜ニ及ンテ退ク十二日徳地ヲ根據トシテ宮野附近ニ屯集セル殘徒追討ノ令ヲ發シ兵ヲ配備シテ警戒ス而シテ内藤次郎右衛門ヲ津和野廣島兩藩へ井上兵衛ヲ大森縣へ差遣シテ兎徒ノ逃竄ニ關

スル處置ヲ協定セシメ常備軍元長官等ノ謹慎ヲ解キ木梨精一郎ニ軍事權少參事專務中島染之助ニ第四大隊長心得專務兼常員人ニ第四大隊軍監ヲ命シ松原晋三ノ陸軍長官參謀兼權大參事ヲ免ス又第四大隊中ヨリ小郡ニ出張シテ暴徒討伐ニ盡シタル三中隊ニ感狀ヲ授ケ佐々木祥一郎篠川多仲室本宗之助河越繩内藤源吾富永有隣篠窪楠五郎中村貫一郎鈴川誠之助田中五之助潮田虎市新坂小太郎横山小太郎等ヲ暴徒ノ巨魁トシテ揚リ屋ニ入レ第一大隊ノ山口ニアリシ二中隊及ビ平賀李赤川惣助並ニ暴徒ニ助力シタル國司健之助ノ家士佐々木祥右衛門以下四十九人ニ謹慎ヲ命シ降伏シタル諸兵ノ監護ヲ四支藩ニ委託ス〔編者曰、富永有隣は揚リ屋に入れたる如く記されども他の諸書に脱走せし如く記載しあり如何〕

〔明治三年ヨリ  
深索書控〕

長防鎮定之事

一 去月廿八日立之急飛ニ申來ル佐々木祥一郎川越<sup>マ</sup>紘<sup>マ</sup>室本<sup>マ</sup>寬<sup>マ</sup>之助内藤源吾右四人此度暴發之主謀人ニ付生捕ニ成リ殘ハ大底降伏謝罪富永有隣其外四五名ハ脱藩いたし候趣

右備前某聞書(三月の聞書なり)

二月某日山口藩大樂源太郎諸生數名を鶴崎に派し毛利到に窮狀を訴へ援助を求めしむ

〔鶴崎毛利文書〕

拜啓先以御佳安被爲在奉珍賀候生干今禁鋼此節に至九死一生の中に罷在候御憐察是祈然ハ弊藩の内訌諸隊長官措置失當より相起り最早恢復六ヶ敷三千之兵士ハ釜鑊の中に在り皇國の大亂先自弊藩始候誠に悲泣號哭の至閩國の様子定て御聽及可被遊候半と奉存候小生共計盡謀極扼腕切齒而已此輩も不得止棄父離母何も包胥泣秦の情實を以て拜趨仕候間御引接被下弊藩の勢ひ難極候とも不屈不撓正氣を主張往先の目的等吳々も御指揮奉願ひ候也四國十三藩の會議所えも可參志と相見候其外御指揮を以て何れなりとも跋涉仕候様奉願候別て願ひ度事は檄文に御座候是非先生之正筆を以て

明治三年

三八一

四海を感動仕らせ皇國今日の勢是非共和合従の外無之乎と奉愚考候此儀は此輩の口頭ニ付候間内亂始末御聽取是祈  
發船切迫不能稱讓萬々御諒察可被下候乍失敬御家門様へ宜布御傳奉願候時下春寒爲國御自珍專一ニ奉存候草々敬白

朝風再拜

冷 咲 老 先 生

函 丈 下

二白先日拜趨之桑山生其外皆在釜鏡中亮之々々

二月某日大樂源太郎更に書を毛利到に贈りて長州内亂の事情を詳報す

〔鶴崎毛利文書〕

二月日不明長人大樂源太郎の毛利到へ贈りたる書

此度防長國內紛擾之次第ハ去冬十一月兵制變革ノ事ヨリ遂ニ今日ニ立至り候其故ハ是マテ平常屯集ノ奇兵整武游擊振  
武銳武健武ノ諸隊一先令分散改テ常備軍ト相唱へ胡服ハ素ヨリ被髮脫刀悉皆西洋ノ規律ニ倣ヒ候編制ニ付兵士憤激除  
隊相成候様追々申出候處不殘差免置長官共要路之益吏ト申合セ討手ノ兵ヲ差向候ニ付諸隊ニ於テモ防禦ノ手配嚴重相  
備候内知事公出馬被致諸隊長官共へ種々説諭相成願之廉有之候ハ、密封ヲ以テ差出候様被申付候ニ付舊長官ノ内不正  
ノ徒且要路ノ役人姦佞ノ輩等夫々御處置相成候様印封ニシテ差出候處舊長官共エハ慎被申付姦吏ハ自分要路ヲ退キ一  
旦鎮靜ノ素形ニ相成候然ル處尙正月十二日夜中舊長官共謹愼中ヲモ不憚豐浦郡工脫走イタシ表ハ朝命ヲ奉シ常備軍編  
制ヲ口實トナシ諸隊ノ非ヲ擧ケ已ノ惡ヲ掩ヒ且謹愼身柄モ各宅ニテハ區々ニ相成恐入候ニ付一處ニ引纏ヒ謹愼罷在候  
段歎願イタシ置其實ハ諸處ニテヒテ密ニ兵ヲ募り候趣旁以不條理ノ事ニ付此段屹度糺明相成候様諸隊一同願出候處前  
條舊長官ノ始末長府知事公へ委任相成候故至當之處置振可有之事ト存居候處彼倭辨ヲ以テ相論候や未タ何タル驗モ不  
相立内山口表警衛ト號シ萩口ヨリ干城隊出隊三田尻口ヨリ岩國徳山ノ人數小郡口ヨリハ長府清末ノ兵隊長府知事公引

卒三方ヨリ相迫り且又自退イタシ居候奸吏モ密ニ要路ニ入候ニ付諸隊俄ニ諸口ニ出兵夫々へ及應接干城大隊ハ追々意  
味相解双方和平諸口モ同様相成候内二月五日知事公ヨリ別紙直書付ヲ以テ被申渡候ニ付諸隊長官共奉命急速出先ノ兵  
隊ニ及布告候然ル處舊長官ノ内野村靖之介三好軍太郎等獨ニ上國ニ登り兼テ東京西京ニ差登置候兵隊不殘引歸シ末藩  
ノ人數ヲモ驅併過ル九日拂曉七ツ時比三田尻口ニ軍艦二艘ヲ以テ襲來發炮終ニ揚陸諸隊病院ニ亂入病者ヲ斬殺シ又諸  
隊ヨリ斥候差出候處應接ニモ不及狙撃イタシ候亂暴狼藉小郡口ニハ同時川舟ヲ以テ銃隊出勢差向炮撃イタシ候ニ付諸  
隊モ不得已及接戰勝敗時ヲ移シ終ニ常備隊敗亡翌十日三田尻口諸處争鬪之折柄止戰之命有之候ニ付是亦不得已諸隊ハ  
諸口ニ引上ケ山口其他近邊へ屯集イタシ候處常備末藩ニハ其命無之カ其虛ニ乘シ小郡三田尻兩處ヨリ山口ニ馳入又候  
諸隊ニハ干城隊ヲ以テ兵器返上候様トノ事ニ付少々相渡常備軍も同様ト相心得居候處無其儀益暴威ヲ張健武隊器機方  
屯集へ及發炮候等所業何共不得其意畢竟姦吏長官共洋夷ニ沈溺シ己カ宿志ヲ遂ケンカ爲メニテ諸隊ニ曲ヲ付追討被仰  
付候ト偽リ朝威ヲ蔑如シ知事公之命令ニ背キ私ニ兵端ヲ開キ人民ヲ塗炭ニ苦シメ諸隊ヲシテ此極ニ至ラシムル之罪惡  
不追枚舉尙此上私意ヲ達スルニ於テハ當今諸隊悉ク胡服被髮脫刀之兵制ヲ漸々天下ニ施シ可及ハ必然也如此醜虜ノ陋  
俗相移り候時ハ恐多クモ 皇威何ヲ以テ振國休何ヲ以テ相立ンヤ實以切齒悲泣ノ餘隊外ノ者坐視傍觀スルニ忍ヒス候  
天下有志ノ諸藩ニ倚頼シ爲 皇國盡力ノ外他事無之候

二月十二日本藩甲鐵艦未た受領せざるを以て品海廻航の延期を具申す

〔東京より之御用状扣〕

二月十二日被差出候御届之寫

辨 官 御 傳 達 所

兼而言上仕候常藩甲鐵艦此程到着し付 天覽被遊候間至急品川海に差廻候様 御沙汰之趣奉畏早速急飛を以熊本に申

明治 三 年

三八三

遣候然處右軍艦長崎港來着之儀者相聞候得共未々請取濟兼居候趣ニ候得者至急差廻之都合何程可有御座哉尤此許より之急飛相達候内ニ者請取之手數茂夫々相濟可申と奉存候得共前條之次第ニ而若差廻遲延ニもおよひ候而者奉恐入候間先此段不取敢御届申上置候以上

月 日

熊本藩公用人名

二月十二日水戸藩知事徳川昭武同藩久木直次郎香取介十郎榊勇介の罪科速に裁許あらんことを請願す

〔明治三年ヨリ探素書控〕

當藩久木直次郎香取介十郎榊勇介と申者罪科有之候付銘々口書並筋書ヲ以十月中刑部省に御處置奉伺候處未々御裁許無御座候付當春ニ至又々直次郎等進退より一藩之居合ニ關係仕難捨置情實迄國論之概略相認急速御裁許被成下候様同省へ奉願候事ニ御座候畢竟私儀當月下旬ニも天鹽國爲開拓渡海可仕見込ニ御座候間其前右之者所置相違人心歸一藩治確定仕無願念致渡海候様仕度就而ハ何卒右之藩情御没察被成下不日ニ御評決ニ相成候様刑部省に御達被下度奉願候依而前文筋書一綴國論書一冊相添伏而奉至願候

二月十二日

水戸藩知事

(備考)

廿八日(三)徳川昭武水戸ヲ發シテ天鹽國ニ赴キ開拓事業ヲ指揮ス(近世史料編纂綱例)

二月十二日大坂府河内地方に一揆起る依て府兵を派遣して鎮撫に務む

〔從東京西京之下廻〕

大坂府ヨリ

當府支配地並河内邊之百姓共今曉以來一揆相起不容易儀ニ付既ニ坂府兵隊追々操出シ候得共一揆從益相増余程之勢坂府に迫ル形勢市中探索ヲ廻シ候處御勝山ニ遊居候風聞右一揆之發端ハ世木村ヨリ辻村馬場村大和田佃村邊ハ尤モ甚敷今五字頃マテ府兵過半操出シ候得共未鎮靜之報知無之旨致承知當時之世上故兼テ御思慮有之度爲其不取敢御報知如斯御座候以上

二月十二日

林 權 少 丞

京 都

御 役 所

二月十三日本藩原佃京都大學校小助教を令せらる

〔從東京西京之下廻〕

原 佃

右者去ル十三日京都大學校小助教被 仰付候段達出有之候

二月十三日阿蘇大宮司阿蘇惟治彈正臺の召喚に對し罹病上京し難く子惟敦を代理として出頭せしむる旨を答申す

〔阿蘇家文書京都御記録〕

彈正臺御用之儀候條早々上東京仕可旨舊冬十二月十五日御達之趣名代家臣佐伯關之助持參仕謀而拜見奉畏。昨年も言上仕候通全躰差急キ上京仕候覺悟ニ御座候上右之通召も蒙候儀ニ付勿論速ニ發途上京仕候筈ニ御座候處先月初旬より不斗處勞差起段々藥用仕候得共何分急速上京之旨ニ至兼必多物延引ニ罷成候而之彌以奉恐入候間爲名代嫡子從五位差

私儀

明治 三年

三八五

出申候此段御有儀之程宜敷奉願候

一前文御用之儀何程之御様子ニ可被爲在哉彼是私ニ奉測候儀ハ深奉恐入候得共自然昨十月古賀大巡察迄披露仕候天道覺明論之事件ニハ被爲在間敷哉恐察仕候間右一件乍恐左ニ言上仕候

一先年横井平四郎儀 本朝之 百王一系統と申候者元來 天照太神之御私ニ被爲出候との説を唱候ニ付私儀議論合不申絶交仕候儀最初彈正臺御聞込之通少も相違之筋無御座候事

一先達而古賀大巡察へ及披露候覺明論之儀ハ委細大巡察も承知之通當所着之一兩日前夜中當宮社頭ニ落し有之たる迄ニて長谷信義と申候名前ニ而之御座候得共委曲先達而も相違候通右人柄相分不申右覺明論彌以横井平四郎著述ニ御座候哉否之處取えらべ方餘力を遣不申候得共證左ニ相成候程之儀承知不申甚奉恐入候儀にて御座候得共此上探索之道も無御座候只々恐縮ニ罷在申候尤從五位よりも有筋言上仕候様申含候間委細言上可仕此段御請申上候以上

二月十三日

阿蘇太宮司

神 祇 官

御 中

惟

治判

二月某日阿蘇惟治其子惟敦を上京せしむるに際し之に示教する所あり

〔彈正臺書類卷十卷〕(司法省所藏)

横井平四郎事件探索雜書類の内

心組件々

一此節鹿島列御刑斷ハ實ニ重大ノ御事ナルヘシ固ヨリ吾濟ノ輒スク噂ヲ交ヘキ事ニ非ス然レ萬々不得已強テ鄙見ヲモ御尋アラハ略左ノ趣言上スヘキナリ

一鹿島列ニモセヨ私ニ 朝廷ノ微上ヲ暗殺シタルコトナレハソレ丈ノ罪ハ通所ナク四海眞泰平人心一定ノ世ニアラハ即時一モ二モナク悉誅セラレ者ナルヘシ然モ今日洋夷外ニ逼リ人心内ニ亂レ加之澆季ノ世種々ノ邪說横行シテ如此御一新ノ 御代ト相成テスラ 本朝君臣ノ大義猶未タ十分世ニ明ナラス既ニ彼覺明論ノ如モ世間ニ間々信向ノ徒モ有之ト承ナリ苟モ誠心ニ 王室ヲ尊ミ萬世無窮 百王一系統ヲ守護シ奉ル者夫誰カ之ガ爲ニ寒心セサルヘキ鹿島列横井ニ對シ私怨アルニ非ス畢竟如此人心紛々ノ時ニ當ツテ横井カ廢帝論等ノ邪說ヲ唱フルト思シニヨリテ忠憤ニ堪ス 王室ノ御爲ニ二ナキ身命ヲ抛テ其自ラハ眞ニ國賊ト思シ者ヲ天誅ヲ加ヘタル情ナレハ尋常ノ律ヲ以テ論スヘカラス世或ハ赤穂四十七士ノ例ヲ引者アリ予以爲彼ハ淺野氏ノ爲ニ徳川氏ノ重臣ヲ殺セル者ニシテ其處置スル者ハ徳川氏ナリ是ハ朝家萬世ノ御爲ト思込テ 朝家ノ微上ヲ殺セルナレハ其事同シカラス畢竟廢帝論横井カ所爲ニアラスハ同人ハ冤罪ニシテ鹿島列ハ大誤ト云ヘシモシ又實ニ横井カ所著ナラハ同人大罪ニシテ鹿島列ハ忠義ト云ヘシ是マテ御刑斷差延ラル、モ竊ニ恐ラクハ右等ノ御斟酌廢帝論等ノ虛實分明ナラサルニヨリテノ御事ナルヘシ此度予ニ御尋ノ事モ最初横井天照皇御私言ノ説ヲ唱タルヨリ絶交ダケノ事ハ誰モ々々知タルコトニテ相違ナキ事ナレハ覺明論ニ至テハ眞偽又如何トモ定難シ此眞偽決セスシテ唯今御刑斷在ラセラル、ハ恐ラクハ人心ヲ服シ難カラシムルハ却テ種々不可測ノ禍ヲ生センモ知ヘカラス是予カ深恐ル、所ナリ既ニ大村兵部大輔ヲ殺シタル輩ハ悉誅セラレシ由ナレハ 朝廷生殺ノ御紀綱ハ十分明ナリト申奉ルヘケレハ横井一段ノ事ハ節角ト是マテ差延置レタル御事ニ付二論ノ眞偽分明ナルマテハ鹿島列イツマテ獄中ニ差置ルハ抑誰カ之ヲ不可トセン二論ノ眞偽今明ナラスト雖モ予竊ニ以爲今少シ期ヲ延セラ、中ニハ右ノ眞偽モ自然ト明白スル事モアルヘク天下ノ公論モ亦自ラ定テ公明正大御刑斷ノ後草莽間ニテモ紛々ノ論ナキ所謂事理當然ノ極處アルヘク是予カ鄙心竊ニ深ク希望シ奉ル所ナリ

一以下ノ二條ハ尤出位ノ恐アリト雖此節上京セハ御模様次第竊ニ何方マテカ蒞苑ノ私ヲ獻セント思シ處ナリシカモ病氣ニヨツテ召ニモ應スルコト不能深恐入タルコトニテ千里深山ノ中ニテハ 輦轂ノ下ノ事情ト申テハ一切ニ相分ラズ聊

爾ノ心組マテニ其概略ヲ録スルナリ

一御敬神ノ御一事ハ乍恐 神代以降我 朝廷ノ御家法ニ申奉ルヘキヤ決テ少時モ緩ニ差置ルヘキニアラス然ニ去年來東京ニノミ駐蹕セラレテ所謂大嘗祭等ノ御重儀モ如何成ラセタルヤ假令東京ニテ執行セラレシモ此御神事ノミハ必西京ニテ一々古式ノ如ク御執行有セラレステハ乍恐不言不語ノ地ニ於テ 朝廷ノ御爲決テ御宜有セラレマシク況一旦御布告ノ旨モ有セタルニ天下ニ信ヲ失セラレ候テハ所謂民無信則不立ノ聖語モ有之候通ニテ御大切ノ儀ニ奉存候然レハ假令再直ニ 御東幸有ラセラレ候モ此節一旦ハ先速ニ 還幸アラセラレ大嘗會等ノ御祭儀夫々御執行ニ相成所謂祭政一致ノ御實事ヲ天下ニ示サレ候テ報本反始ノ御誠敬ヲ以テ偏ニ 宗廟社稷神明ノ御加護ヲ祈リ奉セラレ候コソ今日ノ御一新ニ於テ此ヨリ御大切ノ御儀ハ無之ト奉存事ナリ

一今日開港ヲ論スル者ハミタリニ洋風ヲ主張シ甚ニ至テハ我 百王一系統ヲモ奉疑モノアリ是固ヨリ可惡ノ甚キ者ナリ又鎖國ヲ論スル者モ唯一己ノ潔ヲ主トシテ敢テ 社稷ノ安危ヲ顧ミス是豈忠臣ト云ヘケンヤ予ハ竊ニ以爲我 神國自神國ノ大道アリ其要ハ即チ君々臣々父々子々タルノミ開鎖ハ各其時ノ宜ニ隨ヘシ何必シモ此大道ニ關ラン且今日ノ如ハ開モ鎖モ何モ差置テ先 御國內人心ノ一致ヲ要スヘシ此一致ヲ要スルハ所詮 明天子賢宰相徳政ノ二ニ歸着スル所ナレモ今日先其一端ヲ論セハ天下兵馬ノ大權ヲシテ悉 朝廷ニ歸セシムルニ如ハナシ今ヤ郡縣ノ治天下兵馬ハ即 朝廷ノ兵馬ニシテ抑誰カ 勅命ニ背奉ル者アラン然則別ニ親兵府兵等ノ御備ナク兵馬ノ權ハ既ニ悉ク 朝廷ニ在カ如シト雖六百年來封建日久因循成俗其實ハ猶末尾大不掉ノ弊ヲ不免今之ヲ救ノ法ハ時世ノ論ニ隨ヒ勢ノ易ニ乘シ天下ニ令シ各十分一ノ兵賦ヲ出サシメテ大ニ 朝廷ノ海軍ヲ興ニ如ハナシ海軍ハ費用莫大ニシテ五十萬石ノ大藩ト雖猶堪コト不能況ヤ其下ヲヤ然則之ヲ禁セスト雖 朝廷ノ外海軍アルコトナシ則尾大不掉ノ弊ヲ救フ者はヨリ大ナルナク是ヨリ速ナルハナシ唯其大將軍ハ必 宮親王モシクハ堂上ヨリ任セラレテ決シテ之ヲ其下ニ委セラレ補佐ノ諸臣ニ至テ最精選セラルヘキコトニテ如シ其人ヲ得ラレスンハ却テ大害ヲ生センコトモ亦知ヘカラス至此ハ固吾濟ノ及處ニア

ラスト雖大要ハ固尊 王ノ志堅確ニシテ且時務ノトアル者其權ヲ執テ能海軍ノ法ニ練然シタル者其國ヲ補フヘシ兼備ノ才ハ固ヨリ少キモノナレハ各其長ヲ採リ其短ヲ護シ衆材ヲ舉用ラレテ事一偏ニ片寄ラレスンハ日アラステ天下必實ニ 朝廷ノ徳ニ懷キ 朝廷ノ威ヲ恐レ奉ニ至ラン夫如此ニ至ラハ何ヲ爲セラル、何ヲ求ラル、何 聖慮次第ノ御事ニテ四夷ノ猖獗ト雖決テ今日ノ甚ヲナシ得ス所謂過激攘夷ノ徒ト雖亦自安スル所アリテ如此要緊堅固ノ 御國三千萬ノ人心同心富強ノ實ヲ勉ルニ至テハ是亦日アラステ實ニ 皇威ヲ四夷八蠻ニ輝ニモ至ルヘキカ是深ク予カ今日ノ朝廷ニ希望シ奉ル所ニシテ固ヨリ書生ノ空見ヲ免レサルコトノミナルヘケレト爾ノ爲ニ聊其大略ヲ記シ置モノナリ

明治庚午二月

惟 治 花押

二月十五日岡山藩は山口藩兵の沸騰につき萬一不慮の際には出兵討伐臨機の處置を取りたき旨を申請す

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

（二月中旬松原彦彌太公出候書付の内）

山口藩兵隊沸騰ニ付而者過日御達之趣度有之時宜ニ寄如何様之事件ニ立至候茂難計奉存候間其節隣國ハ勿論近國迄茂萬一不慮之儀有之節不奉候 御沙汰を直ニ出兵助順討逆然ル後御届仕候而不苦儀ニ御座候哉此段前以奉伺候

岡山藩公用人

吉 田 直 藏  
桑 原 越 太 郎

兼而 御沙汰之通相心得脱走兵暴動候ハ、先臨機之處置致置其旨可届出候事

二月十五日京都府大參事等山口藩暴徒及び京攝間の暴動等鎮靜したるの時鳥取高知二藩兵を動

明治三年

三八九

かすの非なる旨を兵部省に照會す

〔明治三年ヨリ探案書控〕

各位倍御無事御勉勵爲邦家欣然此事ニ御座候扱山口藩沸騰之儀ニ付鳥取藩在京之兵隊大坂兵庫之間出張警成御申付有之旨遙ニ承<sup>知</sup>。致候尤山口藩沸騰之儀も長府徳山之知事盡力ニ而略取鎮候由來報も御座候此儀之最早御承知之事ト奉存候且京攝間浮浪之舉動も大略手を付巨魁福田秀一江藤干城之黨兩輩も召捕追々取調候得とも即今暴學之勢先々有之間敷被察候然ルニ先日來市中内外之下民物議競々之折柄在京之鳥取人數進退致候而之倍々人心ニ關係仕候事深苦慮仕候過便申進候通河攝間百姓共蜂起之事共一時取押申候報知も御座候依而我々見込ニ而ハ此上之決而彼是兵隊操出し候ニも及間敷と推考いたし候高知藩兵隊京地に出張之旨遙承致右藩兵も同様即今之處ニ而之別段更ニ出兵ニも及間敷と存候間右兩條至急御詮議御座候様致度此段申入候也

二月十五日

藤村 兵部 權少丞  
三宮、  
植村 京都 權大參事  
河田 京都 大參事

兵部省 大少丞 御中

二白過日伏水兵隊百人練兵修業ニ付下坂爲致候處市中ニ而之紛々流説も有之甚折合も六ヶ敷事ニ御座候亦昨日本願寺中動搖被祖師之像ヲ提ケ尾州ニ移之策ヲ立候ニ付末寺沸騰余程之混亂ニ有之候得共今朝一時鎮定ニ相成申候右等之全甲子之役兵燹ニ罹リ候轍ヲ恐レテ醸出し候情態ニ御座候依而本文申入候通唯今兵隊相動候而ハ人心騒立不容易事と存候得之彼是御斟酌可被遣候也

二月十五日浦上耶蘇教徒を諸藩に保管せしめられたるにつきて政府に對し外人より抗議せし由を傳ふるものなり

〔明治三年ヨリ深案書控〕

〔長谷川六右衛門書取の内〕

横濱新聞二月十五日所聞(抄)

一 耶蘇徒ヲ諸國へ預し事外國人猶不服ナリ教ヲ弘メタル教師ハ外國ニ而至當ニ所置致し日本ノ迷惑ニ之懸ましかれハ教徒ハ必ス歸郷セシムヘシと申出ス

二月十八日防長國內暴徒脱走潜伏の取締方につき嚴達あり

〔從東京西京之下廻〕

二月十八日御達

防長國內不逞之徒動搖之趣追々相聞候處此度別紙之通彼藩ヨリ届出候ニ付テ相達候就而ハ討漏之賊徒共自然當地に逃込潜伏モ難計候ニ付彌嚴重ニ取締可致候萬一不届之者隠置候者有之ニ於而ハ屹度可及答方事

二月十八日

(別紙)

京 都 府

先達より國內動搖之趣有之候處不得止事去ル九日より及均戰十日十一日之間賊徒大半討平ケ候ニ付先鎮靜之模様報知有之候此段可致御届候以上

二月十八日

山口 藩

小川 彦 右衛門

明治 三年

三九一

二月某日山口藩内亂につき京都地方取締方留守官より嚴達せらる  
〔從東京西京之下廻〕

去ル十八日東京被差立候御飛脚着今日爰許被差立候付拜啓仕候各位彌御平安可被成御奉職奉拜賀候爰許ニおひて御一部中無別條御安意可被下候

一長州内亂ニ付京地御取締且聞取書等左之通

京都府部内不審之者取締方之儀者兼而法則有之候處今般東京より御沙汰之趣有之一層嚴重取締候ニ付テハ別紙之通及布告候段届出候ニ付其旨相心得藩士家來等ニ其管轄主家等ヨリ都而印鑑可渡置候且邸内社寺之内タリトモ不審之者入込居候見込有之節ハ無容赦可及取締候條差支り中間敷引請々々ニ於モテ無緩可致取締候事

二月

留守官

京都府

一山口藩隊卒沸騰ニ及候處置方之儀伺出候ニ付不得止候節之臨機之取計可致旨被仰出候就而之萬一右之脱走ニ可及モ

難側候條兼而無油斷取締可致候此段相違候事

但シ脱走之者見當り次第召捕可届出候事

二月

大政官

右之通兼而御達相成居候處過日相違候通長州不逞之徒己ニ討拂收走之殘賊所々に散亂潜行候哉ニ相聞候條彌以無油斷取締不審之もの見當り候ハ、召捕可届洛中洛外宿屋其外ニ而も止宿之者有之候姓名付取其組之小學校詰合之警固方ニ可届出候事

一帯刀人止宿を乞候節ハ印鑑相改引請可申無印鑑之者之其藩邸或ハ主家ヲ掛合之上引受可申事

但印鑑所持之者或ハ藩邸主家ヲ掛合有之者ニ而も届出之儀ハ前段之通可取計事

一町内諸屋敷社寺等ニ而茂精々氣を付ケ不審之者留置候ハ、早速可届出候事

右旅人取糺之儀之兼而制法之旨茂有之候處此度前顯御達之旨ニ付尙又右之通更ニ相違候條手堅取締可致萬一緩セニ致シ置候ニおひてハ其者ハ勿論五人組之者町役人之者も可爲越度候條其旨可相心得候此段洛中洛外に無洩相違もの也

二月

二月某日佐賀脱藩藩士長州奇兵隊に加里或は濱田一揆を煽動せし由を報するものあり

〔探案書控〕

〔明治三年ヨリ〕  
二月廿二日附在東京林祥之助提出風説書の内

一佐嘉藩ヨリ脱籍日々コレ有り奇隊(山口藩奇兵隊なり)ニ加ル由尤モ脱籍人ハ改革邊ニ有説ノ者ノ由ナリ

〔全書〕

〔長谷川六右衛門書取抄出〕

一濱田縣一揆ノ巨魁ハ肥前ノ脱藩士ニ而江藤中辨毆殺害ヲ企シ黨類也此者煽動シテ一揆ヲ起サセタル趣也山口内亂ヨリモ右濱田ノ事件ヲ甚々氣遣罷在候由ナリ

二月十八日宣撫使徳大寺實則等東京を發し長州山口に赴く

〔從東京西京之下廻〕

一徳大寺様と土方中辨吉井幸助三人長州並兩國に御越之由二月十八日御出立之由

〔探案書控〕

〔明治三年ヨリ〕  
〔明治三年三月十三日着東京下廻の内〕

明治三年

二月十八日

一德大寺公以下今日發足之事

〔防長回天史第六編下〕

〔明治三年春期ノ毛利氏の一節〕

此日(十七)朝廷ニ於テハ俄ニ德大寺大納言ヲ宣撫使トシテ下向ヲ命シ土方中辨吉井彈正少弼以下隨行明日東京ヲ發ス

〔全書〕

〔明治三年春期ノ大勢の一節〕

十二日大納言德大寺實則ヲ宣撫使ニ任ジテ山口ニ赴カシメ申辨土方久元彈正少弼吉井德春大史巖谷修等ニ隨行ヲ命ス  
十九日海路東京ヲ發シ神戸ニ於テ鎮定ノ報ニ接シタルモ仍其行ヲ繼續シ廿八日三田尻ニ着ス云々

二月十八日在東京本藩吏財滿八太郎は嘗て會津藩より頼談せられたるに對し金千兩を贈與せしことを藩政府に報告す

〔東京の御用狀扣〕

二月十八日

財滿八太郎より

會津様より舊臘御無心被仰入候由ニ而手元ニ之委細相分不申候得共其初與太郎殿聞込御元ニ持越ニ相成候由之處此節千兩被進方ニ會計局ニ申來候由然處右之御無心付而之薩長當りも出先之取計ニ而其初直ニ千四百兩充も只今ニ至千兩被進候而之外ニ釣合も如何ニ而其上御先代中ハ各別御親ミも有之御間柄旁心外之綾も有之候よしニ而此節之先右千兩爰許限取計之譯ニ而被進之都合ニ取計候様井澤方より被申聞別紙之通書取出來先日公用人持參夫々仕向相濟申

候右之此節公用人より之書上差上候付御疑も可有御座と此段御含ニ申上置候以上

演述書取

先般御頼談筋之儀付而之此許限御返答ニ及難及既ニ熊本ニ申越置候得共遠達之折柄于今報知無之必多物遷延ニおよび即今御用途御差急之御近狀承知いたし候得之如斯延引若御間ニ合兼候様御座候而之萬々遺憾之至ニ付猶重役共申談當邸用備之内先振替を以不取敢乍聊金千兩被致進入候との趣

公用人名

二月十九日日本藩志方司馬助清田直に慰問使として山口藩へ出張を命す尋て財津民助に同行を命す

〔明治三年記室日記〕

其方共支配

至急ニ被指越候條此段可被達候以上

志方司馬助

二月十九日

清田直

小笠原七郎殿

右者長州表混雜之様子ニ付御見舞御使者として山口に

平野九郎右衛門殿

〔全書〕

其方除財津民助儀御用有之志方司馬助清田直一同至急ニ山口表に被差越候條此段可被達候以上

二月廿日

奉行所

志水新承殿

財津民助儀各一同山口表に被差越旨被及御達候條左様可有御心得旨候以上

明治三年

三九五



同日

少 參 事

志方 司馬 助 殿  
清 田 直 殿

〔防長回天史第六編下〕

〔明治三年春期ノ毛利比ノ二節〕

此日〔二月二日〕熊本福山備兩藩知事ノ使者來リ慰問ス

二月廿日大和國に五條縣を設け相撲國津久井縣を郡と改稱すべき旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

〔二月廿日月番々廻狀を以て差廻來候御書付寫の内〕

相模國津久井縣自今津久井郡と可稱候事

今般大和國ニ五條縣被取建候事

二月 太 政 官

二月 太 政 官

二月廿日本藩加村保馬出納少令史を命せらる

〔東京より之御用狀扣〕

〔二月廿日加村保馬召喚につき御所使同道出頭の所桃井少録を以て相渡さる〕

其藩加村保馬儀任出納小令史候條此段相達候事

熊 本 藩

二月

大 藏 省

二月廿日弘前藩の使者東京我藩邸に來たり先に我米穀を贈りて答禮せしを謝す

〔東京より之御用狀扣〕

弘前藩知事様御使者

北 原 將 五 郎

右者上總沖ニおゐて溺死且存命之者に金子被下候御答禮として先般以米被進被爲入御念候御儀難有思召右御挨拶被仰進候段公用方に罷出申述候以上

二月廿日

公 用 人 中

二月廿三日山口藩知事毛利廣封藩内暴徒を鎮撫するに干戈を用ひたる責を負ひて進退伺書を提出す

〔深 索 書 控〕

藩内兵隊中奸猾之徒兵力を恃益亂暴相察候付不得止過ル九日十日及討伐候段之先日御届申上候然處兼而奉伺候趣も有之候得とも干才相用候儀深奉恐入謹愼罷在候間此段可然御沙汰所仰御座候已上

山 口 藩 知 事

干戈を用ルニ立至候段不容易儀ニ候得共思召被爲在進退伺不及其儀候事

〔防長回天史第六編下〕

〔明治三年春期ノ毛利氏抄略〕

二十三日公並ニ支藩知事等平和ニ解決スルヲ得シテ干戈ヲ用ヒタルヲ恐懼シ上書シテ謹愼ヲ表シ朝裁ヲ仰ク 三月八日東京ニ於テ辨官へ呈出二十五日其儀ニ及ハサル旨ヲ傳達セラル

二月廿四日阿蘇惟治は彈正臺の召喚に對し病氣の故を以て申請書を本藩少參事澤村脩藏に託して提出す

〔男爵阿蘇家文書京都御記録〕

於御臺御尋之筋被爲在候ニ付至急上東京仕候様昨十二月神祇官より被御達置候處今以參府不仕候ニ付至急罷出候様更ニ御達之趣謹而奉畏候然處委細ハ頃日嫡子從五位に託し相達申候通私儀元來罷出候覺悟ニ御座候處先月中旬頃より不斗所勞差起餘程療治をも加へ申候得共何分至急發程之見込無御座ひたもの延引仕候間不得已嫡子從五位爲名代去十四日爰元發途差登セ置申候其後今以快無御座唯今發途遠路上京之處如何體ニも心底ニ任不申甚奉恐入候儀ニ御座候得共今暫之處御有儀奉願度此段吳々宜敷様奉願上候

一右御尋之筋ハ兎角奉測候儀者奉恐入候得共自然昨年御達ニ相成候覺明論之末ニ共被爲有候ハ、委細嫡子從五位に申合置差出し私罷出候とも聊相替候儀も無御座候間右一段之御儀ニも被爲有候ハ、乍恐一々嫡子從五位に御尋被仰付被下候様奉願上候其中ニハ私儀茂猶保養を加兎ヤ角被罷出候時ニも罷成候ハ、少々ハ病を勉候而も罷出可申候此段宜敷様奉願候以上

二月廿四日

阿蘇大宮司

惟治判

彈正臺

御中

右彈正臺に御達ニシテ差札添 澤村少參事へ御内狀を以御頓越被仰達候事

二月廿四日我藩本年正月分軍資金五千四百兩を上納す

〔東京より之御用狀扣〕

軍資金當正月分御上納高五千四百兩一昨廿四日大藏省に相納申候處田口大令史致落手候此段相達申候以上

二月廿六日

公用人

二月廿七日高知藩知事山内豐範親ら鹿兒島に至り知事島津忠義に面し俱に提携して朝廷を輔翼し國體を維持せむことを謀る

〔明治三年ヨリ探案書控〕

高知藩知事侯建策

- 一 大ニ朝權ヲ張テ天下をして威服セシメ縱令大國強藩といへとも其議ノ所出ヲ不知か如くならしめん是策之上也
- 一 天下内外の病日を追テ不可致の勢あり外ニ不破時ハ必内ニ破るへし輔相ノ以ニ識見ニ寧外ヲ破リ内ヲ整るニ不如之大決斷を行へん是策の中也
- 一 薩長土三藩盟約を堅し私ヲ去リ公ニ就き輔翼 朝廷維持國脉是策の下也

覺

一 此度卒然罷出候儀餘之儀ニも無御座候天下之事ニ御座候弊藩已ニ三ツ之拙策ヲ相立居申候處今日の勢其下策ニ出る外有御座間敷職ニ愚考仕候固より尊藩に御依頼仕御示教相願申度自今更ニ御同盟仕奉ル輔翼天朝上策之地位ニ相運ひ度意中ニ御座候萬事無御隔意被仰聞度奉存候

午二月

鹿兒島藩知事答書

一 三件之御建策專天下之御爲深切之御計謀御忠告ニ付而ハ感服之至奉存候其第一第二之策之既ニ 朝廷御政體も致確定

明治三年

三九九

居候事ニ而戊辰三月御誓文ニ基キ廣天下之公論ニ決スルキ不容易事件即イ只今御同意と申ニ之雖至第三之策より御同意之事ニ候條自今以後猶天下イ。皇國之御爲戮力幹旋可仕候万事無隔意可申上旨任御懇諭此段御答仕候以上イ〔申上候〕

右午二月高知藩知事侯異船御借用ニ而鹿兒島前之濱に御入艦中二日御逗留有之

右午四月廿四日到來

右鹿兒島藩脇田市郎々廻報仕來候付寫取御達仕候事

四月廿七日

猪 俣 才 八

〔谷干城遺稿上隈山詒謀錄〕

先達御國論なる主意を發表し先つ四國の義藩に遊説し四國會なる者を琴平に起し四國の諸藩より公議人を出し互に親睦を結び共に各地の情況を通報し緩急相授くるの制を定めし發議者の主意は全く一種の企望あり初に謀るに天下の事朝令暮改人心未だ服せず 朝政は浮浪の徒の占むる所となり動搖常なし其の勢不遠又亂るゝは避く可からず此の時に當て薩長は必ず兩立せず相争は必然なり我土佐若し長曾我部の體に倣ひ四國に兵を用ひは假令勝算あるも天下の時機に後れ四國を一步も出づる能はず是れ愚の至りなり仍て此の會を設け一致して親睦し事あるに當ては土佐は後顧の憂なきを以數艘の汽船を以て全國の兵を擧げ直に攝海に入り錦旗を擁し 王室を保護せは東北不平の藩は固より畿内の諸侯必ず風靡せんと此れ意中に含む所の大主意なりし數年來種々事故あり長とは事を共にし難き事情あれば事宜より薩と共にするの必要を認めたれば薩の情況を窺ひ且親睦を結ぶの主意を以知事公薩公を御訪問のことは起りたり  
午二月廿三日御發駕を以て三ツ頭原註〔松が鼻〕より安國丸と稱する御座船に被召浦戸磯崎御殿迄御出の所天氣不宜爲に其夜磯崎邸に御一泊翌日御滞在翌々日即廿五日朝四ツ時紅葉の賀船原註〔元名ノテレス〕に被召即刻御出帆翌廿六日夕薩州鹿兒島港外に御着船なり  
同廿七日天神馬場築屋御殿へ御移被遊薩州知事公に御對面あり今後萬事御依頼御相談等のことありしが如し

同廿八日御滞在此の時櫻島橋の腰邊櫻花盛なり觀櫻の爲磯崎御邸へ御招なりしも御斷に相成御答禮後御歸館

同廿九日正午薩公再御來談同夕御首尾能御乘船同夜鹿兒島港に御碇泊

同三十日朝出帆木夜佐多のヲバシと云ふ海中に御碇泊

三月一日午時日向赤エ灘を経て豊後に至り給ふ頃風波強くなり御積み荷も多少の異條あり……………

同日九ツ時御着城なり

此の時御供の主なる者は小南五郎大參〔事〕なり余少參事〔谷干城〕亦御供せり此の行は眞の表面丈けの御交際にて何等の密議もなかりしか如し此時は西郷も見へず「此時西郷は城下に在らず薩の事情も土佐と相似て 朝廷へ出仕の者多く人を得ず故に兵隊中には頗る不平あり」大迫貞清、橋口兼藏の人々重役面にて周旋せしと覺ふ此の時薩の兵制は中々盛にて發火演習等もあり其勢大に他日に期するあるが如し薩州に於ても戰勝者勢を得大に改革せし後なるが如し何等の功なき者等多く 朝廷へ出て朝士と成り居りし者藩より申立引戻せし時にて中井弘藏等も引戻されて國にあり余は呼はれて彼の家に行き馳走に遇へり……………

此の行は突然たる公の御出遊なれば何分疑惑せし者と見へ役人等の答誠に曖昧にして要領を得さりしなり大に他日に爲すあらんとするの様子は分明なりし是れより益々軍備擴張は進みたり

二月廿八日本藩山田平兵衛土木權大佑に任せらる

〔明治二年正月ヨリ  
京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

〔三月五日西京發平川幸助同廿五日着持參の内〕

山 田 平 兵 衛

右者被任土木權大佑旨二月廿八日御達有之候段相達候事

明 治 三 年

二月廿九日宣撫使徳大寺實則山口に至り藩知事毛利廣封に暴動の巨魁者は至當の國法に處し歸順者は撫馭の道を盡すへしとの旨を諭達す

〔明治三年ヨリ探索書控〕

山口藩

宣撫使御下向一件

二月廿六日兵庫港揚碇同廿七日三田尻に 宣撫使御同様着船同廿九日同所出立山口表に入ル即日御本營に知事御呼出  
よて一印御達有之候事

一印

山口藩知事

其藩脱隊卒鬪恣暴戾之舉動有之候ニ付爲 宣撫下向ニ候處既ニ臨機不得止干戈之所置ニ及速ニ鎮定ニ候趣歸京之上可及奏聞候尤巨魁之者之相當之所置可致候尙追々悔悟歸正之輩撫馭之道ヲ盡シ一藩協和國民安堵候様可致事

二月

宣撫使

〔防長回天史第六編下〕

〔明治三年春期ノ大勢抄略〕

十二日大納言徳大寺實則ヲ宣撫使ニ任ジテ山口ニ赴カシメ中辨土方久元彈正少弼吉井徳春大史殿谷修等ニ隨行ヲ命ス十九日海路東京ヲ發シ神戸ニ於テ鎮定ノ報ニ接シタルモ仍其行ヲ繼續シ廿八日三田尻ニ着ス豊浦藩知事毛利元敏及ヒ孝允等之ヲ迎ヘ知事ノ書ヲ呈シテ事態已ムヲ得スト雖モ漫リニ干才ヲ用ヒシコトヲ以テ進止ヲ候フ二十九日宣撫使山口ニ入ル敬親父子出テテ柵木驛ニ迎ヘ再ヒ山口ノ宿舎ニ候シ長途ノ勞ヲ謝ス實則乃チ廣封ニ諭書ヲ與ヘテ曰ク（以下前の文に同じ）故に略す

實則更ニ命シテ曰ク

今般脱隊暴舉事件鎮定之上ハ去冬御沙汰有之候兵隊之儀彌以精選シ緩急之御用相立候様可致事

二月

宣撫使

二月晦日山口藩知事暴徒の罪狀、討伐の際の死傷者、及び暴徒處刑等に關し宣撫使に申告す

〔明治三年ヨリ探索書控〕

山口藩

宣撫使御下向一件（廿九日の條の續き）

一同晦日知事ヨリ御直ニ二印三冊指上ラル猶口上よて折角死刑相省き候得共此三拾五人ハ是非所置不致候而ハ不相濟者共ニ付此通決定仕候段言上ニ相成申出之通御聞届ニ相成候事

二印 脱隊之者罪狀廉書

一軍律ヲ破リ脱走ニ及候事

一獵リニ所々に砲臺ヲ築候事

一海陸往來ヲ塞き候事

一知事父子之直諭ヲ承知サセル事

一百姓ヲ煽動セシメ候事

右數々條罪惡有之候得共寛太之所置ヲ以前罪ヲ不問ト

迄雖申聞候猶又左之廉々

一知事より呼出之干城隊ヲ銃器ヲ以恣ニ相支候事

一銃器ヲ以 朝廷之藩廳ヲ圍ミ候事

附タリ米穀其外日用之品ヲ絶チ候事

館門前よて篝火ヲ焚晝夜ト度大參事諸役人之出入を支候事

一小監察を陣所に連歸り候事

一官庫之米穀器械ヲ盗出シ農町之私財ヲ掠取候事

一諸部署之器械押取セシメ候事

一再ヒ道路ヲ塞き候事

一豊浦知事之出山ヲ途中ニ於テ相支に末藩之家中往來ヲ

絶手候事

一農町之者ヲ威シ隊中ニ引入候事

先般御届申上候内兵隊取締中別紙重立之者共石州濱田村邊脱走居滞罷在候趣報知有之候ニ付濱田村迄使節指立尙脱走之者共ハ茂精々説諭ヲ加ニ連歸リ取計可仕候尤奸猾之者共ニ付自然不得止節之兼而伺取之趣有之臨機之計ヲ以藩兵指越至當之所寄仕候儀可有御座此段御届申上置候様申付越候以上

山口藩公用人

二月

六 道 直 記

- 元寄兵隊 貳拾壹人
- 元振武隊 拾壹人
- 元健武隊 拾三人
- 以上 四拾五人

右之者共石州濱田迄脱走居留仕候事

右一册

諸隊死傷ニ付

即 死

山口藩

横山梅之助 樋田義助 岡 重十郎 伊藤鹿之助  
岡部休助 林 忠一 山縣直助 杉山良輔  
金光仙太郎 大見太郎 藤井楮之助 渡邊義助

徳山藩

澄田龍之進 宮本惣十郎

岩國藩

大林定次郎 東 直 岩井 泉 河野貫一郎  
隠岐益太郎 江藤釣瓶

以上貳拾人外ニ夫卒

久兵衛

右二月九日十日討伐之節即死仕候事

傷

山口藩

橋 彌十郎 大草石一 野上甲藏 品川門之進  
岸田半四郎 福永精造 増野喜代作 乃美讓助  
中原豊之進 和田小傳次 岸 榮三郎 丸山新之丞  
増野友次郎 小川茂太郎 大田勇助 村尾清吉  
佐伯冬吉 生田音熊 上村政之助 齋藤勇藏  
藤田米助 齋藤宗平 山本市郎 竹内忠祐

森根太一郎 宮本十郎 宮城和吉

以上六拾四人

右二月九日十日討伐之節蒙傷候事

右死傷別書之通ニ御座候

脱隊兇徒之者

一惣兵凡千八百人余

内 即死 凡六拾人

蒙傷 七拾三人

但各隊散亂仕候ニ付即死之者人名未分明候尤銃劍之者ハ於病院ニ療養爲仕候

以上

右一册登册

福原團右衛門 中村嘉添 栗屋爲人 岡本勝太郎  
井上行藏 井上喜一郎 森山源助 今田純一郎

覺

吉澤 庄藏 佐々木祥一郎 加禰 直人 井上 鎌次 端稻 文輔 高山 盛一 田中 吾助  
神田 重平 中村 勘一 石井 貫治 内藤 源吾 水井 直助 萬松 唯一 津山 壽郎  
宮野 政助 松山勝三郎 大島 一助 長谷川龍太郎 堀 義助 香川 糺 佐伯千葉之助  
宇治川勇藏 河上新次郎 今井 六郎 長島 義助 齋藤友之助 渡邊 節三 村上 清駒  
大山 狂助 中井 久熊 山木幾三郎 戸倉 十郎 谷 鵬助 南 五郎 弘中 文助  
以上

右之者共脱隊之首長ニ爲リ兵卒ヲ煽惑シ藩政ヲ擾亂シ不容易令舉動其罪難赦ニ付死罪ニ處シ其餘竝立候者ハ罪之輕重ニ仍リ囚獄遠流申付兵卒末々悔悟歸正仕候者ハ格別寛大之典ヲ以撫卹仕候心得ニ御座候以上

覺

富永有隣 河内六郎 横田義太郎 隅原左右五郎 吉田松太郎 其外

右之者共脱隊之首長ト爲リ兵卒鼓動シ其末他藩ニ令脱走ニ付召捕候上ハ相當之處置仕候心得ニ御座候以上

右ノ一冊

此度脱隊卒之者共及暴動候次第畢竟長官共ニ被欺候事ニ付歸順之上ハ一統其罪を免シ年限ニ應シ格別撫卹を加へ扶持米受人半分宛遣し人物ニ依り此性々兵隊其外召仕候義も可有之候得共一先舊籍ニ歸入申付候都合ニ御座候事

二月晦日不開港場規則及び難破船救助心得を發布せらる

〔從東京西京之下廻〕

二月晦日從月番差廻來候御書付寫

不開港場規則難破船救助心得方等之條目別紙彫刻之通被 仰出候間此旨相達候事

二月

太 政 官

但別紙彫刻添置申候事(別紙今見當らず)

二月某日府藩縣にて外債を起し又は器械船艦等購入するにつき其土産未成品を以て抵當とすることを禁せらる

〔從東京西京之下廻〕

(二月廿八日東京より京都、熊本へ報告文書中にあり)

府藩縣ニ於テ會計融通之タメ外國ヨリ金銀借用シ器械船艦等買入ニ付其歲入又ハ物産類都テ未定將來之品ヲ引當ニ致シ相求候儀決而不相成候事

但農商之輩五市ニ付五ニ手附金等請取渡致候儀者官府ニ關係不致本文之趣トハ自ラ差別有之間右ト混淆不致様相心得可申候事

二月

太 政 官

二月某日書籍新刊取扱の所轄を變更せらる

〔從東京西京之下廻〕

(二月廿八日東京より西京熊本への報告文書中にあり)

書籍新刊許可之儀是迄大學ニテ取扱來候處自今大史所轄ニ被 仰付候間向後新刊願書史局へ差出可申事

二月

太 政 官

二月某日隊伍編成法を發布せらる

〔從東京西京之下廻〕

兵制ハ天下一途ニ無之而ハ不相叶ハ勿論之儀ニ付先般兵學寮被設置近々各藩にモ入寮被差許一定之制式ニ相歸候様御運ヒ相成候得共即今常備之處編隊員數別紙之通り御規則被相定候此段相達候事

二月

兵 部 省

定

步兵隊

六十名ヲ以テ一小隊トス

二小隊ヲ以テ一中隊トス  
五中隊ヲ以テ一大隊トス  
則十小隊

但將導以上諸有司右定員之外タリ

砲兵隊野戰  
山用

砲二門ヲ以テ一分隊トス

三分隊ヲ以テ一隊トス

則砲六門

一兵士年齡ハ十八歳ヨリ三十七歳迄タルヘキ事

但是迄之隊士中卅七歳以上ト雖其人ニヨリ強壯之者

二月某日本藩永田内藏次驛遞少佑より監督少佑に轉任す

〔從東京西京之下廻〕

永田驛遞少佑

轉任監督少佑

二月

民部省

聽訟掛申付候事

二月

民部省

永田監督少佑

ハ格別事

一練兵式之儀ハ先ツ是迄相來候式ニテ不苦候事

一石高壹万石ニ付一小隊之割合ヲ以可相定候事

一士族卒族之外新ニ兵隊取立候儀被相禁候若万石一小隊

之割合ニ不足候ハ、其旨兵部省に伺出差圖ヲ受可取計

事

二月某日大學にて大中小學の學則を内定す

〔明治三年ヨリ  
探索書控〕

大學ニ而ハ三百之書生へ銘々ニ判本相渡リ居候由ニ候へ共一統ニ之いまた御布告ニ至リ不申候由ニ而松原彦彌太方内  
見せ之書付也

大學規則

學制

道ノ體タル物トシテ在ラサルナク時トシテ存セサルナシ其理則綱常其事則政刑學校ハ斯ノ道ヲ講シ實用天下ニ施ス所  
以ノモノナリ然則孝悌尊倫ノ教治國平天下ノ道格物窮理日新ノ學是宜シク究覈スヘキ所ニシテ内外相兼テ彼此相資ケ  
所謂天地ノ公道ニ基キ智識ヲ世界ニ求ムルノ聖旨ニ副ハンヲ要ス勉サル可ンヤ

學制

蒙蔽ノ下大學一所ヲ設ケ府藩縣各中小ノ學ヲ置ク皆大學ヨリ頒ツトコロノ規則ヲ遵守シ材ヲ育シ業ヲ廣メ國家ノ用ニ  
供スルヲ以テ務トス而テ大學ハ人文ノ淵藪才徳ノ成就スルトコロ之ニ入ラントスル者必ス先ツ其地方ノ考課ヲ歷諸學  
漸ク熟シテ始テ蒙下ニ貢進スルヲ獲ナリ

貢法

生徒凡ソ三十歳以下ヲ限リ其地方ノ考課ヲ歷知事證憑ヲ了ヘ蒙下貢進スル者之ヲ大學生ニ補シ各自好ムトコロノ科業  
ニ就キ博士助教ノ指揮ヲ受シム在學三年ヲ期トシ期滿ツル時解額セシメ更ニ新クナル者ヲ以テ之ニ補ス若クハ在學提  
任セラル、者隨テ定額ノ人員ヲ貢進ス其定員ノ如キハ之ヲ後議ニ附ス

試法

試藝對策ノ法ヲ立テ春秋ノ二仲月預メ日ヲ刻シ其藏否ヲ對試シ優等甲科ニ登ルアラハ各其條件ニ就キ反覆討論ヲ遂ケ  
言行相附スル者ヲ判定シ狀ヲ具シ申奏シ以テ廊廟採擇ニ充ツ

學費

府藩縣管内石高二應シ公納セシム其定額ノ如キハ後議ニ附ス

學科

教科

神教學

修身學

法科	國法	民法
商法	刑法	萬國公法
詞訟法	典禮學	國勢學
利用厚生學		
政治學		
理科	星學	
格致學	金石學	
地質學	植物學	
動物學	重學	
化學	器械學	
數學	築造學	
度量學		

豫科	數學	度量
化學	學	鑛土植物學
本科	解剖學	厚生學
厚病學	藥物學	醫科斷訟法
毒物學	病死剖驗學	內科外科及雜科
法療學兼攝生法		
文科	紀傳學	
文章學	性理學	

二月  
中小學規則  
子弟凡ソ八歳ニシテ小學ニ入り普通學ヲ修メ兼テ大學專門五科ノ大意ヲ知ル  
句讀 習字 算術 語學 地理學 五科大意

子弟凡ソ十五歳ニシテ小學ノ事訖リ中學ニ入ル

中學  
子弟凡ソ十五歳ニシテ小學ノ事訖リ十六歳ニ至リ中學ニ入り專門學ヲ修ム科目五アリ  
大學五科ト一般

教科(學目) 法科(上全) 理科(上全) 醫科(上全) 文科(上全)  
子弟凡ソ二十歳ニシ中學ノ事訖リ乃チ其俊秀ヲ選ヒ之ヲ大學ニ貢ス

二月  
三科必讀書

教科	古事記	日本書紀	萬葉集	古語拾遺	祝詞	宣下	孝教 <small>輕カマ</small>	論語	大學	中庸	詩經
法科	書經	周易	禮記								
	令殘律	儀式	延喜式	三代格	江家次第	法曹至要抄	周禮	儀禮	唐律	明律	
文科	文獻通考	大學衍義補									

六國史 三鏡 大日本史 枕草子 源氏物語 春秋左氏傳 國語 史記 前後漢書 通鑑  
文章軌範 八家讀本 世說  
(朱ノ書ヲ入レ)  
右規則書府藩縣にも御布告ニ相成候様別當公々太政官へ御持出ニ相成候處副島二郎を賦此儀現實行ハレ候事件ニ候哉  
若難被行筋ニ候ハ、御布告も無用たるへき段申答候へハサフ云てハ不相成宜頼候段御咄合有之候趣ニ而いまた成否之  
明治 三年



不相分候へ共入寮生などハ不服之向有之退寮私塾ニ轉遊之心構も有之候哉の事も相聞候事

二月某日題鹿兒島藩士井上石見の功を追賞して遺族に金八百兩を賜ふ

〔明治三年ヨリ  
探索書控〕

明治三年三月

鳥津鹿兒島藩知事

其藩士井上石見義一昨辰年箱館在勤中海岸巡察之爲、乗組出帆致候處不慮之儀も可有之哉今以所在不相知趣不便之事  
ニ被 思食候依之別紙目錄之通其妻子へ下賜候事

目錄 金八百兩

〔贈位諸賢傳〕

明治元年正月始めて徴士と爲り尋て諸官を歴任して箱館裁判所判事ニ進む是より先新政府成るに當り蝦夷地開拓意見を建議せしことあり箱館赴任は蓋し其宿望に出づ長秋箱館に着するや蝦夷各地の調査に従事し同年八月樺太沿海の視察を畢り歸航海上難に罹りて終に死體を得ず三年二月 朝廷功を追賞して遺族に金八百兩を賜ふ(井上長秋傳)

二月某日酒井閑亭父子靜岡藩士酒井祿四郎方へ終身同居の願を許可せらる

〔明治三年ヨリ  
探索書控〕

酒井 姫路藩知事

祖父閑亭父雅樂共靜岡藩士酒井祿四郎方へ終身同居致度願之趣被 聞食届自今其方家事ニ於而一切關係不致様 御沙汰相成候間此段相達候事

二月

太 政 官

二月某日丹波栢原藩知事織田信親先祖信長の爲めに社殿を江州安土山に創建祭祀せむことを請願す

〔明治三年ヨリ  
探索書控〕

江州安土山ニ一社創建願書

臣信親親頼首再拜奉懇願候先祖信長元龜天正ノ際ニ膺リ聊勤 王ノ微忠ヲ表シ候寸功ヲ以テ今般。宣下候段敬承仕祖先ノ而日家門ノ譽レ何事歟如是哉偏ニ 天恩隆渥ノ辱ニ感泣銘肝仕候抑天正十年六月二日本能寺兜變後信長居城近江國蒲生郡安土山ニ築墳墓一寺建立信長謚號ニ仍テ德見寺ト號シ萬曆府(ヨリ)由緒ヲ以田畑寄附之朱印受納仕代々同姓中支流ノ者ヲ以テ出家爲仕于今連綿相續仕候此度社號蒙 宣下候上ハ右安土山ニ於テ一社創建別當(附)復飾爲仕永代祭祀仕候様奉願候因茲右德見寺由緒書相添不願恐懼奉仰願候誠恐惶謹言

午 栢原藩知事

二月 織 田 信 親

神 祇 官 御 中

御附札 管轄所へ斷之上可願事

(備考)

十七日(明治二年)贈從一位太政大臣織田信長ニ健織田社ノ號ヲ賜ヒ祠殿ヲ京都ニ營マシム接テ建勤社ニ改ム(防長回天史第六編下)

二月某日鐵道布設主謀の官人を暗殺せんと企圖する者あり

明治 三 年

四一三

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

二月柄本天ノ元報告書の一節  
一今度鐵道一條ニ付而者當時都下に集居候草莽之者頃日頻ニ議論罷在候處先日既ニ御決議ニ相成候而ハ最早主謀之官人を暗殺スルヨリ外ハ無之ト申居候也

〔備考〕 十一月(明治二年)二月鐵道布設決定に付英國より金銀借入方條約取結之全權御委任被仰付(鶴鳴餘韻伊達宗城事蹟)

二月某日羽州酒田縣の農民等酒井氏の管轄たらむことを歎願して騷擾せし由を報するものあり

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

(長谷川六右衛門書取抄出書中正月月中旬より二月)

一庄内領羽州酒田縣百姓酒井家之管轄タラン事ヲ歎願し若御許容無キニ於而ハ田畑ヲ差上可申旨惣村庶民沸騰致し知縣事ノ所置ニ不叶ハ東京迄も出張スヘシト申立候由

二月某日偽名を以て建白書を擬作し廟堂の裨政を諷するものあり

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

一午二月大巴賀頼兩大人建白寫

大政御一新之際官路洞開草莽卑賤之者と雖モ御爲筋ト存付候儀之聖嚴ナク奉獻言候様御布告之旨奉感佩候臣等幸ニ性命ヲ今日ニ全フシ聊心付候事件知テ不言ハ千歳之後臣子之責ヲ免レサル事ニ付左ニ奉建言候

一當今神祇官ニ於テ宣教講義屢々有之御官内官員而已聽聞被 仰付候由承知仕候右之御官内官員限リ之拜聽ニ而之普天率士布教之御趣意ニ觸レ候儀ト奉存加之歸依佛深染之愚民共ニ至候而之容易ニ宣教之御趣意貫徹致間敷ト奉恐察候夫

ニ付愚考仕候處遊民共之内如水萬丸談翁其他數多之談談師或ハ滑稽噺科共之内人才利口御技捕ヲ以宣教師被 仰付芝神明神田湯島平河等之社内其他淺草兩國ヲ初府下數ヶ所ニ於テ講席ヲ開キ無錢ニ而聽聞ヲ被許且御官内ニ鑽座被爲在候天神地祇八神殿御代々御神靈等之御供物ト名付テ餅菓子等ヲ日々拜聽人ニ被下朝望等ニ之神酒も被下置然而東京市中宣教行届候上ハ京坂其他藩縣ニ於テモ同様之趣向ヲ以宣教相成候ハ、數月ヲ不經シテ御趣意貫徹可仕ト奉存候此段奉申上候

書面宣教之御趣意之五倫之道ヲ廣食欲無慈悲之趣意ヲ普ク布教可致之筈ニ付申立之者共ニ而之貫徹無覺束候間今一際濟込御國內博徒之長或ハ府藩縣獄囚之内相應之者ヲ見立申立候様可仕候事

一純金新貨幣御製造之御布告有之追々年月ヲ經候得共未御施行ニ不至加之緒幣ハ日増御盛造ニ付當今之場合文ニ人心ニ關係仕動レハ御國害も釀スノ勢ニ御座候夫ニ付愚考仕候處往昔賤妓梅ヶ枝ト申者其密夫梶原氏拜領之具足ヲ貰入いたし既ニ八ヶ月之期限ニ臨ミ之レヲ償ニ金子無之ヲ憂ヒ無間之鐘ニ比シテ手水鉢ヲ叩キ百金ヲ得タルコト賤妓スラ如此況ヤ當今之御場合既ニ 聖上御師儀供給ヲモ御減少被爲在候程之儀ニ付今ヤ無間之鐘ヲ被爲撞候ハ、億兆之正金ヲ被爲得候事聊無疑念奉存候何卒此段連ニ御沙汰被 仰出凡二三ヶ月も晝夜無絶間被爲撞候ハ、則右得ル處之金ハ定而古金ニ可有之候間當今通用金ニ換候ハ、百八千八百ト可相成右ヲ以第一外債ヲ被爲濟候上万民御仁恤之御趣意も十分御行届相成然而富國強兵之策も此事ニ可有御座と奉存候間此段奉申上候

此條申立之趣尤之次第ニ相聞候間御採用可相成候乍併無間鐘之儀ハ數年來土中ニ廢埋いたし撞棒之儀ハ其頃取捨ニ相成居候間相當之ベラ棒も有之候ハ、早々大藏省へ申立候様可仕候事

御沙汰之次第御座候得共前文中上候通常時藩邸之品ニ茂御座候間御當官ニ奉申上候以上

一近來傳信機御開相成大ニ通利を得候處又々東京師間ニ鐵道御開相成ベク之由祖承知仕候然處右者何をも西洋之發明ニ御座候へハ其國土ニ不應候半而ハ人心之向背如何ト乍恐憂慮仕候夫ニ付御一新以來之 詔書或ハ御布告ニ基キ愚考

仕候處普天率土王地ニアラサルハナシ生靈草木悉皆 朝廷之御モノニ有之候趣屢々被 仰出有之候付而之御國內ニ有  
 之大峯山上日光鞍馬彦山富士筑波大山其他諸山諸嶽ニ住居罷在候天狗共ヲ被召集飛行局御開キ有之僧正坊太郎坊ヲ以  
 局長ニ被命置候ハ、御取締も相立則彼等通力ヲ以空中飛行千里之波濤も一瞬間ニ相通シ如何様之御密事ト雖モ他ニ洩  
 ル、患ナク人カヲ不勞地方之憂ナク御用辨此事ト奉存候何卒早々 朝命ヲ以天狗共ヲ被爲召呼御開局相成候様仕度此  
 段奉申上候

此條被尋ニ於テモ兼而王室ニ勤勞罷在分ケテ水戸筑波之者共於テハ先年來勤王ヲ盡シ候ヘ共兎角頑固ニシテ開港之  
 地ニ跋渉スルヲ嫌忌致シ既ニ此程吉野近郷十津川住居之者共ニ於テハ開港之儀ニ付御國害を懼シ候儀ニ有之且府下  
 住居天狗連之者共ニ於テハ自ラ連名ヲ唱ヘ寄場々々に相集り盡力周旋致シ候ヘ共何分物價騰貴之折柄活計ニ困迫既  
 ニ短才之者共ニ於テハ教育所入申立候者も有之程之事實ニ候間旁御採用難相成候事

一 近來北地開拓之儀頻リニ御世話被爲在候處同所之儀之從來魯狄掠奪之萌有之既ニ昨年來追々相迫リ候由承知仕候然ル  
 ニ同國之儀ハ大強國之由も相聞候得之儀ニ抗敵候共捷算之程如何と奉存候夫ニ付愚考仕候處 皇國之儀ハ神國ニシ  
 テ則神政ニ付御一新已來神祇官ヲ太政官ノ上ヘ被定置專ラ神政ヲ被爲施候儀ニ付今ヤ神祇官實効ヲ可奏之秋ト奉存候  
 間早々神祇伯に詔ヲ御下シ所謂神風ヲ吹セ當今掠奪シテ相迫リ居候魯狄ハ勿論被カ艦底等悉ク吹拂候様被命候ハ、器  
 械彈藥人カヲ不失醜夷ヲ舉倒シ神州之御國威萬國ニ光輝シ外患消滅永ク太平ヲ稱ヘ可申ト奉存候間此段奉申上候  
 此條御一新以來賄賂荷直之儀之弊風ヲ以テシ遊蕩登樓之儀之書生風ヲ以テス衣食器械之儀ハ洋風ヲ以テ右三風ヲ以  
 國體トシニ官五省ニ於テモ專ラ取扱神風ハ疾速御廢止相成居候事ニ候間其段相辨社撰之申立致間敷事  
 右者臣等庸見ノ管見不憚忌諱奉獻言候誠恐惶頓首謹  
 明治三年庚午春二月

大 巴 賀 參 太 郎  
 判

頼 間 拔 作  
 判

一 頃日奉建言候四條之内無間鐘之儀御採用可相成尤右持棒之儀相當之品見當次第大藏省に奉申上候様蒙御沙汰難有仕合  
 奉存候右之當今之場合最至急切迫之儀トモ奉恐察候間種々取詰探求仕候處相當之品モ見當不申遣候罷在候然處此程外  
 櫻田福岡藩邸へ罷越候處不圖同邸内(三條實美此時攝關藩邸に住す)三疊之小座敷之柱木ニ至妙之ベラ棒ヲ見當テ候間早速邸守に相尋  
 候處右品之西京某之山ニ生立其後云々之手續有之先年國元太宰府に取寄置候處戊辰之春騒擾以來又々西京に持出夫々  
 東京ニ下シ當時藩邸ニ差置候得共同藩ニ於テハサシテ有用之品ニ無之趣中間候右ノ次第ニ御座候間何卒同藩に御沙汰  
 被成下早々切取候様仕度奉存候既ニ此程同邸に強賊押入右品ヲ目指候哉之風聞度御座候間速ニ御沙汰之程偏奉懇願候  
 尤兼而大藏省に申上候様御沙汰之次第御座候得共前文中候通當時藩邸之品ニ茂御座候間御當官に奉申上候以上

二月某日長州暴徒の脱走人秋山五郎等十數人鶴崎に至り毛利到に依る毛利は高田源兵衛古庄嘉  
 門木村弦雄等と謀りて之を潜匿せしむ

〔小森家文書〕

明治四年五月刑局根取廣田貞人東京エ參達引取書抄略  
 奇兵隊脱人潜匿爲致候次第申出之趣左之通

此儀源兵衛儀鶴崎有終館に相詰居候内去年二月末比と覺奇兵隊脱人大樂源太郎弟變名秋山五郎、藤澤長太郎、境要  
 助小野誠太郎、桑山誠一郎其外五人計姓名失念之由此節一同御吟味被仰付候鶴崎居住士族毛利到を便參り候由ニ而  
 同人四男毛利彌有終館に參り右脱人潜匿之相談いたし候ニ付右之内ニ之源兵衛長州に參り居候時分厚世話いたし候  
 者も有之殊ニ奇兵隊之西京以來奥羽ニ而も身命を抛戦争いたし候者ニ而可憐情も有之旁俱ニ潜匿之世話可致之咄合  
 右脱人諸生之體ニ而判獄中ニ潜匿爲致置云々

〔古庄家文書〕

古莊嘉門自筆草案

今日までの履歴(節略)

予既ニ鶴崎ニ行キ川上木村等ト兵ヲ督シ之ヲ訓練スル中明治三年夏ノ比カ(二月)長州藩山口ニ於テ兵隊即チ奇兵隊民間ノ憤激スル所アリテ山口藩廳ト戰鬥ヲ起シ民兵即奇兵隊ノ敗トナリ鶴崎ノ川上ヲ頼ミテ脱走シ來レリ川上ハ曾テ熊本ヲ脱シテ山口ニ入り奇兵隊ノ長タリシ事アレハナリ依テ予等モ同意ニテ其奇兵隊ヲ多少潛匿セシメタリ是レ他日爲スアルノ爲メナリシ云々

〔鶴崎毛利家文書〕

空桑先生傳空桑子抄略

全 長州藩々政大改革ノ論盛ニ起ル當此時之レト意見相合ハサルノ一黨アリ軌轡太甚シ其極相戰フ富永有隣大樂源太郎及其門弟子等反對ノ一派ナリ此等反對者戰敗レ富永ハ土佐ニ奔ル大樂ハ先考ト數年已前ヨリ交誼アリ加之國家ニ對スル意見相同シキノ故ヲ以テ其實弟山縣五郎後ニ秋山外共一味數十人ト共ニ脱來リテ窃ニ先考ノ家ニ投ス先考其男登羅等ヲ指揮シ厚ク之レヲ扶助シ其家及門弟子鶴崎人中山淳悅幸龜次郎等ノ家ニ分チテ伏匿セシム此時先考ハ鶴崎觀光場取締役其下ニ兵隊倡役トシテ高田源兵衛元川上古莊嘉門木村弦雄等數人アリ兵學校有終館ニ在ル兵隊ヲ督責シ居ルヲ以テ此等數人ニ告ケ相謀リテ大樂等ト共ニ爲ス所アラントス不幸ニシテ事覺レテ長州藩ノ追捕來逼ル於是乎登羅、羅等急ニ大樂等ヲ竹田藩ノ同志者赤座彌太郎、角石虎太郎ニ托セシム後又久留米藩小河吉右衛門等ニ轉致ス此事ニ關係スル者鶴崎光福寺住職□□□大佐井長光寺住職□□□小佐井光國寺住職□□□西寒田西福寺住職□□□□□白杵藩岩手喜十郎、田中最乘寺住職大原非々彦數人ナリ

二月某日長州暴動の殘徒等照妖鏡を記して山口藩の討伐檄文を反駁し之を天下の有志に訴ふ

〔鶴崎毛利家文書〕

照妖鏡

此度各隊中台セ歎願ニ及ヒ候願末元來舊長官ノ者唯一身ノ名利ヲ相貪リ 皇國固有ノ制度ヲ悉ク崩棄シ專ラ悉洋風ニ倣ヒ終ニ被髮脫刀ノ議ニ立至リ候ニ付進退維谷不得止一先山口各隊屯集所ヲ去リ一統宮市ニ相集リ熱議決定ノ上藩政恢復且諸吏難陟等ノ儀委細叙列シテ數度建言ニ及ヒ候ヘトモ益臣要路ニ横リ彼長官ノ者ト内外相應シ種々知事ノ意ヲ矯メ鍛鍊羅織無謂ノ罪科ヲ申立候中ニモ 皇國ノ大奸賊大村益二郎墳墓ヲ發キ候儀コトコトシク申募リ候此者ノ罪狀枚舉ニ不遑先去年五月横濱ニオイテ夷人ニ應接ノ節以管被カ強暴ヲ畏レ其身 朝廷ノ顯職ニ居ナカラ大義ヲ以彼ヲ挫クコト不能加之 朝廷ノ官位ヲ自ラ輕シ後日竊ニ己レ一人彼ト應接シ唯和是計リ彼ヲシテ益 朝廷ヲ輕蔑セシメ殊ニ伊勢神宮社領若干被爲付置候ハ誠ニ無用ノ費ニテ穢ニ握リ米ニテモ相濟可申次ニハ神祇官モ同様ノ儀ニ付斷然御廢止可然ト公然他人ニ相語リ候ナトハ誠以 皇祖ヲ蔑如シ奉リ候ノミトラス列 聖在天ノ 威靈ニ對シ候テモ何共奉恐入候中分ニテ素ヨリ一日モ 皇國ノ土地ヲ履セ候テハ不相濟古今未會有ト可申大罪人決シテ不可差赦者ニ御座候然處彼長官昏迷ニシテ是非利害ノ何事ナルヲ不知益臣共ト協謀過ル二月九日未明三田尻小郡等ノ諸口ヨリ亂入候ニ付邦内ニオイテ干戈ヲ動シ候様ニテハ 天朝ニ對シ奉リ重々恐懼ノ至ニ奉存且ハ知事ノ職掌ニモ相係リ候儀ニ付種々辯解ニ及ヒ候ヘトモ終ニ不聞入無存掛彼ヨリ炮發致シ候ニ付是ヨリモ無餘儀一度防戰ニ及ヒ候彼ヨリ兵端ヲ開キ候儀多分如簧ノ舌ヲ以是ヲ非ニ言ヒ曲ケ候ハ必然乍併二國ノ下民皆健ニ知ル所ニシテ欲誣不可誣候猶彼等諸所ニ放火シ或農町ノ者ヲ脅シ米錢鋤鋤等ニ至ル迄掠奪シ實ニ凶殘暴虐至ラサル所ナシ下民學テ是ヲ怨怒致シ候且益臣共勝手次第政權ヲ弄シ實心ヲ以實政ヲ行フノ意秋毫無之故ニ諸郡諸村共ニ沸騰シ竹槍ヲ揮ヒ俗吏ヲ刺スニ至レリ嗚呼悲哉痛哉尊攘ノ大義ヲ以天下ニ先チ恐多モ柱石トマテ 御依頼ノ 微旨ヲ蒙ラレ候ホトノ事ニテ御座候處益臣ノ不所存ヨリシテ今日ニ至テ

ハ天下ニ先チ却テ 神州ノ風俗ヲシテ洋風ニ一變セシメ大ニ知事ヲ玷辱シ 皇國ノ大事ヲ引起シ始不可救ノ域ニ至ラシメントス實ニ天下ノ公憤也 是以四方有志ノ諸君ニ赤心ヲ通シ候間是非共府ハ府知事藩ハ藩知事縣ハ縣知事ニ御貫徹相成 皇國ノタメ萬世ノタメ同心協力再ヒ 皇威海外ニ耀キ 實詐無窮ノ 神勅彌益盛大 國體儼然相立候様御盡力ノ程是祈泣血頓首誠惶謹告

山口藩

二月

諸 隊 各 中

トヲ以上ヲ犯スハ 朝廷ノ大憲力ヲ以テ滅スルハ天地ノ重罪此二者ヲ名ツケテ逆臣亂賊ト稱ス逆臣亂賊ハ天下人々ノ世テ誅スル所也

勿體ナクモ 幼帝ヲ要シ 先帝ノ遺 詔ニ叛キ奉リ 皇祖ノ鴻業ヲ斷棄シ天民ヲシテ夷狄ノ俗ニ化セシメントスコレコソ下トシテ上ヲ犯スニハアレ且コレヲオキ何ヲカ逆臣亂賊トイハシ然トモ小人窮斯濫矣トノ謂ニテ猶以テ虛辭ヲ飾リ天下ノ重罪ヲ免レント欲スルカ

夫冬脫隊ノ騒亂ヲ原ヌルニ兼テ 天朝ヨリ被 仰出タル御趣意ヲ以國內ノ制度改革被仰出御兩國ヲ以益 天朝ヲ輔翼被遊候君上廣大ノ御盛意ニ悖リ

皇國固有ノ制度ヲ廢シ終ニ被髮脫刀ノ議ニ至ル 神州ノ眞男子タル者タレカ切齒奮鬚セサラン哉實ニ天地割判以來イマタ曾テ聞サル天下ノ憂患也カノ風惡社テ貴ク狐藉ニ虎威ト言ルカ如ク動モスレハ 天朝ニハ己カ知事ノ威名ヲカリ其姦謀ヲ逞セントス若シ我輩願ヲシテ知事廣大ノ盛意ニ悖ルトセハ奉勅始末士民合議書ニイヘル條々ハ一時免禍ノ權謀トセンカ悲哉姦臣雲霧ノ如ク集リ聰明ヲ塗リ汚名ヲ萬世ニ遺サントスルカ故ニ我等雲霧ヲ開キ上ハ 先帝在天ノ威靈ヲ慰メ奉リ下ハ正義ノ諸藩ニ誠實ヲ貫ントス

兵隊一時脫走附和雷同千百羣ヲ成シ其一己ノ私欲ヨリ國家無限ノ騒擾ヲ引出シ山口兩道ノ關門ヲ奪ヒ數十ノ砲臺ヲ築キ農商ノ私財

ヲ掠メ官庫ノ金穀器械ヲ竊シ

不臣ヲ懲スノ舉動ヲ以何ソ一己ノ私欲トイハシヤ農町ノ私財云々コレ悉ク嫁禍ノ大虚言也官庫ノ如キハ吏員我誠心ヲ察シ彼ヨリコソ用テ便シタレ下民ニオイテハ素ヨリ渴望ヲ諸隊ニ歸シ艱難辛楚自ラ家財ヲ傾ケ揮テ常備ノ徒ヲハ件天連隊ト稱シ一民モコレカタメニハ快ク用テナス者ナシコレ民ノ所誹怨者天ノ絶ツ所也民ノ所思慕者天ノ與スル所也藩内ノ民舉テ惡ミ好ム所則チ正邪ノ分ル、所也一正一邪黨ト藩トノ如シ人ミナ鼻アリ

朝廷官人ノ墓墳ヲ毀テ無罪ノ兵士ヲ捕縛シ愚民ヲ煽動シテ全國ニ蜂起セシメ己カ惡ヲ掩ントシテ長官ノ刑罰ヲ議シ

大村益二郎トイヘル者常ニ伊勢 神宮ヲ蔑シ終ニ 神祇官ヲモ廢シ神事ヲ以 皇政最上ノ大事トナシ玉ヒシ 歷朝ノ大典ヲ紊リ專ラ洋夷ノ禍毒ヲ天下ニ流シ 皇民ヲシテ汚穢ノ中ニ沈溺セシメント謀リシ大奸賊ニシテ素ヨリコレカ屍ヲ原野ニ暴サ、ルコトヲ得ンヤ故ニ其黨モ亦國賊ノ名ヲ免ル、コト不能是以愚民迄モ悲憤ノ餘リ自ラ奮ヒ竹槍ヲ以テ俗吏ヲ刺スニ至ル何ソ我ヨリ蜂起セシムルヲ待ンヤ歸罪嫁禍トハコノコトナリ仁恤ニアラス

御國是ヲ誹謗シ官員ノ黜陟ヲ論ス

朝廷ノ 御趣意ヲ奉シ各藩ニオイテモ兼テ言路ヲ洞開シ誰ニテモ無忌憚放言スルコトヲ許サレタルニ非ヤ國家ノ治亂ハ人ヲ用ユルノ賢否ニアレハ諸吏ノ正邪得失是亦論セサルコトヲ得スコレヲ誹謗トハ昏迷ノ至極ナリ

蓋其恃ム處兵力ニアリ以君上政府ヲ壓シ君威ヲ破壞シ政治ヲ擾亂シ賞罰ヲ盜ミ大權ヲ弄ス其罪惡深重東海ノ水ヲ以洗フモ盡キカタシ

兵士兵力ヲ恃ム素ヨリ其所也惟姦臣出入ノ防ヲ峻拒シ藩政興衰ノ大路ヲ嚴守セシ、ミニシテ何ンノ爲メニカ東海ノ水ヲ用ヒシ長舌アリトテ妄リニ掉カス可ラス 天聽固リ聰

然ルニ君上如大ノ廣仁ヲ以其無知ヲ憫ミ親ヲ銃砲紛錯ノ間ニ立チ百方説諭決シテ前罪ヲ不問ト迄被仰出四藩君公ニオイテモ往來奔走銷撫ノ力ヲ被爲盡候ヘトモ巨姦大猾其間ニ出沒シ兵士ヲ搖惑シ先非ヲ悔悟セサルノミナラス君威ヲ蔑如シ凶器ヲ舞弄シ番兵ヲ分

遣シ農兵ヲ欺認シ恣ニ佐々並ニ出張シ  
 言行ハ國家ノ大事也苟クモ私ヲ以テ公ヲ亂ルヘカラス巧ニ偽ヲ造リ詐ヲ飾ルトイヘトモ二國ノ下民皆知ル所ニシテ何シ  
 ソ謬ルコトヲ得ンヤ知事銃砲紛錯ノ間ニ立チトハイカン二月九日未明三田尻小郡其外諸口一同ニ彼レ亂入ス故ニ遺撫  
 ノタメ知事ノ出馬ヲ促スコト再三茲臣強テコレヲ止ム是以不得止我ヨリモ防戦ニ及ヘリ蓋正月上旬一タヒ三田尻ニ出  
 馬シ直書ヲ賜フ雙方前罪ヲ不問ノ語アリ依之舊長官ヲシテ各自宅ニ謹慎セシム然ルニ今我ニノミ罪ヲ歸シ禍ヲ嫁セン  
 トスルハ亦何シソヤ終ニ同月十一日謹慎ノ命ヲ犯シ不殘脱走シ長府ニ屯集シ檄ヲ萩ノ第四大隊ニ飛スコレ番兵ヲ分遣  
 シ佐々並ニ出張セシ所以也

終ニ正月廿六日千餘人ヲ以テ御屋形ヲ圍ミ出入ヲ絶シ君上ノ御膳米ヲモ閉チ強詞奪理君上ニ逼リ奉リ候ニ至リ實ニ狂暴凶逆天地モ覆  
 載スルコト不能處試ニ看ヨ上ト古今數千年存シ耳目アリテ今日ノ形ヲ見聞スル者誰カ感激憤懣シ其肉ヲ食ヒ其皮ニ履ヌルヲ思ハサ  
 ラン

奸吏事ヲ左右ニ託シ藩政恢復ノ措置遲延スルカ故ニ一統推テ庶堂ニ出テコレヲ敬願スコノ一事ヲ以テ如此文ヲ潤飾セル  
 ノミ

嗚呼 朝廷ノ德意何ヲ以テカ徹セン藩内ノ政權何ヲ以テ立シ君意何ヲ以テ挽回セン紀綱何ヲ以テ振作セン  
 御一新以來數下シ玉ヘル 勅詔ノ御旨ヲ伺ヒ奉ルニ 神武天皇ノ御創業ニ基カセラレ復古ノ大典ヲ舉ントノ 假慮ニ  
 アラスヤ然ルニ今茲臣要路ニ横リ恣ニ政權ヲ弄ヒ 皇威ヲ海外ニ耀サント言ヲ以テ口實トナシ日ニ 國體ヲ損シ專ラ洋  
 風ヲ模倣シ終ニ 神明ノ域ヲシテ耶蘇ノ淵藪タラシメントス 皇政何ヲ以テ恢復セン天下何ヲ以テ維持セン 國體何ヲ以  
 屹立セト知事ノ素志何ヲ以テ貫徹セン

紛亂此極ニ至テハ惟一刀兩斷ノ決アリ素ヨリ 天兵ヲ以テ征誅被 仰出候ハ必然不日ノ中ニ有之候ヘトモ片時モ難捨置四藩ヲ以首  
 トシ二州ノ間忠憤義烈ノ士大義ニ依リ精銳ヲ盡シ願ヲ以テ逆ヲ討チ衆ヲ以テ寡ヲ誅ス必ス摧陷廓清ノ功ヲ奏シ君上ノ御憤懣ヲ光霽シ奉

風和氣ノ城ニ復センコト其期遠キニ非ス

皇命ヲ待スシテ他日カクヤアラント推テ事ヲ舉クルハ則下トシテ上ヲ謀ルニテ恐怖ノ至リ也己レ既ニ名分ヲ亂リナカ  
 ラ順ヲ以テ討ストハ何シソヤ摧陷廓清ノ功ヲ奏センナト言ヘルヲ以コレヲ見レハ猶 朝廷ヲモ欺キ不仁不智ノ城ニ  
 導キ奉ラントスルニヤコレニ與スルヲ何ヲカ忠憤義烈ノ上トイハシ

邦内ノ士庶名ニ眩セス實ニ迷ハス理ヲ奪フノ力ヲ畏レス上ヲ犯スノ惡ヲ助ケス順逆ヲ辨シ方向ヲ定メ唯國家ノ急難君上ノ定意ニ注  
 目シ不義亂賊ノ名ヲ取り千歳ノ辱ヲ貽スコトナカレ故ニ離ヲ傳ヘテ以雙目ノ耳目ヲ驚カスモノ也

言皆誠ニシテ事必ス當テ得ルニアラサレハ天下心服セス然ルニ前後皆空言無實ニシテ内ヨリコレヲ見ル捧腹噴飯ニ不  
 勝外ヨリコレヲ見ルモ其過失自カラ明ラカニシテ如揭白日之實ニ顔厚ノ甚シキコト何トカ謂ン嗚呼可欺可愛豈  
 皇國ヲ提ケテコレヲ外夷ニ投與セントスルカ百千年イマタ如此國賊アルヲ聞カス故ニ公明正大ノ議ヲ以コレヲ排斥シ  
 伏テ天下有志ノ諸君ニ明斷ヲ乞フ

(編者曰、右長人大樂源太郎等同志の隨文として豊後鶴崎毛利到の家に傳へたるものなり大正七年十二月二日寫す)

三月朔日府藩縣等にて崇教せる式内外の神社を調査報告すへき旨を達せらる  
 (從東京西京之下廻)

三月朔日月番方廻狀を以テ差廻來候御書付寫

延喜式神名帳所載諸國大小之神社現存之分之勿論衰替廢絶之向式外ニテモ大社之分或ハ即今府藩縣側近等ニテ崇教之  
 神社取調可届出兼而御布令之通候處差向官幣神社之分詳細取調當九日限無遲滯神祇官に可届出候事

但各社同名所在混雜不分明之社ハ精々遂穿鑿其上難相分向ハ巨細書取を以同官に可伺出候事

一諸國大小之神社神職繼目同新補別當社僧復飾神勤等は迄神祇官に願出許狀請來候處追テ一定之御規則被 仰出候迄同  
 官宜支配之外之地方官ニテ聞濟置取束可届出候事

但本文御達不相達以前出京致候向之夫々地方官に添書いたし差戻候事

太 政 官

三月朔日山口藩暴徒千餘人を赦し翌二日暴徒の頭立者三十餘人を死刑に處し其他入牢流罪及び自宅謹慎等を命す

〔明治三年ヨリ探素書控〕

山口藩

宣撫使役下向一件(抄略)

- 一 三月朔日頭立候者ヲ除キ隊卒千餘人悉ク其罪ヲ不問シテ赦ス其中六百餘人ハ功勞有之者共ニ付壹人半扶持ヲ與ヒ追々入隊等申付候賦刻三印之通ニ候事
- 一 同二日三拾餘人刑ニ行フ其入牢流罪貳拾人計ニテ頭立候者都テ宿許に御預ケニ相成候事
- 一 防長之人心中通以上之折合宜シ中以下無習之小民頻リニ諸隊ヲ慕フ六百餘人ニ扶持を與へ追々入隊等之令下リ候ニ付追々居合可申と存候事

三月二日宮華族其他の名目を以て金銀を貸附するを禁する旨更に嚴達せらる

〔從東京西京之下廻〕

三月二日月番々差廻來候御書付寫

宮華族其他名目ヲ以テ金銀貸附候儀不相成旨兼テ御布告之趣所存之候處今以テ内密取扱候向モ有之哉ニ相聞へ以之外之事ニ候向後右様之者於右之糺之上屹度可被及 御沙汰候條心得違無之様可致旨更ニ被 仰出候事

太 政 官

二月

三月二日京都出張彈正臺は先きに上京を命せられたる阿蘇惟治代理阿蘇惟敦の從者佐伯關之助が故横井平四郎の著述といへる天道覺明論につき照幡列之助と問答せしことを記し且つ意見を附して東京彈正臺に申報す

〔彈正臺書類卷十卷〕(司法省所藏)

横井平四郎本件探素雜書類ノ内

天道覺明論出處取糺之儀ニ付昨冬十一月中旬當臺ヨリ當地出張之神祇官へ掛合同官より阿蘇大宮司爲召登候處同十二月中旬出ニ而大宮司ヨリ同官へ返書差越當正月二十日同官より右返書當臺へ差廻來候ニ付別紙寫取置候間今般爲御心得御廻申上候右書中申越候豐後岡藩矢野勘三郎惣同苗束ト申者神祇官へ者於今參官不致趣ニ候然ル處當節堺縣知事小河彌右衛門ニ隨從致居候由相聞候ニ付去ル晦日堺縣並岡藩へ相達至急上京可致旨申遣置候不日上京之上者一應當臺ニ於而聞糺大宮司書中之申口ニ相違無之候ハ、早急其表に參向候様取計可仕候現大宮司儀舊職本臺より御召之處當人所勞之趣ニ而嫡子從五位名代ト爲罷越去ル廿九日當地着昨朝日發途其表へ參趣可致由之處神祇官用事茂有之趣ニ而一兩日滯京不日發途之趣ニ候右從五位事照幡大忠舊識之處此節上京之上從者佐伯關之輔ト申ス者ヲ以大忠族邸へ差越今度從五位東下之儀ハ彈正臺ヨリ御召ニ付而之儀照幡殿當時其臺在職之事故相憚此節ハ面謁不相願直ニ東趨候間此段相斷之旨申越ニ付大忠尤成儀ト及挨拶候節關之輔ナル者ニ而會之上大宮司ニ於而者今度之儀ニ付兼而申口如何ニ候哉尋試候處答曰大宮司所申ハ昨年古賀大巡察來山之前不圖社前ニ一封之書有之封中天道云々ト記ス封上明日大巡察當社參詣ニ付差出吳候様有之其節ハ大巡察參詣之事茂不分其儘納置候處果而古賀大巡察來山ニ付右之書差出爲見候迄ニ而其書之所由來段々及吟味候得とも於今不相分候得ハ是儘ニ横井氏之所述ト申ス確證無之且又其節大巡察へ及語話候次第自分從來平四郎ト舊知之處平四郎中年ニ至而其持論百王一系天壤無窮杯申ス趣意ハ大神宮之私言ニ出ル杯其儘難差置異說主張候ニ付致論判候得共聞入不申絶交致候儀ハ相違無之候併兩人對話上之論判ニ而同席之證人茂無之亦外ニ確證ト

シテ可申立儀モ無之致心痛候得共其節之次第一藩大概存居候事ニ付唯在筋ニ何方迄モ申上候覺悟ニ御座候ト關之輔演舌致候右演舌之趣ニ相違無之ニ於而ハ大宮司之所言至極公正一點之私飾無之様存候彼モ有名之士ニ候得ハ間處之儀之申上間敷併御重大之事件ニ付此上尙大宮司平素履踐私怨ヲ以テ人ヲ讒陷スル底之所業者無之賊黨斗途探索其次第二寄對話上之論判ト雖モ證ニ立御採用ニ相成度其上前議之如ク至當之御判斷偏ニ所希候仍而此段申上候也

三月二日  
彈 正 本 臺  
御 中  
出 張  
彈 正 臺

三月三日諸藩從來各地に設置せる藏屋敷或は出張所等は其所在地方官廳の指揮に従ふべき旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

三月三日月番を差廻來候御書付寫  
從來諸藩便利ヲ以テ各地に藏屋敷或ハ出張所等構置候處藩ニ寄其地方官廳に對シ不都合之應接ニ及候向モ有之哉ニ相聞候總テ管内之儀之其地方官廳之指揮ニ從ヒ心得違無之様可致候事

三月  
太 政 官

三月三日宣撫使德大寺實則山口を發して歸京の途に就く

〔防長回天史第六編下〕

三月朔日宣撫使山口ニ在リ公宣撫使一行並ニ森寺邦之助ニ餞別ヲ贈ル二日兩公宣撫使ヲ旅館ニ訪ヒ大ニ饗宴ヲ張リ其

(明治三年春期ノ毛利氏抄略)

〔全書〕

勞ヲ慰ス三日宣撫使一行歸京ノ途ニ就ク兩公旅館ニ抵リテ別ヲ述ヘ公ハ更ニ小郡マテ送ル

(明治三年春期ノ大勢抄略)

宣撫使一行ハ三月三日ヲ以テ山口ヲ發シ歸路錦小路驛及ヒ大村永敏ノ墓ニ契シ三田尻ヨリ海路横濱ニ抵リ九日東京ニ歸着ス

三月五日來十日以後外櫻田外九門の門限を夜五ツ時と定めらる

〔東京より之御用状扣〕

今五日辨官傳達所を御呼出ニ付御所使罷出候處上野官掌を以御渡ニ相成候御書付壹通相達申候以上

三月五日  
公 用 人 中  
外櫻田 日比谷  
數寄屋橋 鍛冶橋  
吳服橋 常盤橋  
神田橋 一 橋  
和田倉 馬場先  
右十御門夜五ツ時ノ切後無印鑑通行不相成候ニ付テハ先般御布令相成候諸藩小印出來候迄ハ從前用來候藩印六拾枚宛來八日迄ニ兵部省へ差出可申事  
三月  
太 政 官

三月五日山口藩兵隊暴動鎮定の旨示達せらる

〔東京より之御用状扣、從東京西京之下廻〕

今五日辨官傳達所より御呼出ニ付御所使罷出候處吉岡官掌を以御書附並山口藩届書壹通宛拜見之上寫取候様との儀ニ付則寫ニ通相達申候以上



三月五日

少 參 事 衆 中

公 用 人 中

別紙之通山口藩より届出候間爲心得相達候事

三月

太 政 官

先般御届申上候藩内兵隊中姦猾之徒兵力ヲ恃益亂暴相募候ニ付不得止過ル九日十日及討伐候處脅從無知之徒ハ不及申ニ巨魁之者モ前非ヲ悔伏罪平定仕候ニ付夫々解兵申付候追テ精細取調可申上候得共先御届申上候間此段宜御執奏所仰御座候以上

二月十八日

山 口 藩 知 事

辨 官 御 中

三月五日惡金引替の完成を府藩縣に督促せらる

〔從東京西京之下廻〕

三月五日月番方差廻來候 御書付寫

先般惡金引替之道被爲立銀毫貳分金之分之百兩ニ付先金札三拾兩ニ御引替被成下追而總目數銘々持分巨細御取調之上猶御詮議之品茂可有之自然蓄置又之姦曲之所業於有之之當人之勿論地方官之可爲落度候條去己年限引替候様同年十月中被 仰出候處僻遠之地御布令遲達之趣之未々引替殘モ有之其他銘々持分申立方不行届之向茂不少候ニ付格別之譯を以期限後之分モ前同様御引替可相成候條得其意己十月御布令之趣を以早々引替濟相成候様府藩縣ニ於テ可取計候事

三月

太 政 官

三月五日本藩緒方新左衛門に蝦夷支配地開拓用懸を命す

〔從慶應二丙寅年正月至明治三年江戸京都來狀扣〕

以別紙申達候今日及達候趣別紙書付爲御存差進中候以上

〔前略〕

三月五日

井澤 權 大 參 事

緒 方 新 左 衛 門

宗村 加 兵 衛 殿

右者蝦夷御支配地開拓御用懸被 仰付彼地に被差越旨

大 參 事 衆 中

三 月 (東京にて命し たるもの也)

權 大 參 事 衆 中

右之通三月廿五日着御用狀

覺

三月五日長州暴徒大樂源太郎護送者の目を窃みて逃亡し後豊後鶴崎に至り右修館に投す

〔防長回天史第六編下〕

〔明治三年後半ノ毛利氏抄略〕

七月三日兒玉半輔ニ逼塞ヲ命シ十七日ヲ經テ之ヲ解キ更ニ減知ニ處ス其家士ニシテ兇徒ノ一巨魁タリシ大樂源太郎ヲ山口ニ送致シ途上三月五日夜護送者ノ不注意ヨリ逃亡セシメタルヲ以テナリ

〔小森家文書〕

〔二月某日の修長州脱人秋山五郎等鶴崎に至り毛利到に依るの續き〕

其後も脱人追々ニ源兵を便り參候得共一々ニ之名前等覺不申尤大樂源太郎茂右之内ニ而諸生兩人を連參候ニ付是又到塾中ニ潜匿爲致吉田藤太外ニ三人名前失念古山嘉門より鶴崎町光福寺に一日潜匿爲致置候處暫相滯上方之様ニ參候由

明 治 三 年

四二九

其後猶又脱人六人計河上彦齋(高田源兵衛)に逢申度有修館に申入候處右奇兵隊ニ茂間ニ之賊同様之振擲いたし候者も有之候得之一々取台も出来兼河上彦齋と申者之居不申と返答いたし逢不申候故脱人重疊當惑之躰ニ候處是又一同御吟味被仰付候士族庄野助一弟ニ而一同有修館に相詰居候庄野彦七右之様子を見受應接いたし候處脱人より内情打明潜匿之儀頼出候由ニ而彦七も可憐情を開取潛匿之及相談候ニ付同人取計候ハ、於源兵(河上彦齋)も太慶ニ存候との趣返答ニ及候處右六人之關郷小黒濱磯吉と申者方へ潛匿爲致置候山然處到(毛)中潜匿之人數前後取集都合十六七人も有之たると覺是又一同御吟味被仰付候士族ニ而一同有修館に相詰居候木村弦雄古庄嘉門申談米三依潜匿人爲食料差贈候山然處同五月上旬と覺源兵儀就御用熊本の罷歸候管ニ付同居不申候而之潜匿之者に世話筋届兼候ニ付前文(利)と唱合大樂源太郎儀之元豊後地之内潜匿望ニ付同居十人計之毛利到名前之添紙面羅より認遣し同所最上等に差遣品川省三列七人計之源兵より添書前文古松簡次(久留米人)方ニ差遣潜匿爲致置候段申出候事(六月二日の條と參照すへし)

〔伯爵有馬家修史資料〕

赤座彌太郎氏談(抄出)

明治三年三月中旬大樂源太郎(本名ハ山口眞太郎)鶴崎町ニ來リ其ヨリ更ニ中潮市郎ト變名シテ鶴崎ノ勤王家毛利登(ト)ニ伴ハレ赤座宅ニ來リシハ三年三月廿五日ニテ三泊シテ詩韻ノ唱和ヲナシ其後六月二日復來リテ謀議ヲナシ云々

〔中村水雲事蹟〕

(前略)山口藩にては、奇兵隊の舊功を思ひ、何にとかして平穩に事を了せんと欲したるも、彼れ頑固にして時機を解するの明なく、旗を翻へし鼓を鳴らし、擊て關門を破らんとす。

是に於て藩府は事の到底平穩に結了すべからざるを知り、軍隊を遣はして之れを討伐せしむ、兩軍相戦ふこと數十合衆寡敵せず、終に奇兵隊は敗走せり、故に源太郎(大)は其恃む所の奇兵隊、十數名を従へて、其地より脱走せり、

當時鶴崎に在りたる川上彦齋、之れを聞きて痛く其暴舉を嗾歎す、然れども同盟軍の敗北、恬然之れを坐視するに忍びず、竊に弦雄(木村)をして、銃砲彈藥若干を送らしめたれども、源太郎は既に敗走の後にて、力を盡すの甲斐なく、空しく鶴崎に引き返せり。

斯くて大樂源太郎は、其後竊かに有修館に投し來る、館長に面會を求むるものあり、門衛其姓名を問ふ、旅人曰く、館長に之れを告げんと、彦齋之れを引見すれば、大樂源太郎なり、源太郎、彦齋に告げて曰く、そもノ今度の擧たるや、眞に暴虎馮河にして、一敗地に塗るゝは知るべきなり、拙者飽くまで之れを知るを以て、連りに時機を俟つべしと説得したれども、如何にせん憚悍の若者等、激昂の極、容易に拙者の言を用ひず、遺憾ながら、竟に此不覺を取りしなり。

今、君を訪ふは、心に安からざる事なるも、尙ほ生存雪辱の念、禁すること能はず、貴君に投じたる所以なりと、彦齋曰く、君の來意を諒とす、此上は世人の耳目を避けざる可らず、今、足下に紹介すべき者ありと、木村弦雄、澤春(舊名平井城之助)等を源太郎に會見せしむ、彦齋は弦雄等と計りて、源太郎を鶴崎所轄の僻地に於ける、或寺院へ潜匿せしめ、以て擧兵の機會を俟たしめたり、踵で源太郎が幕下の人々も投じ來れり

然るに山口藩にては、奇兵隊を蹂躪せしも、其首領大樂源太郎の生死詳かならず、謀者を四方に派して之れを探る……源太郎が豊後に逃げ込みたること、判然せり……熊本の常備軍と稱する有修館は、平生政府に不満を懐く、必ず源太郎等を潜匿せしめたるに相違なからんと、

是れより頻りに謀者を鶴崎に入り込ませしめ、以て其様子を探らせ、又た藩府よりは、公然と熊本藩に照會して、當藩の脱士大樂源太郎等、會藩の領地豊後の鶴崎に潜匿せり、宜しく捜査を請ふとの通牒あり、熊本藩にては、直ちに使者を有修館に派して、充分に之れを捜査して、山口藩の希望を満足せしむべく、嚴命を下せり、彦齋等陽には之れに服従するも、陰には正しく源太郎等を潜匿せしめ居れり、彦齋等大に苦心し、種々に考案を

既にして山口藩の謀者は、ますノ入り込み、熊本藩の命令は、いよノ厳しく、彦齋等到底、源太郎等を潜匿せしめ能はざるを知り、密に腹心の者に囑し、源太郎等を久留米の同志に託せり、是に於て、源太郎等を潜匿せしめりとの嫌疑は稍々晴れたり。

〔在中御達控〕

慶應三年卯八月  
午八月十六日達の内

一長州脱藩者之儀と去十月頃同藩桑山誠一郎津守幹太郎大野省三と申者三人探索と相見右到所に罷越面會之上時休之咄などいたし其後同人執筆など普請引取候由且當春之時分猶又同藩山本林之助外兩人到所に罷越面會之上左之通

彌平事

富永有隣

大樂源太郎

松尾太郎事

淺野恒太郎

石田秀三郎

伊藤勝次郎

内田甲熊

山田幸熊

末岡龜太郎

秋月光太郎

湯原卯三郎

右之面々之被髮脱劔一件より脱走いたし候由ニ而右尋方として罷越右名付之内有隣源太郎兩人ハ是非吟味いたし不申而ハ重疊懸念之様子ニ而到執杯怪様子ニ付同人より決而右様之者ハ私塾へ居不申御疑茂候ハ、塾に罷越一々改候様申向候由之處却而心外ニ存改迎いたし不申候由尤右有修館之儀之一時降なる事ハ前件之通他藩に茂響キ候程ニ爲有之處方歟林之助申候之御當所有修館と申之諸浪人茂入塾いたし居候共ニ而ハ無之哉と申候由ニ而到方ハ右等之儀ハ一切入塾いたし居不申御不審ニ候ハ、倡方ニ而高田源兵衛と申者參居候ニ付御同道仕同人に懸合同所御吟味被成候而ハ如何と申候由之處是又心痛之模様ニ而到所ハ以後有修館に罷越源兵衛に面會暫相引取候歟之由ニ而右到方應接之次第ハ當三月頃御達之趣ニよつて右達を茂ハムし置候由其御之事ニ而も可有之長崎産之由ニ而湯地團九郎と歟申者ハ無名之者之由ニ候得共三佐邊ニ而同藩より差押速越爲申由又傍ニハ追々長州より吟味ニ罷越候故歟右脱走人ハ四國路渡

り居可申杯と見込之唱も有之候得共何之形跡茂無之難信事之由

三月七日新潟縣を復活し水原縣を同縣へ合する旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

(三月七日御渡の内)

新潟縣被復水原縣同縣へ被移候付此段相達候事

三月

太

政

官

三月七日驛遞規則を發布し且つ追て外街道脇往還に關する規則制定につき諸藩の意見を徴せらる

〔從東京西京之下廻〕

(三月七日御渡の内)

今般驛法御改正御布告ニ付而ハ外街道脇往還トモ追々御規則相達可申候間於藩々御旨意ニ基キ舊習ニ不泥見込相認來ル五月晦日迄ニ可差出候事

三月

民

部

省

驛遞規則別冊之通被 仰出候付此旨相達候事

三月

太

政

官

本文驛遞規則御達書之西京に一冊熊本に七冊相添差廻申候事

三月廿三日

東

京

西 京 様

熊 本 様

隨受取申候 (別冊見當らす)

明治 三年

四三三

三月七日府藩縣に於て從來徴收せし諸川舟筏の定税を調査報告すへき旨を達せらる  
〔從東京西京之下廻〕

(三月七日御渡の内)

府 藩 縣

是迄取立來候川々往來船筏之定税巨細取調四國西國ハ五月其他ハ四月限可届出候事

但定税無之分ハ其旨可届出候事

民 部 省

三月 三月七日金銀銅鑿出高の申告を督促せらる

〔東京より之御用状扣〕

(三月七日大竹細少録より我藩御所使へ渡し)

新貨幣鑄造ニ付金銀銅年々鑿出高詳細取調去己年限可届出旨同年十一月中相達置候處今以不届出藩縣有之甚等閑之至候條早々取調來ル四月限可届出候此段相達候事

三月

民 部 省

三月某日京都大學校に假寄宿寮を設け來十日より入寮を許す旨達せらる

〔從東京西京之下廻〕

當月初旬より追々御書附渡ニ而御達之稜々左之通

今般當地學校ニ於假寄宿寮被設候付三十歳已下之宮華族並府藩縣士族入寮仕度兼ハ來ル十日より願出不苦候間同所に可伺出事

但入寮之儀ハ學校より差圖可有之候尤入寮中可爲自分賄事

三月

留 守 官

三月八日神祇官行幸の警衛を我藩兵に命せらる

〔東京より之御用状扣〕

今日兵部省方御呼出ニ付御所使罷出候處別紙御書付一通並繪圖面壹枚馬場少助を以御渡ニ相成御警衛心得方之儀ハ從前ノ通且馬場先御門へ切中當日神祇官出仕之御役々ニ而候ハ、聞届通行爲致可申尤朝五ツ時馬場先御門へ切可申段も同人方口達相成候間此段相達申候以上

三月八日

公 用 人 中  
兵 隊 二 十 五 人

來ル十一日神祇官に行幸ニ付御道筋辻固メ申付候條別紙圖面之通人數分配警衛可致此段相達候事(別紙圖面缺)

但辰ノ刻出張

還幸之後引取可申候事

三月

兵 部 省

熊 本 藩

三月八日日本藩樋口直次在世中勤王の志を賞し花岡山招魂祠に合祀する旨を達す

〔明治二年諸 達〕

(十二月)

一 神事局方左之通

樋口潤助弟ニ而先年於京都相果候

樋 口 直 次

右者藩法を犯脱籍ハ候儀ニ者候得共從來勤王之志不淺幾内ニ流寓尊攘を負荷候處ハ舊幕吏被捕獄中ニ而相果候付向後春秋兩度花岡ニ而招魂祭被仰付旨被仰出候條此段可被有御達候以上

三月八日(明治三年)

家令 衆中

尙々來ル十三日右祭典執行被仰付答ニ候以上

右之趣潤助支配方ニ及達候事

三月八日刑部省は横井平四郎刺客上田立夫等を京都より受領せし旨辨官に申告す

〔公文録讀并刺客處刑始末〕(内閣文)

兼テ御達有之候上田立夫始八人ノ者昨七日京都府ヨリ

護送無滞當省へ請取候ニ付此段御届申入候也

三月八日

刑部省

辨官 御中

(備考)

上田立夫	鹿島又之丞
土屋延雄	大木主水
谷口豹齋	鹽川廣平
中瑞雲齋	上平主税
已上八人	

三月九日日本藩長沼英之助彈正臺少巡察を拜命す

〔明治二年正月ヨリ京都並東京鶴崎長崎返達御用狀扣〕

長沼英之助儀今九日禮服用彈正臺ニ出頭候様御達ニ付公務司詰之内同道罷出候處別紙書取之通稻波少疏を以口達ニ相成候付則相達申候以上

三月九日

公務司

右一通

長沼英之助儀當臺少巡察被仰付候此段相達候事

右一通

〔從東京西京之下廻〕

長沼英之助

此段相達候事

木原彦四郎

三月九日

右者東京ニ被差越由ニ而寄京有之去ル九日爰許發途之

右稻波少疏を以口達相成候事

等候處

右之通ニ付木原茂未タ滞京ニ而有之候云々

長沼英之助儀當臺少巡察被仰付候

三月十九日

玉

生

三月九日北海道開拓使設置せられたるにより我藩根室國內二郡の保管を辭す

〔時勢雜錄〕

三月九日太政官へ左ノ通建言

北海道根室國ノ内標津目梨兩郡 聖意ヲ奉戴シ開拓經營速ニ實効ヲ奏スヘキノ處管内士民撫育ヲ始メ一新ノ政事晝夜

苦慮仕候折柄蝦夷隔絶地ヲ管轄スルカ如キ逆モ成功ヲ遂クヘカラス

朝廷既ニ開拓使ヲ置レタル上ハ是ニ一致ノ政教ヲ任セラル、方開化ノ功績モ速ナルヘシ故ニ詔邦管轄ノ儀ハ被免候様

奉願候此段奏聞仕候頓首謹言

十二日許可ヲ賜ハル

三月九日宣撫使德大寺實則神戸より海路横濱に歸着す

明治三年

四三七

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

(午三月十四日所聞(語又オハ)の内)

一 徳大寺殿神戸を飛脚船ニ而九日朝横濱に着相成申候直ニ而今日歸府と申風聞ニ御座候  
右一冊鹿兒島藩臨田市郎を差廻來候由にて高松藩大久保を廻達ハムし候事

三月十日日本藩新購入のコイラ船を靜海丸と改稱す

〔明治三年 記室日記〕

覺

本文船銘靜海丸と被改候事

コイラ船之儀洋名ニ而之外國船ニ紛敷候間和名相改候様外務省司の内意御座候間

三月十日

右船名御改被下候様奉願候以上

二月

コイラ 會 計 方

三月十四日京都還幸延期の旨を布告せらる

〔從東京西京之下廻〕

當年 還幸之上大嘗會被爲執行候筈ニ候處東北綏撫之道未被行届加之諸國凶荒奥羽ニ於テハ皆無同様國用欠乏旁以不被爲得止 還幸御延引被 仰出候間右之趣布告可致事

三月

太 政 官

右之通被 仰出候間相達候事

三月

留 守 官

〔近世史料編纂綱例〕

三月十四日 還幸延期ヲ京都府下ニ告諭ス

三月十四日外國人參朝につき沿道の警衛を我藩に命せらる

〔東京より之御用狀扣〕

(三月十四日大山省掌渡)

明十五日第一字伊太利國公使並英國水師提督參 朝ニ付道筋警衛申付候條別紙繪圖面之通人數分配差出可申事(繪圖 缺)

但第十二字出張通行之節捧銃可致候事

三月十四日

兵 部 省

熊 本 藩

三月十四日靜岡藩知事徳川家達其祖家康に賜はりし錦旗を奉還せむと願ふ

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

一 徳川祖先へ大政御委任ニ而公武御合躰ヲ被表日月之錦旗降賜居候處重寶ニ而城中ニ奉藏候而ハ寶漬之恐モ有之由ニテ  
日光山神宮内ニ遷置候を丁卯年政權奉還之砌錦旗之儀も一同奉還可致之處紛擾之間ニ而其機を失居候間今日右錦旗奉還之御沙汰懇願之由三月十四日差出

(参照)

三月二十三日靜岡藩知事徳川家達其祖家康ニ賜フ所ノ錦旗ヲ返納セント請フ今日之ヲ聽ルス(防長回天史第六編下)

三月十七日集議院開會につき諸藩議員は四月を期して參集すへき旨を達せらる

明治三年

四三九

〔東京より之御用狀扣、從東京西京之下廻〕

〔三月十七日佐竹官掌渡〕

集議院開院被 仰出候ニ付諸藩議員來ル四月中可罷出事

三月

太 政 官

御達覺

昨年中差出候議員之内ニは藩政ニ預カラサル者或ハ東京定住藩廳之事務ヲ取扱サル者等有之趣右ハ藩論御探聽之御趣意貫徹不致不都合之事ニ候此度議院御開相成候ニ付テハ兼テ被 仰出候通藩政向篤ト相心得候者ヲ撰舉シ藩論洞徹實地適用之議事相立候様厚相心得可申候事

三月

三月十七日阿蘇大宮司代理阿蘇惟敦彈正臺の召に應して東京に至る

〔從東京西京之下廻〕

〔前略〕  
三月十七日東京着

阿蘇 從五位

上下九人

右之通祿上仕候他之重便ニ讓如此御座候以上

三月廿三日

東 京

西 京 様  
坂 梨 様  
熊 木 様

三月十九日諸藩聯合觀兵式施行につき出場すへき隊長氏名及び兵員數を申告すへき旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

近日之内諸藩兵合併聯隊練

天覽可被爲在管ニ付當日差出候隊長姓名並ニ兵員等取調明廿日十二字限り以書付可申出事

但聯隊組合等ハ取調候上追而可相達事

三月十九日十二字出ス

兵 部 省  
古 河 藩  
熊 本 藩  
以下略

右者早々順達可致候也

三月十九日和蘭國公使參朝につき我藩兵に沿道の警衛を命せらる

〔東京より之御用狀扣〕

〔三月十九日南省掌渡〕

明廿日第一字荷蘭國公使參 朝ニ付道筋警衛申付候條別紙繪圖面之通人數分配差出可申事（繪圖缺く）

但第十二字出張通行之節ハ捧銃可致事

三月十九日

兵 部 省

熊 本 藩

三月廿日横須賀港に修船場を設置する旨布達せらる

〔從東京西京之下廻〕

明 治 三 年

四四一

三月廿日廻達御書之寫

相州横須賀港ニ於テ修船場御取建有之ニ付蒸氣船風帆船修覆差加度旨ハ直ニ同處ニ可願出候事

三月

太政官

三月廿二日我藩京都府下に在る邸宅地名坪數等に關する調書を京都府廳へ提出す

〔王政日新錄〕(熊本縣廳所藏)

一左之御届書一通河邊持參森田權大屬落手之事

當邸内ニ有之候邸宅地所今般御當府管轄被 仰出候付而邸宅地名坪數拜領地拜借地買得地等委細可申出旨致承知則左之通御座候

一壹万三千六百八拾七坪五分三厘

壬生邸

但別紙繪圖面相添申候

一右屋敷之儀元治元年舊幕より爲御警衛地被下置段達有之

一一昨辰年十一月向後地代米壬生村に相渡可申旨行政官より御達ニ付年々相渡申候

一三百八拾四坪

高辻通大宮西に入買得地

但別紙繪圖面相添申候

一壹万六千貳百拾七坪

千本通下立賣下ル拜借地

但一昨年拜借被 仰付候處今般御達之通ニ付返上之心得ニ御座候以上

三月廿二日

熊本藩

京都府

三月廿三日我藩政府は山口藩暴徒脱走人取締方につき鶴崎郡宰諸方加右衛門後改に傳達し該地方の取締を嚴にせしむ

〔明治三年 記室日記〕

山口藩隊卒沸騰ニ付從太政官御渡ニ相成候御書付寫一通差遣候條奉得其意取締筋無油斷可有差圖候此段爲可申入如此候以上

三月廿三日

權大參事

緒方加右衛門殿(鶴崎郡宰)

右太政官御書付左ノ一統觸之通ニ付扣略尤右書紙面並太政官御書付寫共奥村軍記鶴崎主事當時出府承知之ため差遣候事

(大坂官御書付とあるは二月八日山口藩隊卒處置に關する達文にて此には略す)

三月廿三日山口藩は今般新に士族一大隊を佛式兵制修行として上京せしむる旨を申告す

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

當藩兵制是迄英蘭兩國之式相用イ來候處此度士族一大隊佛式修行爲仕度東京差登セ候間此段御届申上候様山口表ヨリ申越候以上

山口藩公用人

穴道直記

三月廿三日

(備考)

明治三年



六日(二)干城隊一大隊ノ願ニ依リ自費東京ニ赴キ佛國式操兵ヲ傳習スルヲ許シ六ヶ月ノ暇ヲ與ヘ七族第一大隊ト稱セシメ毛利親信ニ長官ヲ井上四郎東條九市ニ取締ヲ命ジ以下世話役頭取會計方等ヲ任命シ昭武隊一小隊ニモ亦同行ヲ命ス(防長回天史第六編下)

三月廿四日我藩先きに保管を命せられたる静岡藩海老原健三郎等十二人謹慎免除につき護送して同藩に交付す

〔東京より之御用状扣〕

御預人海老原健三郎列十二人今度静岡表に被差越候付於同所吉田小左衛門引渡之御使者相勤別紙之通請取渡相濟申候右ニ付小左衛門並付添之ものは別紙之通被下置候段申出候間此段相達申候以上

四月五日

公 用 人 中

少 参 事 衆 中

元當藩家來

海老原健三郎  
杉浦多嘉吉  
關 彌太郎  
森川善之助  
小坂三十郎  
中村兼太郎  
龜谷丑太郎

武川勇次郎  
久保常吉  
伊久間市之助  
土屋文次兵衛  
小澤 教治

右者先般其御藩に御預被仰付候處今般謹慎御免被仰付候條御引渡被遣正請取申候將其御藩に御預中並御送越等之儀彼是預御配慮係被存候右御挨拶厚可申述旨知事

被申付候事

静岡藩

三月廿四日

(別紙引出物届書は略す)

松本惣次郎

三月廿四日東京日本橋欄干に貼紙して官吏の不徳を諷るものあり

〔明治三年ヨリ探案書控〕

午三月廿四日東京日本橋欄干ニ張り有之候檄文之寫  
方今恐多も 輦轂之下諸品日増ニ騰貴億兆之下民兄弟妻子四方ニ離散シ塗炭之苦痛を受終ニ道路ニ餓死ニおよび候輩も有之哉ニ相聞嘆歎事ニ候右畢竟勿躰ふくも鄙野之小人口辨を巧ミニシ莫太之賄賂をいまで過分之位階を穢シ飽食暖衣剩へ婦人ニ感溺して愛妾を圍ひ己之權威を誇り諸人を塵芥のふとく蔑視シ刑部省之輩ニ至而之罪人之多きを悦び楚撻之甚敷無罪之者も無余儀陳述もれば欣然として曲直を糾明せま遂に殺戮をいふし候始末不屈之所業御維新之際傍觀致かたく草野有志之者大學して天下之大逆賊を誅除し乍恐 朝廷を奉安候様致且下民共倒懸之苦を相救度存候間不口會合可致今暫之處苛政を相忍び雲霧開晴之時を可相待者也

庚午三月

大日本國

草野微賤之有志共

三月廿五日明廿六日觀兵式豫行の達あり

〔從東京西京之下廻〕

三月廿六日岡山藩を差廻來候御書付寫  
近日聯隊練兵 天覽被爲在候付兼而届出置候兵員明廿六日越中島に出張試練可致事

但第八字出捕聯隊司令高橋熊太郎布施保大隊司令原六郎中村良藏出張候條可受指揮事  
一各藩兵聯隊編制書爲心得相達候事

明治三年

四四五

一當日ハ勿論前日共雨天ニ候ハ、順延之事

三月廿五日第四字出ス

兵部省

鶴	三	岡	第	和	長	古	明	高	高	德	勝	熊	關	岡	名	佐
舞	上	崎	一	歌	尾	河	石	德	松	島	山	本	宿	山	古	賀
藩	藩	藩	遊	山	藩	藩	藩	藩	藩	藩	藩	藩	藩	藩	屋	藩
			軍	藩												省
			隊													

右者至急ニ可致順達候事

英式

第一大隊

一大隊司令

一右教頭

一左同

一教佑

一裨官長

佐賀藩

一壹番小隊

同

一貳番小隊

同

一三番小隊

土浦藩

名古屋藩

一四番小隊

土浦藩十四人

五十二人

六十人

五十八人

五十四人

岡山藩四十人  
 一五番小隊 五十四人  
 岡山藩四十人  
 關宿藩十四人  
 一六番小隊 五十四人  
 松山藩  
 一七番小隊 五十三人  
 金澤藩  
 一八番小隊 六十人

第二大隊  
 熊本藩  
 一壹番小隊 五十三人  
 一貳番小隊 五十二人  
 柳川藩三十五人  
 大聖寺藩二十人  
 一三番小隊 五十五人  
 大聖寺藩二十四人  
 吉田藩三十二人  
 一四番小隊 五十六人

明治三年

勝山藩六人  
 小濱藩四十六人  
 一五番小隊 五十貳人  
 高田藩三十人  
 西尾藩二十八人  
 一六番小隊 五十八人  
 勝山藩六人  
 松江藩四十八人  
 一七番小隊 五十三人  
 姫路藩  
 一八番小隊 四十九人

第三大隊  
 德島藩  
 一壹番小隊 五十人  
 同  
 一貳番小隊 五十人  
 高松藩四十人  
 高德藩二十人  
 一三番小隊 六十人

四四七

- |         |          |      |
|---------|----------|------|
| 明石藩四十人  | 一二番小隊    | 五十三人 |
| 古河藩十人   | 高松藩      |      |
| 一四番小隊   | 一三番小隊    | 六十人  |
| 長尾藩三十二人 | 第一遊軍隊    | 五十五人 |
| 和歌山藩二十人 | 一四番小隊    | 五十五人 |
| 一五番小隊   | 第一遊軍隊十五人 |      |
| 第三遊軍隊   | 豐橋藩四十五人  |      |
| 一六番小隊   | 一五番小隊    |      |
| 同遊軍隊    | 岡崎藩二十四人  |      |
| 一七番小隊   | 三上藩二十六人  |      |
| 古河藩十二人  | 一六番小隊    | 五十人  |
| 西條藩四十三人 | 丸岡藩四十二人  |      |
| 一八番小隊   | 鶴舞藩十五人   |      |
| 第四大隊    | 一七番小隊    | 五十七人 |
| 田原藩十人   | 富山藩四十四人  |      |
| 福井藩四十五人 | 田原藩十三人   |      |
| 一壹番小隊   | 一八番小隊    | 五十七人 |
| 久留米藩    | 千七百五十三人  |      |

三月廿五日觀兵式施行につき我藩魚住勤山川龜三郎大隊司令を命せらる

〔東京より之御用狀扣〕

今日兵部省より御呼出ニ付罷出候處別紙御書附有川權大丞を以御渡相成候間相達申候以上

三月廿五日

公 用 人 中

少 參 事 衆 中

其藩魚住勤山川龜三郎練兵 天覽ニ付大隊司令申附候間此段相達候事

兵 部 省

三 月 熊 本 藩

三月廿六日本藩知事詔邦病に依りて隠居し弟護久に家督せしむへき内意を藩内に示達す  
〔明治三年 觸帖扣〕

覺 權 大 參 事 少 參 事 事 に

知事様年來之御痛積氣去冬以來之時々御差發寸斗不被遊 御勝候付今般 朝廷に御窺筋茂 新從四位様に 御委任被  
仰出候通候處 御同方様御事最早御勤之 御年齢ニ茂被爲及候御事ニ付於東京御都合次第 御隠居御家督之儀御願可  
被遊 御内存御治定被爲在候此段孰茂に可申聞旨被 仰出候條奉得其意觸支配方に茂可被達候以上

三月廿六日

奉 行 所

三月廿七日我藩外邦の長技を用ひ強兵の基を立て洋風を失ふへからすとの方針を定む

〔明治三年 記室日記〕

銃隊歩操等之儀者專職之事ニ候得之改而申談ニ不及出精當前之事ニ有之候處當今外國之御交際厚相成且器械之精巧ハ

明 治 三 年

四四九

御採用ニ相成候儀ト奉伺候處彼カ萬國公法等ニ基キテ或ハ被髮廢刀教法心術迄彼ニ心醉シ固有之禮義廉耻ヲ失候様相成候而之 御趣意ニ屢重疊奉恐入候次第ニ付隊中一己々々之心得違等之儀無之強兵之根元を養候様平常申談置度事本行書付ハ當時御國議之趣虎之助カ小銃隊長小笠原一學列ニ及咄合候趣同人カ書取ニして尙爲念伺出候付此通ニ而存寄無之段三月廿七日及返答候事

三月廿七日日本藩林藤次召されて有栖川宮邸に參殿し傍人を拂ひ密に諮詢に答へ翌日また岩倉邸に至り密に意見を上陳す

〔武藏櫻園先生遺稿〕

〔文書櫻園先生遺稿〕

〔東上日記抄略〕

明治三年正月朔晴神拜如例讀日本紀初卷一二丁去年買得黒羽本

七日晴 有栖川宮ニ拜謁

二月二十三日晴有栖川宮様諸大夫武藤辰雄ミヨ

三月廿七日雨書後有栖川宮様拜謁御直言上尤人はらひ有栖川様にては御下ケ緒袋二品拜領

二十八日晴七ツ過岩倉様に拜謁御直言上尤人拂ひ有栖川様に昨日の御禮に大野參上

二十九日晴大野昨日の御禮に參上

三月廿八日長岡護美書を大久保利通に贈り藩政改革の意見を述べ且つ軍艦獻納に關し齟齬せし點を陳辯す

〔小橋私記〕

春風和氣之節

皇上益御機嫌能奉恐悅候先以て兩京御清寧欣躍仕候盟兄依舊御勉勵致恭賀候爾來差て申入儀も無御座打絶御訊問不申多罪御諒照可被成候追々御大政御盛典相立可申皇國永久之御基礎奉恭悅候當藩に於て知事以下小生輩庶務一新之定意にて苦慮罷在候得共御承知之通り舊來之陋習容易に破却不得候間今般拙兄上京に決議萬般 朝旨を奉し大義に依り斷然一新之心決にて異議に及び候輩は不得止一刀兩斷之決を成し候埒にも至り可申屹度一洗之目的を達し候定意に候間御休襟可被成候陳は一昨年東京在動中申入置候當藩注文之軍艦局外中立等彼是談判にて延期に及び近頃漸く廻着今度天覽被仰出候通に候處兼て盟兄へ申入置候船之長短砲門之多寡等製造中彼是齟齬致し居候間情實御諒照被成三條閣下へも言上有之度御依頼申候藩内之事情に於ては今般米參事へ託し置候間別段不贊候先は要用申述度早々不備

三月廿八日

長岡從四位

大久保參議

侍史

尙々御自重致專祈候不盡

三月廿八日京都府知事長谷信篤同大參事松田道之同權大參事榎村半九郎正等昨年冬大村刺客死刑執行の際處置を過りたりとて謹慎を命せらる

〔明治三年ヨリ〕

〔探案書控〕

被免謹慎被仰付

同於藩謹慎

京都府知事 長谷三位殿  
同大參事 松田五位

〔全書〕

大參事

植村京都府權大參事

止刑之儀取計手落ニ及候付謹慎被仰付候事

三月廿八日

太政官

一知事殿謹慎被蒙 仰候由松田大參事植村權大參事同斷右之通松田大參事より知達有之候付爲心得及御内達候也

四月三日

右四月六日所聞

右四月九日鹿兒島藩脇田子より廻報

三月廿八日彈正大忠門脇重綾京都府大參事松田道之等鳥取藩に保管せしめられたるを解除せらる

〔明治三年ヨリ探案書控〕

午三月廿八日辨官に公用人御呼出御達

鳥取藩

門脇彈正大忠松田京都府大參事足立彈正少忠儀糾問中其藩に御預ケ被 仰付置候處被免候事

太政官

三月 翌廿九日辨官より彈正臺に届書

門脇彈正大忠儀御糾問中當藩に御預被 仰付置候處廿八日被免候ニ付今町番町御厩谷拜借邸に引取申候此段御届申上候以上

三月廿九日

鳥取藩

辨官

御傳達所

一三人共御預之被免拜借邸改而謹慎被仰付候由役儀ニ之別條無之事

三月晦日本藩世子護久熊本を發して東京へ向ふ

〔慶順公御隠居御家督一途〕

一新從四位様益御機嫌能三月晦日熊本御發駕小島より御軍艦（艦也）ニ被爲 召段々御渡海四月十六日東京被遊御着候事

三月某日本藩現石高人口常備兵員調書を提出す

〔諸務變革調〕（熊本縣廳所藏）

昨己年十月大政官に御届仕候當藩版籍調書之内現石高人口常備兵員取調可申上旨奉長別紙之通御座候此段御届仕候以上

熊本藩

公用人名

月 兵部省

表紙上ハ書也

壹万三千貳百貳拾七石五斗

現石高人口常備兵員

熊本藩

細川利永内分  
壹万四千四百九拾石貳斗八升五合六勺

一現石高三拾万四千八百三拾八石壹斗六升四合四勺三才

内

細川行眞内分  
一人口七拾壹万六千八百七人

明治三年

四五三

内

士族 壹万九千八百九人

但

男 九千九百九十五人

女 九千八百九拾五人

卒族 八万三千五百三十八人

但

男 四万五千貳百三拾三人

女 三万八千三百五人

庶人 六拾壹万三千三百七拾九人

但

男 三拾万五千七百九十六人

女 三拾万七千五百八拾三人

三月某日本藩藩士兵卒祿扶持米減省及ひ支配地女人人口并に物貫戸口調書を提出す  
〔諸務變革調、江戸狀扣〕

表紙上ハ書也(左の三行)

藩士兵卒従前之祿扶持米改革差引減省分

熊本藩  
公用人名

一當今常備兵員

歩兵 八拾九小隊

砲兵 九隊

騎兵

上付札

本文騎兵ハ未々取起不申候付重士十三小隊歩兵ニ

差加置申候

佛式四斤半砲

大砲

但彈藥一門ニ付貳百發宛添

小銃 四千貳百七拾貳挺

三月

右之通御座候以上

藩士兵卒従前之祿扶持米と此節改革之給祿と差引減省  
高取調可申上旨奉畏左之通御座候  
従前之祿並扶持米等最前御届高  
一米貳拾萬參千貳百五拾壹石四舛五合

右同斷此節改革高

一同拾四萬六千六百八拾石貳斗八舛貳合六勺四才

但給祿之儀者根元四ツ物成之規矩を以渡置候處逐年

國計及不足ニ付實曆年間改革其後追々減省猶又今般

御達之旨ニ付減省を加申候就而者従前四ツ物成を以

渡置候節之立合茂爲御見合付札を用置候

内

九萬四千九百五拾參石七斗九舛七合四才

貳萬七千八百七斗

壹萬參千貳百貳拾七石五斗

壹萬四百九拾石貳斗八舛五合六勺

細川利永内分

細川行眞内分

差引

五萬六千五百七拾石七斗六舛貳合參勺六才

右之通申越候付此段申上候以上

此節改革減省高

明治三年

熊本藩公用人

三月

辨官御役所

本文但書上ニ附箋

従前祿扶持米等四ツ物成ニ而渡高

一米貳拾六萬五千七百貳拾六石餘

此節改革祿扶持米高

一同拾四萬六千六百八拾石餘

差引

拾壹萬九千四拾六石餘

表紙上ハ書也(左の三行)

熊本藩支配地女人人口稜分並物貫戸口數

熊本藩

公用人名

支配地女人人口稜分並物貫戸口取調可申上旨奉畏左之通  
御座候

女人人口合

一三拾五萬五千七百八拾三人

四五五

内

八千人  
 三萬四千五百拾四人  
 千六百五拾四人  
 七千六百八人  
 九百二十拾人  
 二千二百四拾九人  
 二拾七萬八千五百八拾四人  
 壹萬八千五百五拾三人  
 五百二十拾三人  
 三千五百七拾八人

士族女  
 兵卒女  
 兩末家士卒女  
 從前陪臣女  
 社家女  
 僧家女  
 農家女  
 商家女  
 替女  
 穢多女

物貫人口合

一三千八百八拾三人

内

千六百三拾九人  
 千五百四拾四人

男 女

物貫戸數合

一三百四拾五軒

右之通申越候付此段申上候以上

熊本藩公用人

三月

辨官御役所

小橋 恒藏

三月某日大學少博士岡松辰吾正七位に叙せらる

〔從東京西京之下廻〕

岡松少博士

右宣下候事

叙正七位

三月

太政官

三月某日本藩寺倉三伯大學東校句讀師試補を命せらる

〔從東京西京之下廻〕

寺倉三伯

三月

大學東校

右句讀師試補申付候事

三月某日柴山藩士橋本竹城等の奸謀露顯して禁錮糾問せらる

〔探索書控〕

明治三年ヨリ

庚午七月東京下廻方來

柴山藩元掛川士沸騰一件書拔

元一等職執政	百 俵	橋 本	竹 城	三十九
元二等職參政	七拾俵	橋 瓜	敬 三	二十一
元三等職	四拾三俵	渥 見	一	三十五
同	廿五俵	高 橋	爲 一	四十三
元四等職醫師兼議士	四拾俵	山 崎	干 城	二十四
元同士族	三拾二俵	山 崎	直 記	

右之者共陽ニ正義之名を假陰ニ窮民ヲ誑惑シ金子指出サセ潜ニ集會酒食ヲ催シ黨類連結シ私情ヲ逞クシ己ニ不隨者ハ暴舉壓倒セント謀テ容易事件ニ可立到折柄其徒ノ内ヨリ訴出ノ者有之黨與之奸謀全不備斷然禁錮申付置追々及糾問當時刑部省へ。處置ノ由一説ニ橋本竹城者門閥ニテ一昨年來勤王ヲ口實ニ跋扈シ若年ノ知事公故藩政ヲ握ント企望之處反忠有テ及露顯斷然禁。セシム然ルニ黨中ヨリ窃ニ彈正臺。取調相成候處奸徒之事情中氷解相成刑省ニテ御取調中之由風聞傳仕承ニ付此段御届申上候

三月

失

名

明治三年

四五七

右岩國藩勝屋九一郎が得之候

四月二日諸國疲弊困窮の状況を報する者あり

〔明治三年探索書控〕

四月二日付在坂富藤彌九郎が來翰之内

幸便啓上三月廿一日道中無滞着坂諸街道筋一圓京坂迄之人々ノ咄疲弊困窮相極候扱々哀成事共已而或日夫婦始家内中八人一同入水致シ候者ヲ眼前ニ見受長嘆之至其他乞食等仲間ニ而打殺シ喰ヒ候始末言語ニ絶シ候京都ハ日々三四十人位も首縊入水等有之由大坂もソロソロ始リ申候夫故盜賊夥數諸人ノ難儀此上如何と惘然罷在候一時御仁慈之御施行奉祈念候事ニ而乍恐自然と上ヲ奉怨候者出來可申哉と痛心千萬吳々も田園之趣向ニ相限候云々

四月三日日本藩重臣松井新次郎長岡帶刀の改名山城和泉兩國内の采邑上地を命せられ改めて廩米を下賜せらる

〔明治二年四月以後東京より之御用狀扣〕

〔四月三日林少辨より小橋恒藏へ渡し書付二通〕

熊本藩

先般各藩封土奉還之儀被聞食更ニ被任知藩事家祿之制被爲定隨テ士族卒祿制御定ニ相成候付テハ其藩長岡帶刀別紙之通知行所上地被 仰付改テ祿制之通廩米ヲ以下賜候事

四月

但地所之儀ハ管轄府縣へ可引渡事

太政官

長岡帶刀

現米貳拾貳石

山城和泉兩國ニ於テ

高百七拾三石貳斗九升 上地

右廩米賜之

四月三日日本藩和田權五郎練兵天覽の節大隊司令を命せらる

〔明治二年四月以後東京より之御狀扣〕

〔四月三日召に依り和田權五郎御所使同道出頭の處頼川權大丞より渡し〕

其藩和田權五郎義練兵 天覽之節大隊司令申付候條此段相達候事

四月

兵部省

四月三日大坂に於て兵學寮青年學舎を開設し各藩より學生を募集する旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

四月三日差廻來候寫

今般兵學寮陸軍學舎御規定メニ相成於大坂來ル四月廿

日方青年學舎御開相成左之割合を以依頼入學差許候間

御規則通達吟味同月十五日迄ニ本人差越其支配ヨリ以

書添同地出張所に可願出候事

四月三日膽澤縣大參事安場一平酒田縣大參事に任せらる

一大藩	四人迄
一中藩	三人迄
一小藩五萬石以上	二人迄
一小藩末五萬石	壹人
四月	兵部省



〔從東京西京之下廻〕

安場瞻澤縣大參事

右 宣下候事

任酒田縣大參事

四月三日

太 政 官

四月三日長州脫徒大樂源太郎鶴崎より密に姫島に往き故國變動後の狀況を探る

〔毛利家文書〕

其後御清程被爲在奉賀候昨午後順風ニテ七ツ過キ姫島ニ着仕候御安心可被下候故國之風景都合依然タル様子然シ斬首セラル、者前後合セテ七十名位ヒ投獄流竄ヲ併セ百二十餘人ト申事也先月廿五六日頃探索ノ兩三名此地ニ來候由山本六郎ニ外一人ハ忘レ申候何モクハシキ一ハ不承候何レ一兩日内ニハ一人歸リ候間萬事分曉可仕候先ハ幸便眞ノ一筆申上候其内御自愛第一ニ奉存候草々敬白 四日近午手認  
再白御老親様方へ厚ク御致意是祈高田古莊諸君へ不別啓是亦可然奉願候本文之人物ハ御方角エモ可參被考候御用心可被下候頓首

小野ヨリ厚御傳申候

登 君 侍 史

一 郎(中顧一郎也大樂の變名也)

莫曰兄登君ノ言ヲ聞クニ此書ハ大樂カ投來ルノ後其故國長州ノ近況ヲ知ランコト切望シ姫島ニ赴カンコト欲スルカ故ニ特ニ家島ノ漁舟ヲ雇ヒ之レニ乘ラシメ姫島ニ送リタル時ノモノナリ姫島ニテハ島ノ莊屋古城虎次大樂等ノ爲メニ大ニ盡力セシナリト(登と莫とは共に毛利到の子なり)

四月四日我藩末家細川行眞東京に着す

〔東京より之御用狀扣〕

明治二年四月以後

字土執政

岡 川 速 水

御知せ被申上候段公用司に罷出申述候以上

四月五日

公 用 人 中

右者左衛門尉殿昨四日川崎之驛より御當地に着ニ相成候

四月四日酒田縣大參事津田山三郎依願本官を免せらる

〔東京より之御用狀扣〕

明治二年四月以後

津田酒田縣大參事儀依願本官ヲ被免候間此旨相達候也

四月四日

辨 官

熊 本 藩 知 事 殿

〔津田家記津田信弘履歷書〕

同三年二月病氣ニ付辭表差出シタル處同四月願ノ通本官ヲ免セラレ歸藩ノ節東京ニ於テ熊本藩權大參事ニ任セラレ(熊本藩權大參事任命は五月の事なり)

四月五日日本藩魚住勤大隊司令を免せらる

〔從東京西京之下廻〕

魚 住 勤

四月 五日也

兵 部 省

大隊司令差免候事

四月五日在東京本藩吏員は東海道驛馬廢止せられて荷物運送上變動を來たし種々手敷を要する旨を在藩同僚に報す

明 治 三 年

四六一

〔從東京西京之下廻〕

〔四月五日東京發四月廿一日熊本着下廻也〕  
 今月初度之飛脚今五日被差立候付拜呈仕候〔中略〕  
 今度東海道馬被廢止候付而ハ御用狀之通ニ而横濱異體便次第ニ差立候間已來ハ定日差立候杯申儀ハ一切被行不申横濱迄之東御門下川舟ニ而乘廻同港方ハ兵庫迄於同所ハ御用達安田惣兵衛宅に荷揚いたし一人之相滞一人ハ大坂へ御用物相達同所方西京へ罷登尙又下坂之上於同所飛船ニ乘組兵庫へ乘廻同所へ荷揚之御用物積込鶴崎路罷越候間熊本ヨ之飛脚も右ニ準御取計ニ相成候様委細之人柄可申出候間御取被下度右之趣意ハ於東京府川蒸氣を拵惣而賃錢を取候趣ニ相聞萬事難有御趣意而已トて御座候此節之人柄左之通

吉 岡 圭 之 助  
 山 口 仁 右 衛 門

〔全書〕

〔四月十二日西京發四月廿一日熊本着下廻抄略〕  
 一今般東海道驛法御改革ニ而馬被廢止人足計被差置候付先便東京御布告書一通差廻來候先月初之御飛脚 三原四郎助去ル朔日着々し御改後初而之事ニ付公務司河邊鐵之助京都驛遞司へ罷出懸合せ候處大藩ハ從三位相當二十二人之半高拾一人丈ケハ御用人足可被渡下候間驛遞司へ改方ニ差出候様申候間御布告書之通之改寸法札を付ケ人足昇荷ニメ去ル四日引渡翌五日朝右改所へ荷越改を受ケ仕立々し申候右改所も八ツ後ハ役人居不申上一六ハ出方無之由ニ御座候夫一人七貫目持若京驛遞司ニ而改後斤目増候ハ、大津ニ而増方々し將又痛足有之候而ハ直屋外難叶假令拾一人不滿ニ而も駕夫杯ニハ不被渡下候由右之次第ニ付以來ハ一人七貫目持之積ニ拾一人方越不申様荷物こしらへニ相成候様得御意置申候右改ニ差出候付而も書付を差出被是手數増ニ相成申候委ハ近日高田恒右衛門出立々し候間着之上御聞被成

可被下候

四月六日日本藩井上多久馬に佛學修業として東京遊學を命ず

〔慶應元年ヨリ明治三年迄 遊學一巻帳〕

御家來井上多久馬儀佛學修行として東京に被指越候條此段可被成御達と奉存候以上  
 井 上 多 久 馬  
 學 校 局

四月六日

米 田 與 七 郎 殿〔五月七日附東京よりの下廻に 四月廿日附井上多久馬とあり〕

四月七日正權大中少宣教使を正權大中少博士と改稱する旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

宣教使中正權大中少宣教使自今正權大中少博士ト被改候事

四月七日也

太 政 官

四月七日開拓使職員中に監事權監事を置く旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

今般開拓使職員中

右之通被置候事

監 事 相當 正六位

四月七日也

太 政 官

權監事 同 從六位

四月七日癸丑以來有志の徒國事に關係ある日記書簡等史料となるべきものは提出すへしとの旨示達せらる

明治三年

四六三

〔從東京西京之下廻〕

四月七日差廻來候御書付寫

癸丑以來天下有士之徒時事ニ奔走力ヲ國家ニ效ス者不少其成敗得失素ヨリ多端トイヘテ要スルニ忠誠義烈之事蹟決テ湮滅ス可ラス此節御記録編輯御用ニ付其砌之日記手扣及書簡等國事ニ關係候分之所持致シ候者ハ早々其筋へ差出可申事

四月

太 政 官

四月八日各藩主の隠居を宮中に召さる三條實美維新の王業猶ほ未だ整備せず前途遼遠なるを以て時勢に關し意見あらは忌憚なく開陳すへしとの旨を傳達し且つ吹上御苑にて酒饌を賜ふ

〔明治三年ヨリ探索書控〕

明石藩に辨官衆ヲ到來書寫各藩同文ナルヘシ

御用之儀候間來ル八日午ノ刻直垂着用參朝可有之候也

四月五日

辨 官

松平從四位殿

右ニ付同八日同刻參朝被致候處於大廣間二之間三條殿御口達五辻辨官列座

口上覺

御一新以來追々御改正今日之御政體ニ立到候處猶前途之遠キ御煩慮被爲遊候ニ付而之時勢形勢之儀ニ付存寄有之向之

四月

右御口達相濟而於吹上御庭御料理被下候旨ニ付今日參朝之御隱居方左之通順々御運ニ相成候事

但吹上瀧見ノ御茶屋ニ而被下候事

津山	松平正四位齋民	守山 <small>以下略</small>	笠間	館山	岡	福山所勞
明石	松平從四位慶憲	清崎	芝村所勞	伯太	田原	鞠山
前橋	松平從四位直克	岩槻	棚倉	黒川	松嶺	沼田所勞
土浦	土屋從四位寅直	大綱同	柳本	西端	米澤	七戸
菊間	水野從四位忠寬	湯長谷	以上			龜田
山形	水野從四位忠精					
三上	遠藤從四位胤緒					

右何レモ瀧見御茶屋ニ於テ種々御料理被下候數杯之上猶御膳ヲモ可被下旨之處津山老侯仰ニ斯醉休之上者御膳ニ不及猶一献頂戴シテ何レモ是ヨリ御庭中ヲ拜見セン迎諸老侯御酒機嫌ニ而御庭ヲ廻候由尤御座席御取持坊城大辨殿姉小路殿千種殿戸田宮内大丞殿外ニ兩名不詳右之方々俱ニ酔テ盡サレ末ニハ烏帽子等茂取られ候程之由道々御戯れ勝手ニ而御退散之由

但今日出御無之

一當府御隱居方メ三十二名餘之近々參府候由

一不參之向都合四十九軒何レモ早々出府候様と之嚴命有之

右之比日東京方申來

六月二日寫

右高松藩東京同藩方到來之由ニテ大久保より差廻シ來候事

明治三年

午六月五日

四六六

猪俣才八

四月八日癸丑以來舊幕府の要職に在りし者及び各藩に於て日記文書等の國事に關係あるものは調査進達すへき旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

四月八日廻狀を以差廻來候御書付寫

諸

藩

御記録編輯御用ニ付癸丑以來舊幕府ニ而柄要之職務相勤候向ハ勿論總テ藩々之日記文書類國事ニ關係候分早々取調可差出候事

四月

太政官

四月八日我藩にて製造せる紙幣の種類及び總高を申告す

〔明治二年四月以後  
東京より之御用狀控〕

四月八日大藏省へ差出候書付寫

大藏省御役所

覺

當藩之儀從前々金銀造イ方手馴不申專現錢を以通用仕候處物價之騰貴ニ隨運輸之難澁を生し候付寛政三年始而錢之手形を振出し候處品物愈々而多分之價作相混融通不宜候付享和度ニ至手形之製造向を替寛政度之預之悉引替候得之ニ融通之道を開其後漸々相増申候右之金銀札と申譯ニ而茂無之庶民之辨利ニ任取替候預手形之儀ニ付舊幕府時代ニ之可否伺取置不申候得共今般御布令之趣ニ付右員數取調別紙御届申上候通御座候此段添書を以御達仕候以上

四月八日

熊本藩

崎村常雄

大藏省御役所

當藩從前製造之楮幣總高取調御届可申上旨ニ付左之通

一錢預手形三拾八万八千貫目

此金百九拾四万兩

享和元年以來御一新以前製造分金壹兩ニ付預手形二百目宛尤双場ハ時々高下有之候得共當時之處右之通ニ付本行之通

右預手形種類左之通

壹貫目預 百目預

五拾目預 四拾目預

三拾目預 貳拾目預

拾目預 五目預

貳匁五分預 壹匁預  
五分預 貳分預  
一同五万貫目

此金貳拾五万兩

御一新後製造ニ付此節停止申付候分金双場前條同斷

右預手形種類左之通

壹貫目預 五百目預

二百五拾目預 百目預

五拾目預

右之段御届申上候以上

熊本藩

崎村常雄

四月九日三條實美の寓居に貼紙して其行爲を謗るものあり

〔明治三年ヨリ  
探索書控〕

午四月九日霞ヶ關福岡邸表門に張札之寫三條公卿  
住居也

明治三年

四六七

天下内亂鎮定ニ及といへとも 朝廷大政御多端之折柄過日累水遊行之途中淺草花川戸駕籠屋渡世上總屋榮八と申者娘當年二十歳ニ相成候處傾國之容色ニ戀着致シ幾許之金を費シ愛妾ニ召抱候段分明ニ候重キ役柄之身分女色ニ惑溺シ下民凍餒之難苦を不厭重々不埒之始末ニ候依之諸官有司見懲之たゞ東京中五ヶ所ニ張置候者也

四月

有志之士

四月十日日本藩大參事米田虎之助東京に到る

〔從慶應三内寅年正月至明治三年江戸京都來狀扣〕

以別紙申達候米田虎之助方去ル十日無異議爰許被致着候此段爲可申達如是御座候以上

四月十四日

井澤權大參事

大參事衆中

權大參事衆中 (四月廿五日假本番)

四月十二日本藩知事詔邦甲鐵艦一隻鐵艦を献す

〔明治二年四月以後東京より之御用狀扣〕

今日辨官傳達所々重臣御呼出ニ付爲名代崎村常雄罷出候處坊城大辨殿を以別紙御書付二通(内一通は茲に採録せず)御渡ニ相成候ニ付則相達申候(中略)以上

四月十二日

公用人中

細川熊本藩知事

海軍御興張之 御旨意ヲ奉體シ甲鐵艦一艘献上致度上表之趣神妙之事ニ付被 聞食届候事

四月

太政官

〔小橋私記〕

四月十二日公用人小橋恒藏は詔邦の命を受け軍艦龍驤丸獻納の申請書を携へ太政官に提出したり辨事某は三條實美の命を傳て曰く詔邦獻艦の意志あれは宜く詔邦の署名を用て上達すへしと恒藏旨を承けて退き直に詔邦の素志を叙述し献白書となし更に之を提出したり建白書

其要に曰四環南海の本邦は海軍を興張するを以て目下の急務とす速に巨艦大船を要港に羅列せしむるに非ずは一旦變起るに臨て緩急機宜に應じて自衛の策を立る能はず況や絶海萬里の風浪を破て経略進取の大策を施し 神聖の遺業を擴充するを得むや早く海内の全力を擧て海軍興張を謀るべく其微意を表せむと欲し先此一小艦を献す云々の意を略記せしものなり該艦の構造左の如し(成松明賢筆)

〔護久公御事蹟調〕

成松明賢筆記

一龍驤艦の構造

一裝鐵艦

一乘組定員

一吃水 (船底の沈み)

一裝砲

舷側砲六十四斤

軸自在砲百斤

一船長 三拾六間二尺

一船幅 六間二尺

一排水量 二千五百七拾噸

一龍驤艦は慶應二三年の頃我熊本藩より英國に新造の注文して新造せしめたるものなり

一明治二年十二月六日英國より長崎港に廻着したり

一翌年三月六日迄に諸附屬品共に受取渡相濟翌日七日に至り將校以下總員乗組濟となれり

明治三年

四六九

四月十二日江州三上藩和泉國吉見に移りて吉見藩と改稱せむことを請ふ尋て許可せらる

〔從東京西京之下廻〕

當藩之儀ハ幕府大政御委任之節東京定府ニ而藩士總而東京に住居仕支配所之義ハ近江三上近傍ニ於而高四千二百二十  
七石余和泉國吉見近傍ニ於而高五千七十三石余兩支配地共僅之陣屋取建置用辨致吏胥而已差置候義御座候然ル處今般  
地方官政治一新ニ付三上藩知事被 仰付難有仕合奉存候此上奉願候義重々恐入奉存候得共近江國三上之義ハ四圍山岳  
之地殊更海路ニも遠ク士卒族長屋取建候とも何彼ニ付不便之筋多く有之候處幸和泉國吉見陣屋地方之義ハ高辻も江州  
カ凡千石相増海路神戸ニも接近致居陣屋近傍長屋取建候ニも萬事都合宜敷今度東京邸之士卒族右之地に爲引移申度兩  
所共陣屋有之候義故情實被爲聞召以出格之思召和泉國に治所相建吉見藩と改稱仕度御決定之末右等奉願候義ハ重々恐  
惶之至奉存候得共便不便之義ニ付藩情一躰之懇願ニ御座候間此段幾重ニも御許容被下度偏ニ奉懇願候義恐頓首謹言

四月十二日

辨 官 御 中

同十四日御附札

願之通被聞届候事  
是迄彦藩屬下之處從藩屬下ニ改加入之事

〔全書〕

四月廿日從藩に御達之口達書同藩カ廻狀を以差廻來寫  
口達

三 上 藩 知 事

三上藩今般和泉吉見に引移候ニ付自今其藩屬下ト可相心得候事

四月

四月十四日獨乙國公使軍艦にて九州中國四國等の諸港巡視を許可せられたるを以て應接に不都合なきやうとの旨を達せらる

〔東京カ之御用狀〕

〔明治二年四月以後〕  
〔四月十四日澤官掌を以て小橋恒藏へ渡されたる書付〕

今般獨乙國公使軍艦ニテ來ル十七日横濱出帆長崎に罷越夫より九州中國四國等之諸港巡覽致度旨願出候付御聞届ニ相成馬渡外務少承同艦に乘込罷越候間諸事不都合無之様打合取計可申候事  
但都合ニヨリ上陸致候義モ可有之此旨可相心得候事

四月

太 政 官

四月十四日先きに新貨幣鑄造につき諸藩無用の銅製大砲を所持せるものは相當代價を以て購入すへき旨達せられたるを更に取消さる

〔從東京西京之下廻〕

四月十四日月番カ差廻來候御布告書寫

先般新貨幣鑄造ニ付藩々ニ於テ當今無用ニ銅製大砲所持致候ハ、相當之代價を以テ御買上ケニ相成候間東京眞崎鑄  
錢座に申出早々廻シ方可取計旨御達ニ相成候處御都合ニヨリ不及其儀旨更ニ御沙汰候事

四月

太 政 官

四月十六日刑餘の骸を以て刀劍の利鈍を試みるを禁する旨達せらる

明治三年

〔從東京西京之下廻〕

四月十六日番々差廻來候御書付寫  
從前刑餘之骸ヲ以刀劍之利鈍ヲ試來候右之殘酷之事ニ候間嚴禁取締可致其他人膽或ハ靈天蓋陰輩等密賣致ス哉ニ候處  
其功驗無之事ニ付是亦嚴禁取締可致候事

四月

四月十六日日本藩世子護久東京に到る

〔慶順公御隱居御家督一途〕

一新從四位様益御機嫌能三月晦日熊本御發駕小島より御軍艦(龍驤)ニ被爲召段々御渡海四月十六日東京被遊御着候事  
四月十七日天皇駒場に臨御諸藩兵隊の繰練を禱し給ひ勅語及び酒肴を下賜せらる

〔從東京西京之下廻〕

昨十七日練兵 天覽無滯被爲濟別紙之通 勅語被爲在且小隊司令以上にハ御酒 御流頂戴被 仰付並兵隊一同に御酒  
看下賜候條御趣旨厚奉戴益勉勵可致此段申達候事

四月

兵士一同に下賜候御酒看明十九日中ニ各藩より當省に  
請取として可罷出候様可申達候事

但シ其節人數書並御酒入物持參可致候事

兵 部 省

勅語

諸隊熱練満足ニ候益以可竭力候

兵 部 省

聯 隊 司 令  
大 隊 司 令

四月十七日

小隊司令

山路 太左衛門

右同斷

三宅 新兵衛

半隊司令

寺本 八右衛門

小隊司令之場

八木田 新五

半隊司令

淺野 榮太郎

小隊司令之場

八木田 新助

分隊司令

淺野 富次郎

半隊司令之場

賀來 散カマ三郎

分隊司令

渡邊 三郎彦

右者一昨十七日隊共練兵 天覽罷出之處繰練相濟候後

小隊司令以上 天顏拜謁被 仰付候且又昨十八日於兵

部省別紙寫三通之通被 仰付難有仕合奉存候此段別紙

相添御達申候以上

四月十九日

三宅 新兵衛  
御 鐵 炮 頭 中

少 參 事

〔從東京西京之下廻〕

(四月十七日附東京離ノ口邸より熊本へ下廻書狀の尙々書)

今日之駒場ニおゐて兵隊 天覽被 仰出朝五時之 御發輿ニ付拜上ニ罷出候筈之處遅刻ニ相成懸合不申候處此節之  
御馬ニ被爲 召候由御一新之砌と之乍申聞及び不申事ニ御座候

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

明治三年

四七三

一 去ル十八日諸藩練兵於駒場 天覽總隊十八大隊薩長備一大隊宛其餘合兵薩之下地二大隊詰込之上當月中旬比千人内外

着長茂右同斷之外夷艦便々七百八人程土州之騎馬隊四百計着之由

一 右 天覽之節洋服被遊 御召候様段々建言爲致向茂爲有之由之處彈臺より故障御見合ニ相成候由

四月廿七日

猪 俣 才 八

四月某日鷺尾隆聚五條縣知事に任せらる

〔明治二年正月ヨリ 京都並東京鶴崎長崎返達御用狀控〕

〔鷺尾家の使者京都の我藩邸に持参せる口上書〕

吹聴被申入候事

口上書

陸軍少將儀五條縣知事被蒙 宣下畏被存候仍而此段御

四月十七日

鷺尾家 使

四月十八日東京府の財政困難の狀を報するものあり

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

〔午六月朔日附猪俣才八提出鹿兒島藩脇田市郎より廻達の内〕

午四月十八日所聞

御一新以來東京市中場末至迄蕪幕下持地面被召上たる凡貳千何百ヶ所東京府管轄タリ然ルニ右地面官之御入費多ク收納足らず夫故古井修理の如キモ官之力ニ不及差配人ニテ取扱右入費地代ヲ以年々差引勘定可致との事之由東京形勢是等ヲ以推而可知

四月廿日シーボルト所藏の圖書數百卷を朝廷に献せし由を報するものあり

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

〔午六月朔日附猪俣才八提出鹿兒島藩脇田市郎より廻達の内午四月廿日聞取抄略〕

一 シーボルト亡父所著の書籍數百卷 朝廷に献上ス 朝廷ニも御入納相成候由

四月廿日岩倉具視は彈正大巡察青木彦兵衛をして我藩林藤次に會て其の進言せし旨を天聽に達したる由を傳達せしむ

〔武藏櫻園先生遺稿〕

〔東上日記抄略〕

る由

四月十二日晴有栖川様御内藤木操前川仲とゆる

十六日雨十郎助(林)若殿様(潘世子)につき横濱まで來

二十日晴朝十郎助來る青木(名は彦兵衛と云時)來り岩倉様の御命を傳ふ余申上 天聞に奏せられ候

四月廿日東京横濱間の鐵道布設不日起工せらるへしと報するものあり

〔明治三年ヨリ 探索書控〕

〔午六月朔日附猪俣才八提出鹿兒島藩脇田市郎より廻達の内〕

午四月廿日所聞

鐵道ハ築地之海岸通り高輪薩州邸泉岳寺迄夫右に池上本門寺裏通り(丸カ)子ノ渡シ神奈川臺後より戸部横濱迄相聞キ追々取懸リ可相成由西京之鐵道ハ追而可取懸旨也

四月廿一日南京米多く入津し米價暴落して米商等損失を招きし由を報するものあり

〔明治三年ヨリ 探索書控〕



(午六月初日附猪俣才八提出鹿兒島藩脇田市郎より廻達の内)

午四月十七日所聞 横濱新聞

此節南京米夥數入津せし由  
油大豆等右同し

日本商人南京米ヲ買貯へたるもの一時ニ相場下落致損金をもるもの夥し損金之巨魁ハ壹人ニ而六萬兩已下二三万ト損ヲ  
せざるも稀なるよし油も下落四月十七日東京市中ニ而壹升の價 量日脱す

(四月廿一日報告抄略)

- 一 南京米相場上壹斗壹升中壹斗貳升下壹斗三升(一兩)右ニ付買置候者府濱等ニ而損金夥數事ニ御座候由既ニ廻町四ツ谷  
其外中以上之米問屋向惣損之由御座候横濱ニ而賣人多ク買人一切無之就而ハ異人も損可有之由
- 一 和米上但玄米九升五合中壹斗下壹斗五合位ニ御座候
- 一 白米上八升四合中八升五合下六七合尤時候務候得共追々下落ニ申見込之由御座候且舶來大豆買入候者是又多分損金ニ  
△し候由ニ御座候此段申上候

卯月廿一日

四月廿二日府藩縣に於て外債せる數、借入約條書、擔保品返濟期等詳細調査申告すへき旨を達  
せらる

〔從東京西京之下廻〕

四月廿二日從月番差廻來候御書付寫

府藩縣官廳ニ於テ將來未定之品物を引當ニ致シ外國人より金銀借入之儀者決而不相成旨先般相達候就テハ是迄府藩縣  
ニテ外國人ヨリ負債有之分正金ニテ借入又ハ品物買取候付代金延拂其外共現今返濟殘相成候分都而御取調ニ相成候條

別帳ニ照準シ借入候約條之始末引當之品類返濟之期月利息之割合及償却之日途共詳悉ニ認分ケ來ル五月廿五日限可差  
出候事

四月

太 政 官

四月某日英國倫敦の東洋銀行に託し始めて公債四百八拾萬圓を募集せらる

〔明治三年ヨリ  
探索書控〕

(二月十四日附毛利莫書取抄出)

一 是迄フランスアメリカ等二三ヶ國に本邦金債有之候處右各國ハ高利ニ而當時每月利十五萬兩宛ニ相當リ往々莫大相成  
候ニ付官府ガイギリスに御頼談相成候然ルニ英方申分ニハ輕利之金ヲ出シ高利之金ヲ償セ等いたし候而ハ他國之評議  
如何可有之哉依鐵道ヲ製作可致左候ハ、其爲ニ出金スル之名ニして實ハ各國に之債ヲ償イ可申との約定ニ相成此節西  
京ガ兵庫迄鐵道製作之管之由尤官府ガ大坂豪商之面々にも出金させ税金ヲ官ト商ト分取之管右鐵道出來候上ハ引續東  
海道をも鐵ニスル積之よし其費ハ現米十七萬石有ラハ十分ト申事ニ御座候右元田太史之咄ニ御座候

〔全書〕

(四月九日鹿島藩脇田子ノ廻報の内)

秘中之秘説

一 朝廷英國より當節御借入之由

金四百万兩

〔防長回天史 第六編下〕

(明治三年夏期ノ大勢の一節)

明治三年

四七七

此月(四)英國倫敦ノ東洋銀行ニ託シ始メテ公債九分 四百八十萬國ヲ募ル去年十一月十日ノ決議ニ基キ鐵道敷設ノ資金ニ充ツルカ爲メナリ

(備考一書に四月廿三日英京倫敦東洋銀行ニ委託シテ九分利公債三百萬磅ニテ中止ヲ募集ス外債募集ノ濫觴ナリとあり)

四月廿三日彈正大巡察青木彦兵衛本官を免せらる

〔東京より之御用狀扣〕

青木彈正大巡察儀官員御減省ニ付本官被免候間此旨相達候也

四月廿三日 辨 官 熊本藩知事殿

〔從東京西京之下廻〕

青木彈正大巡察

青木彦兵衛

官員御減省ニ付本官被免候事

勤仕中勳精ニ付日録之通下賜候事

但位記返上之事

太 政 官

四月

太 政 官

金百兩

四月廿三日我藩庄林曾太郎を佐賀藩に遊學せしむ

〔明治三年 記室日記〕

覺 權大參事へ

庄 林 曾 太 郎

右者爲遊學佐賀藩に被差越候條此段可被達候以上(含密科學研究の爲め遊學を命せしならむか)

四月廿三日

四月廿三日山口藩暴徒再舉を計り遂に乘船脱走せしを以て諸藩の領地内に寄航せは捕縛すへしとの旨を達せらる

〔明治二年四月以後 東京より之御用狀扣〕

今日辨官傳達所方御呼出ニ付御所使罷出候處山口藩兵卒共先達而騷擾及鬭争候殘卒猶又去ル三日及戰爭其末船ニ乗込脱走致候ニ付而之何方之浦に寄せ候儀も難計候付右様之節之捕縛いたし所置方可伺出此段早々支配地に可申越旨山下權少史を以被中間候ニ付此段相達申候以上

四月廿三日

公 用 人 中

四月廿三日日本藩林藤次歸藩するに際し後事を井戸大野兩門生に託せしにつき之に諮詢せられたしとの意を岩倉具視に上申す

〔宇野林先生事歴〕

岩倉公ノ御尋ニ付内密指出タル書

井 戸 勘 兵 衛 龍 秀  
大 野 鐵 兵 衛 安 國

先月廿八日參殿至密奉及獻芹置候末有通儀最早餘命切迫桑檢候老病之身ニ御座候得者自然大事ニ不及長往仕候様之儀モ有之候ハ、後事之儀者右兩門生へ寄託仕置可申奉存候御尋ニ付爲後日右奉言上置申候恐々敬白

明 治 三 年

四七九

明治三年四月

四八〇  
林 藤 次 有 通

〔武藏櫻園先生遺稿〕

〔東上日記抄略〕

四月二十三日晴岩倉様に書付青木(元御正大巡察青木重兵衛也)に渡す

四月廿四日我藩京都松原通高辻通の二邸を保有して千本通の邸地を返上する旨を申告す

〔明治二年王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

一左之御届書壹通井口持參差出候處御付札ニ相成田橋少屬を以御渡拜借邸ハ返上之日限取究早々前廣ニ御届ニ相成候様との儀演達御座候事  
御書面前兩邸之義ハ承届候拜借邸ハ此節返上可有之事  
松原通大宮西に入邸宅  
高辻通大宮西に入添屋敷

右之詰込並定居之者差置候ニ付相除不申候尤空地之箇所ニ之桑茶野菜等植付申管ニ御座候  
千本通下立賣下ル拜借屋敷

右之最前致御届置候通而返上之心得ニ御座候

右之外所持之邸宅無御座候以上

四月廿四日

熊 本 藩

京 都 府

四月廿四日日本藩林藤次東京を發して歸國の途に就く

〔從東京西京之下廻〕

四月廿三日出立ニ而東海通通行

林 藤 次  
井 戸 勘 兵 衛  
大 野 鐵 兵 衛

林 十 郎 助

〔右五月七日東京段下廻の内に入り、然れども櫻園自筆の東上日記に據れば廿四日のことあり〕

〔武藏櫻園先生遺稿〕

〔東上日記抄略〕

二十四日小雨東京出立有橋川宮様より御候別として金子五百疋を給はる魚住(勳)木原(唐)松村(深)佐伯(次)山川(龜三)入門伊藤四郎倉本繁太郎等未だ人々あり暮過ぎてやう／＼河崎に着く

五月十三日晴草津を出て矢馳の渡をわたり大津につく(中略)それより京に入り鳥丸通竹屋町末吉屋につく

六月四日雨宮地を出て(中略)夜九時比叢田口に入る八幡宮武内社六所宮天満宮を奉拜やうやく歸宅同道齋藤山形三郎兵衛西村井戸ハ御花畑番所より別る富永大野加來ハ家まで來る西村山形齋藤などハ明近くにかへる

四月廿五日岡山藩凶作にて北海道開拓の費途なきを以て暫く之を辭せむことを請ふ

〔明治三年ヨリ探案書控〕

松原主記より之寫

北海道開拓之儀奉願既ニ去ル二月後志國島牧郡之内支配被仰付難有奉存候然ル處昨年存外之□作無毛之場所茂有之就而ハ收納大ニ減少窮民撫育之手當行届兼實苦心仕居申候折柄幸ニ 御賞秩を以救助仕居中候仍而開拓之入費連茂難取續更ニ目的を失ヒ申候ニ付何共奉恐入候得共一先奉還仕度素より厚キ 御主意茂御座候事故追而者聊一小部ニ而茂開拓被 仰付度素志ニ御座候趣申越候間何卒御採用之程偏ニ奉寛度此段宜敷奉願候以上

明治三年

四月廿五日

岡山藩公用人

吉田直藏  
桑原茂太郎

四月廿七日種痘の普及につき論達せらる

〔從東京西京之下廻〕

四月廿七日月番廻狀を以差廻來候御書付寫  
種痘之儀之濟生之良法ニ候處僻限之地ニテハ今以不相行向も有之趣ニ付於府藩縣末々迄行届候様厚世話可致事  
但施行之法則等取調度向之大學種痘館に申出傳習可致事

庚午四月

太政官

四月廿七日日本藩世子護久參朝す天皇吹上御苑に出御酒饌を賜ひ乘馬を試みしめらる

〔慶順公御隱居御家督一途〕

一右依御達四月廿七日九半時之御供揃ニ而御參 朝被遊候處吹上に 主上出御右大臣様を初御役々御出席 新從四位様  
〔護久〕並徳川從一位様名古屋御隱居山内從四位様被 召出御酒宴有之 天酌ニ而御頂戴をも被爲在且新從四位様御乘馬  
兩度迄 天覽御首尾無殘所御仕合ニ而□時比被遊御歸殿候事

四月廿七日貨幣偽造は嚴禁なれとも國家紛擾の際一時の權宜に出てしものあり依りて昨年五月箱館の賊平定を期限とし其以前のもは特に宥免する旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

四月廿七日月番より廻狀を以差廻來候御書付寫

貨幣偽造ノ儀者元ヨリ禁嚴ニ候處國家紛擾之際ニ方リ於各藩往々私鑄シ或ハ兵馬之費用ヲ資ケ或ハ燒屑ノ急ヲ救ヒ無  
知ノ小民ニ至テハ其流布スルヲ見テ其嚴禁ナルヲ忘レ終ニ其罪ヲ犯シ候者不少趣全ク御政令ノ未タ廣布セサルヨリ右  
様立到候付今般深キ 思召ヲ以テ去歲五月箱館殘賊平定ヲ期トシ其以前犯罪ノ者ハ已發覺未發覺已結正未結正ヲ不問  
一切赦宥可致旨被 仰出候事

庚午四月

太政官

四月廿八日本藩集議院議員として大參事米田虎之助を出頭せしむる旨を申告す

〔明治二年四月以後  
東京より之御用狀扣〕

今般集議院開院被 仰出候付而之議員當月中可罷出旨最前御達之通ニ而御期限茂御座候事ニ付差寄御當地詰合大參事  
米田虎之助差出申候此段御届申上候以上

熊本藩

小橋恒藏

四月廿八日

辨官

御傳達所

一集議院に御届右同斷

四月廿八日南部利恭酒井忠實献金の残額を免せらる

〔明治三年ヨリ  
探素書控〕

四月廿八日御達

南部盛岡藩知事

明治三年

四八三

先般金七拾万兩献金被 仰付追々及献納候處今度御詮議之筋有之右殘金不及献納旨被 仰出候事

庚午四月

右之重役御呼出ニ付平原權少參事出頭候處林少辨ヲ以御渡相成候

酒井大泉藩知事

右同文言

但盛岡藩ハ是迄五万兩並箱館廻米上納共都合拾三万兩程上納之由

大泉藩ニ而之既ニ四十万兩許献納せし由也

(備考)

明治二年七月廿二日南部利恭酒井忠祿ヲ舊領ニ復歸シ各金七十萬兩ヲ献セシム

明治三年三月廿五日南部利恭酒井忠實内ノ献金ヲ聽ス(近世史料編纂綱例)

四月廿九日鍋島直大は長岡護美の藩政改革等の方針を開陳して直大の所見を叩きたるに答ふ

〔子爵長岡家文書〕

華暹奉拜讀候時下風日清和愈御清程被成御勤勞奉大賀候爾來御無音罷過兼々不堪汗顔候處反て預御問訊恐縮之至奉存候先以知事様御始倍御安寧被成御座候由奉恭賀候緒新從四位様御事俄ニ御發程御藩政向ニ付 朝旨被御伺取大義名分ニ依り異議之者ハ一刀兩斷之御内決ニ而御一新之御目的可被相達御内意極密爲御知被下御深慮御勇決之程實ニ奉感佩候頑固無識之徒時勢大義ニ臨及動搖候ハ何國も有之事ニ而更ニ可怪事ニ無御座此藩ニ而も御聞及も可有御座動搖之兆毎度御座候得共先ハ可也相治リ尤此後何等之異變可致出來哉難計候得共因循模稜之手段ニ相渡リ一新之効無之而ハ職掌ニ對し恐入候次第ニ付緩急を量り公平之道ニ依り相運候而動搖有之ハ於拙も致方無之と決心罷在候其御藩ハ知事様御初御捕被成候處拙ハ老父も不罷在年若才艱苦之情狀御推察可被下候兼々御懇意相結候儀ハ別段之事ニ無御座御互

ニ内意無遺御頼談申上度御座候間猶御合置被下度奉希候護々之御細書逐一拜承仕一々不能細答何れ期他日之拜顔候先ハ勿々貴報敬白

四月廿九日

直 大

長岡從四位様

尙又御自玉奉祈候乍末筆知事様へ別段呈書不仕候間乍憚宜御鶴聲奉希候將宏(護久)事兼々御而倒罷成候處却而御詞被下奉奉存候猶御願仕候頓首

四月某日彈正少忠山田信道江刺縣權知事に任せらる

〔從東京西京之下廻〕

山田彈正少忠

右宣下候事

任江刺縣權知事

四月

太政官

四月某日外務省出仕佐田素一郎朝鮮に使し朝命を達する能はず空しく歸り膺懲の師を出して彼を征せむことを請ふ

〔明治三年ヨリ探素書控〕

四月廿六日所聞

一朝鮮國に勅書を賜り久留米藩佐田素一郎右國に罷越候由風聞有之候處頃日歸朝シ先年彼國に探索ニ參り捕縛せられし日本人兩人を茂取戻シ召連歸り候由也

彼レ云往昔豐臣氏無名之師を起シ我國ヲ侵撃シ我兵不利不得止屬國之形ヲ爲ストイヘトモ其後佛夷我レヲ侵シ時援兵ヲ貴國ニ乞フ然ルヲ不救何を以テ屬國之義あらんや向後貴國と絶交すへし若軍艦を向るならば戦争せんのみ云々

明治三年

四八五

朝鮮海岸壹里計り平野ニシテ戰場之設を爲シ日本人通行筋王城迄之街道帷幕を張ル外國人居留せるあり魯人にやと思はる

問テ云鮮人佛と戦ふ器械如何彼云弓矢鎗劍を以佛人を討タリ且佛艦二艦ヲ燒拂タリト  
唐太に魯西亞より兵隊ヲ向ケタル由風聞アリ未タ詳ナラス

午六月初日猪俣才八提出

朝鮮國事情探素(抄略)

三人ノ吏士對馬ノ譯士ヲ伴ヒ渡海上陸ス對州ノ印鑑ヲ出し漸ク入ルヲ得タリ然レモ王城ノ地ハ内レス繼釜山浦ノ府司ニ應接ス

一往日 勅書ヲ受ケサリシハ如何ト問ニ朝鮮ニテハ是迄徳川氏ヲ日本ノ王ト思ヒ居タルニ今王政一新ト稱スルハ他人徳川氏ヲ滅シ王ト成リタルナラント心得且 勅書ニ不敬傲慢ノ文アリタル故ナリト云

一通信貿易ヲ勸ムレモ聽カス至テ頑固ナリ決テ他國ト貿易スルノ意ナシト  
一文武共ニ盛ニシテ武學ハ殊ニ盛也其器械ハ火繩銃弓矢槍劍等也

一對州トハ從來深ク親睦ス對州侯借金七萬兩有鮮ヲ尊フコト日本より却テ篤シ是故ニ常ニ戊卒七八十人ヲ送置ケリ  
一鮮ノ庶人常ニ云日本人ハ世界中ノ強勇ト雖モ彼一人ニ我等三人掛ラハ勝コトヲ得ヘシト云リ往日ヨリノ事且ハ當時對州ヨリ送ル所ノ皮兵モ強壯ヲ擇フ故ナルヘシ

一都城ノ住民七十余万口アリト云學校ニハ十三經二十一史文獻通考等國ノ藏版アリ詩文モ盛ニ行ハル  
一公ニハ清朝ノ年號ヲ用ヒ私ニハ自國ノ年號ヲ用ユ朝鮮錢對州ニ渡リ在ル是ヲ携ヘテ行ク也物價至テ賤シ我カ文久二枚ヲ合セタル位ノ錢一枚ニテ一人ヲ一日雇ヒ得ル也但延平通寶ノ文字アリ

右之通ニ御座候且久留米佐田素一郎歸朝後建言之次第も有之尙 勅書被遺候處怒テ不受由

〔明治元年辰正月ヨリ〕  
一新録探素報告

朝鮮國事情

一朝鮮ニ而于今攘夷頻ニ致居候由英佛亞三國ニ而朝鮮を吞併セントノ志之處朝鮮不屈常ニ勝を奏候由然處右三州夷内之  
爭論ニ而英佛合體亞ハ攻掛リ居候事ノ由魯ハ朝鮮に左祖始終兵器彈藥を贈後ニ朝ヲ吞ント謀居候而實ハ英佛と亞ノ戰  
爭モ魯ノ爲ニ相設候由右ノ事件對州より言上ニ相成候付十二月(明治二年)始爲應接朝に使被指尙ル佐田素一郎使節被  
仰付<sup>久留米</sup>朝を論シ攘夷を爲止廣ク交易を以テ和親ノ周旋致シ且朝ハ從來我麾下ニテ數年朝貢モ致居候處此ノ近年  
之朝貢モ不成就而者以前之通朝貢爲致英佛ニ不被吞内ニ我カ先鞭ヲ取候含ニ御座候佐田應接歸國後ハ改テ 敕使被差  
立其上不聞入朝貢モ不致節ハ豐公ノ偉典ニヨリ征討ノ 王師被差尙處ニ御廟議相決候由ト云々

〔明治三年ヨリ〕  
探素書控

横濱新聞 二月十五日所聞

一鶴ニ日本より朝鮮へ使節ヲ遣シ從前之如ク我國ニ來聘シ貢稅ヲ納ムヘシと言ヒ贈レリ朝鮮人未タ返答ニ及ハスト雖モ  
恐ラクハ承服セサラン韓人專魯國及ヒ清國ト陸シ日本ニハ隨從セサルヘシ實ニ大事件ヲ生ルニ至ラン

長谷川六右衛門書取

〔明治四年久留米藩難記〕

佐田白茅氏が外務省の出仕となり朝命を奉し朝鮮に便し幕府倒れ王政復古の政となりしことを告げ隣交の誼を修めんとしたものでありしに朝鮮は之に應せず加之之を拒み却て寄つても付け無かつたとのことであるが其事は一度ならず二度迄も其通りであつたと云ふことであるが其實を云へば佐田は追ひ返へされた有様で重ね重ねの國辱を招き奈何と

も爲難きこととなりし故此上は兵を帥て彼の地に臨み其罪を問ふて膺懲の典を擧げねば國の體面が全からぬと意見を具し復命したと云ふことであつた。

〔安津免久佐十一本田〕

〔文書〕

從朝鮮國答書寫

所辱來書ノ意ヲ詳ニスルニ近時弊邑多難ニ屬シ貴國ニ奉事スル所ノ禮數贖國有テ督責スル者ノ如シ吾謹テ命ヲ聞然ルニ此義原由ニ就テ之ヲ往昔豐臣氏無名ノ師ヲ起シ吾備ナキニ乘シ吾國境ヲ侵撃ス我兵不利ナル不得止而屬國ノ形ヲナスト雖吾人民今ニ至リ罪ヲ貴國ニ得ル所以ヲ知ル者ナシ必時ヲ待テ其罪ヲ問ントス次ニ外國交際ノ事件ヲ諭示スル尊意時運ノ變態ヲ活撃シ萬國ノ情勢ヲ熱慮シ弊邑ヲシテ西洋ト交儀ヲ定メシメント欲ス然ルニ交際ハ國家ノ重事各國各自ニ義有リ命有リ吾朝鮮國是アル有リ容易ニ尊命ニ從能ハス近時洋教ノ故ヲ以テ佛ト隙有リ佛ハ西洋梟國ニシテ百戰ノ餘力吾カ小弱ノ鷄林何ソ能ク之ト敵セン只命ヲ天ニ委シ國內ヲ合セテ死守斃ヲ待耳不得止シテ援兵ヲ貴國ニ乞フ此時ニ當リ城中骨ヲ炊キ使者冠蓋路ニ望ミ日夜東向シテ貴國ノ報ヲ渴仰ス貴國一介ノ使ヲ馳セ且夕ノ急ヲ顧慮スルノ意ナシ屬國ノ情義焉カ乎吾ヨリ之ヲ絶タス貴國ヨリ之ヲ絶ツス今日猶何ノ朝貢ヲ之求ルヤ側ニ聞貴國近時西洋ト交リ尤親密政治全ク洋方ヲ學ヒ兵制盡ク佛式ヲ師トシ金穀乏絶スル英吉利ニ依頼シ租税ノ收入スル亞米利堅ニ附與シ交儀情態直ニ一家兄弟ノ親ミ耳ニ非ス亦管轄屬從ノ姿ニ近似スルナカラシヤ葦爾タル鷄林ノ孱弱猶洋奴腥羶ノ下風ニ立ツヲ以テ深ク可耻トナス吾國今後亦貴國ニ事フル不能也若夫命ニ違フヲ以テ罪有トナシ巨艦來リ迫る亦敢テ辭セス謹テ釜山浦上ヲ清メテ待シ可然ト雖弊邑ノ貴國ニ於ル從來罪ノ當ニ問フヘクシテ未タ問ハサル者有リ事間ヲ待テ請フ敵賦ヲ竭シ收船ヲ備ヘ新舊ノ罪ヲ一ニ開セ之ヲ貴國ニ問ハントス又尊來ヲ煩ハサス  
午七月寫之

四月某日彈正大少巡察に權官を設けらる

〔從東京西京之下廻〕

五月朔日月番方差廻來候

彈正大少巡察自今權官ヲ被置候事

庚午四月

太 政 官

四月某日大坂造幣局工事進捗の狀況を報する者あり

〔明治三年ヨリ探案書控〕

一金銀銅造幣御吹立相成候場合ニ有之尤御普請之義前代未聞之廣太ニ而驚入候事凡百万兩之御入用ト申事ニ而日々職人

三千人ツ、入込御普請罷在追々器械も相揃多分當月下旬方相始候趣也と云々

(右四月二日付在坂富藤彌九郎ヨリ來函之内といふ文の次に列記しあり)

五月二日本藩間島襄一郎外務省出仕を命せらる

〔明治二年四月以後東京より之御用狀扣〕

外務省より別紙之通申來候付則相達申候以上

五月二日 公用人中

少參事兼中

間島襄一郎

公用人中

右外務省へ出仕被 仰付候條其段中渡可差出候事

五月二日

外務省

熊本藩

五月二日本藩長崎遊學生高橋鼎藏に蘭醫ポードインに就きて研究すべく大坂へ轉學を命す

明治三年

四八九

〔慶應元年ヨリ明治三年迄 遊學一巻帳〕

御内意之覺

私儀當時長崎表遊學被仰付居候處先師和蘭之ボーディン當時大坂病院之御雇入ニ相成居申候而最早近々和蘭に歸國仕候由ニ付同人出立前是非傳習仕度儀御座候間急連大坂表罷上リ申度何卒暫彼地へ轉遊被仰付候様奉願候此段乍恐御内意奉申上候以上

四月

高橋鼎藏

願之通大坂へ轉遊被仰付旨候以上

右轉遊丈々之御渡方於長崎被渡下管ニ付會計局方彼地へ申向有之候事

五月二日 學校方 錄事

本文高橋鼎藏儀過ル元治元年ヨリ長崎遊學被仰付置其後彌成業之御目途も有之人體之由ニ而已ニ舊幕時代長崎病院ニ而執監通辨官等之役も申付ニ相成追々留學被仰付候次第ニ付此節之願も尤之情實と相聞候間願之通大坂に轉遊可被仰付哉

但本文之儀ニ付而之轉遊料として相應ニ被渡下候御見合も御座候由ニ付御規則之通御渡方可被仰付旨御廻達可被

成哉

會計局へ 加屋執筆也

學 校 局

五月三日官用文書には悉く干支を記載すへしとの旨京都留守官より布達せらる

〔明治二年王政日新錄〕(熊本縣)

諸願伺届並ニ往復書簡類自今一切干支書載可申事

右之通ニ付此旨相達候事

庚午 四月

太 政 官

五月(三日御渡)

留 守 官

五月三日本藩知事詔邦辭表を上る

〔慶應三年丙寅年正月至明治三年 江戸京都來狀扣〕

知事様御隠居御願 新從四位様に御家督之儀御願可被遊 御内存御治定被爲在候付而被 仰出之趣之先頃及達置候通候 右御願書今三日御差出被遊候處無御滞被成御受取候此段爲被奉承知申達候以上

五月三日

奉 行 所

魚 住

勤 殿 (外略す)

〔慶順公御隠居御家督一途、江戸京都來狀扣〕

臣 詔 邦

昨年知藩事蒙 宣下難有仕合奉存候就而之御維新之御趣意奉體認藩政向之儀日夜勉勵罷在候處年來之痛積去冬以來之時々強差發難儀仕候間種々加療養候得共此程別而相勝不申往々全快可仕辨無御座段醫師共申出當惑仕候依之今度奉伺候筋之儀茂爲名代嫡子細川新從四位躰久差上候儀御座候如是所勞罷在候而之差寄藩政向何分行届兼候間未隠居可奉願年輪ニ茂無御座殊ニ奉職間及無別而奉恐入候得共右之次第ニ付當職奉辭度何卒被免被下直ニ隠居被 仰付嫡子護久に家相續被 仰付被下候様奉願上候此段宜被成御執奏可被下候以上

明治三庚午年三月廿八日

熊本藩知事

詔

邦判

辨 官

御 中

五月四日本藩青木彦兵衛監督司出仕を命せらる

明治三年

四九一



〔明治二年四月以後 東京より之御用狀扣〕

〔五月四日桃井省録を以て本人へ相渡さる〕

其藩青木彦兵衛儀監督司出仕申付准十等官祿被下候條此段相違候事

庚午五月

熊 木 藩  
民 部 省

五月五日日本藩眞鍋一太左衛門東京横濱間の鐵道敷設につき御用懸を命せらる

〔從東京西京之下廻〕

〔五月七日東京發西京、坂梨、熊本宛下廻の一節〕

一東京方横濱迄御試ニ鐵道出來御治定之由ニテ既ニ一昨日眞鍋市太左衛門右御用懸被 仰付候段吹聴有之窮民御救之差置表人辨理之且々御取揚ケ有之是ニハ殆ト歎息之事共ニ御座候

五月四日齋

眞 鍋 一 太 左 衛 門

五月七日在東京本藩吏員は東京の物價下落し扶持米の双場壹兩に九升三合替の旨を報し且つ藩地の双場を問ふ

〔從東京西京之下廻〕

一當地諸色米價共即今之少々下落當月之御扶持方双場八兩ニ九升三合替ニ相成申候御國元之双場之何程ニ可有御座哉乍御手數官脚毎ニ御加章可被下候

五月七日

東 京

西 京 様 坂 梨 様 熊 本 様

五月八日日本藩知事詔邦の致仕を聽許し世子護久をして家督襲職せしめらる

〔從東京より之御用狀扣〕

〔五月十六日米田井澤津田より同廿五日齋の内〕

- 一新從四位様依 召去ル八日禮服御着用御參 朝被遊候處御願之通御隱居御家督被 仰出且熊本藩知事被爲蒙 宣下段之御書付五辻從四位様を以御渡有之御禮等無御滞被爲濟乍恐千秋萬歳目出度御儀奉存候右御書付二通差上申候
- 一御隱居御願之通被 聞召届候段之御書付公用人御呼出御渡有之奉恐悅候右御書付一通差上申候
- 一右之段於熊本御承知之上御請御禮之儀奉伺候處御書付を以御禮被仰上候様御差圖有之候付日合相考取計候様達可仕候以上

從 四 位 源 護 久

父詔邦病氣ニ付隱居願之通被 聞食届其方へ家督被 仰付候事

明治三年庚午五月八日

太 政 官 印

〔別紙〕

天 皇 御 履

從 四 位 源 朝 臣 護 久

任熊本藩知事

右大臣從一位藤原朝臣實美宣

明治三年

大辨從三位藤原朝臣俊政奉行  
明治三年庚午五月八日

(別紙)

熊本藩知事

源

韶

邦

病氣ニ付隠居願之通被 聞食届候事

庚午五月

太

政

官

五月八日我藩軍艦龍驤艦献納の手續を終了す

〔江戸 京都 來 狀 扣〕

〔從慶應二丙寅年正月至明治三年〕  
以別紙申達候御献上御軍艦去ル八日御受取渡相濟候尤乗組人員之儀之暫之處御雇ニ相成候段從兵部省口達有之由公用  
人方相達候此段爲可申達如是御座候以上

五月廿五日

六月六日霜

津

田

權

大

參

事

大 參 事 衆 中

權 大 參 事 衆 中

〔故護久公御事蹟調〕

成松明賢提出

同年四月朔日 護久公百貫石沖よて御乘艦長崎兵庫及横濱等を経て同月十六日武州品川沖御着艦公には即日御上陸の  
處其後左之御達有之候

今度 御献上之御軍艦明八日御受取に相成乗組員之儀之暫之處御雇に相成候段兵部省より口達有之候尤當日兵部大少

錄等出役有之由に候條可被得其意候以上

五月七日

奉

行

所

宮村 庄之丞 殿

牛島 五一郎 殿

一五月八日御献上の手續相濟候ニ付熊本藩旗を菊花の御紋章旗に引換へたり

一龍驤艦ハ御献上當時帝國軍艦の首位に屬し明治五年五月中國並ニ西國地方御巡幸の節ハ始終 陛下の御乗組將校の主  
なる者ハ左の如し

艦長ノ場

牛 島

五

一

郎

後

憤

副長ノ場

緒 方

十

右

衛

門

後

航海長ノ場

成 松

覺

之

助

後

明

五月八日廣島藩は泉岳寺内赤穂義士祠堂新築落成せしを以て將來保管及び祭典等につき稟請す

〔明治三年ヨリ  
探 索 書 控〕

庚午七月公用司方差出候由ニ而東京方來ル

一昨辰年十一月赤穂義士に金幣 下賜候ニ付而之三條右大臣殿並岩倉大納言殿思召ニ而右祠堂泉岳寺中へ御造營被爲在  
候旨知事傳承仕赤穂家ニ於テハ山緒も有之且藩士中其苗裔モ罷在候ニ付涓滴之御手傳仕度旨ハ其節申上尙又昨春良雄  
後裔大石良知處藏之木像持參東向爲仕候處同人に右御造營木土之役岩倉殿方被命本懐至極奉感銘尤良知壹人ニ而之届  
兼候ニ付龜岡勝知松島徳之丞與り助務仕昨冬ニ至リ悉皆落成仕候ニ付以後之處當藩公用局へ預り祭儀等別紙之通相定  
置且此度爲落成祭日數五十日之間諸人參詣被差許候而之如何可有御座哉此段奉伺候以上

明 治 三 年

四九五

庚午五月八日

廣島藩

熊谷直彦

辨官

御傳達所

(別紙)

諸差許候事

一 毎年十二月十四日大祭日と相定前日各諸人參詣差免候

一 當日祭式之儀之泉岳寺へ相任せ當藩より出役指揮致候事

一 毎月十四日祭日と相定朝六時夕七半時ヲ限リ諸人參

一 二月四日忌日祭

附ケ札  
伺之通聞届候

五月九日外務省中書司を設置する旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

今般外務省中書司被置候事

庚午五月

太政官

右五月九日月番カ廻狀

五月九日日本藩知事護久家督任官せしを以て在東京の藩臣に施政の方針を示し奮勵せしむ

〔從慶應三丙寅年正月至明治三年  
江戸京都來狀 扣、慶順公御隠居御家督一途〕

一 被仰渡之御式左之通

五月九日五半時揃ニ而六等官以上平服小書院に並居少參事帶記室筆役帶を連同御間御入側之方より御間内に罷出居知事様御出座被遊御意被成下米田大參事御請申上左之御書附筆役讀之

一 御書附

右畢而大參事御請申上

付札、御意之趣

今度家督知藩事宜下付而書付讀聞せる

御入

從四位様今般御願之通 御隠居被 仰出我等儀家督且熊本藩知事蒙 宣下誠以難有事候我等不肖之身を以て大任蒙り恐懼之至候得共奉 命候上者 從四位様思召共繼只管 朝意共遵奉し一藩之治教を施行いたし度存慮ニ候間い つま茂彌以此意共體し同心戮力知事之職掌を輔け一際勉勵願入候也

五月十日日本藩知事護久藩政改革の爲め歸藩の願書を上り即日許可せらる

〔明治二年四月以後  
東京より之御用狀扣〕

(五月十六日米田井澤津田カ)

知事様御暇御願書去ル十日別紙之通被遊御差出候處伺之通聞届候との御付札御用即日御差圖有之候

臣護 久

此度上京仕候處辱奉拜 龍顏其上願之通家督被 仰付熊本藩知事蒙 宣下重疊難有仕合奉存候然處藩政改革中ニ付而者早々歸藩之上取調申度賜御暇候様奉願候左候得者船便次第發足仕度此段奉伺候以上

辨官

熊本藩知事

御付札 御中

願之通聞届候事

五月十日津田山三郎熊本藩權大參事に任せらる

明治三年

〔明治二年四月以後  
東京よりの御用狀扣〕

五月十六日米田井澤

以別紙申達候津田山三郎儀權大參事被 仰付旨宣下之  
御書付去ル十日 御直ニ被御渡公議人被 仰付候此段  
爲可申達如是御座候以上

任熊本藩權大參事

津田山三郎

右宣下候事

庚午五月

太政官

五月某日鐵道布設につき築地尾州藩邸を役所とせらる

〔探索書控〕

庚午五月十三日東京より來着書狀之拔書

一鐵道御開ニ付築地尾州藩邸ヲ役所ト相成未タ引渡不相成候得共至急御用之由ニ而御殿丈ケ引渡兵部省東京府土木司之  
役人出張普請中之由芝新錢座下向諸邸御引上可相成先ツ横濱迄出來夫々箱根ヲ通し下田ニ向出來神戸迄御開ニ相成御  
入用凡四千万兩之由出來之上ハ一日ノ往來をへしと云  
右御開ニ相成たる上ハ日本國內諸道御開海内一巡周をへし東京之人吉野初瀬の花々り四條納涼大坂道頓堀芝居見物モ  
心まゝなるをしと云

猪俣才八

五月十二日前本藩知事詔邦正四位に陞叙せらる

〔慶順公御隱居御家督一途〕

天皇

御璽

從四位源朝臣詔邦

從正四位

右大臣從一位藤原朝臣實美宣

大辨從三位藤原朝臣俊政奉行

天皇  
御璽  
明治三年庚午五月十二日

五月十二日監督少佑永田内藏次願に依り免職せらる

〔從東京西京之下廻〕

永田監督少佑(内藏次也)

依願職務差免候事(五月十七日永田東京  
出發下國の途に就く)

庚午五月十二日

民部省

五月十二日村上藩越後國内藤信思は賈金兌換により通貨減少して生民困窮せるを以て賈金總高に對する  
金札を貸與して窮狀を救はれむことを請願す

〔探索書控〕

賈金銀臺之分百兩ニ付金札三拾兩ヲ以引換被仰出候ニ付支配所一圓布告仕夫々説諭仕候處先般二千五百兩餘相廻シ候  
間東京於改座改テ受候處多分切捨ニ相成漸銀臺之分千貳百五拾兩壹分貳朱先當御省へ上納仕候然ル處邊鄙之土地柄頑

明治三年

四九九

愚之貧民正賢之見分度無之所持之金子多分減金相成候而ハ活計モ難相立困窮當惑仕候今般各藩偽造之向已五月箱館殘賊鎮靜ヲ期トシ一般御赦免被 仰出候就而ハ既ニ犯嚴禁候而モ軍馬費用不得止歸還候儀ニ付寛大之 御沙汰候況ヤ無智愚昧之小民殊ニ當藩支配地之儀者長々戰地ニ相成居市郡所々羅兵燹或ハ足兵食或ハ軍夫ニ被雇眞ニ膏血ヲ絞リ所持之金子只今ニ相成多分ノ減金相成候而ハ何分ノ 御沙汰御座候儀ト奉存候得共一時之難渡前顯之次第厚御憐察被成下是迄差出候賢金惣高何卒金札ニ而拜借被 仰付被下候様仕度只管奉願願候尤上納之義之十ヶ年賦或ハ貳拾ヶ年御指圖次第年賦ニ而上納可仕右願之通御下ケ被成下候ハ、 御仁愷何レモ奉感佩難有仕奉存候何卒願之通被仰付候様伏而奉嘆願候以上

村上藩公用人

庚午五月十二日

大藏省

御役所

五月十三日德島藩士等私憤を以て同藩淡路の稻田邦植の邸を襲ひ殘殺を縱にす

〔明治三年ヨリ探案書控〕

午七月東京下廻より來

阿淡騒擾聞取

德島藩稻田九郎兵衛先年來勤 王之稜ヲ以華族之列ニ被加須本藩知事ニモ被 仰付度内望ニ而段々内願之趣も有之候哉之處德島藩より之譜代之家臣ニ相違無之段申立ニ相成 席堂上ニ而も御取扱振御難辨之處より賦北海道ニ引越之儀御内沙汰も有之候哉之處稻田家ニおるても是ニ之當惑ニ而御斷申上候様其後稻田家之儀之知藩事處分ニ御任せ被下

度段德島藩より願出候而内情爲哀訴少參事之内兵隊惣代十餘名召連東京ニ罷出即今願中未タ何モ共御模様不相分候處此節稻田九郎兵衛御召連ニ而知藩事候急ニ御參府候様との 命下り候ニ付則同人被召連本月十一日德島表御出立十二日兵庫より異體ニ御乗移御東行ニ相成候由其前東京ニ罷出居候兵隊惣代と申内四人脱歸是之元德島藩老臣之家來當時岩倉卿御内ニ相成居候もの有之此者右兵隊ニ耳語シ唯今好機會也急速歸藩事ヲ發スヘシト申聞候ニ付右四人本月七日ト賦ニ出立十二日ト賦ニ歸着直ニ移檄ニテモ致シ候賦不レ移ト時ヲ諸隊練兵所ニ相集リ今ニモ可打出勢政府ニ相聞エ段々説諭ニ相成漸鎮靜尤阿淡同時ニ發スル手筈ニ而其謀シ合セノ爲數淡州諸兵隊之内より阿州ニ參り居候者致歸淡右政府より之説諭ニ依テ鎮靜之次第咄申候處淡諸隊大ニ憤激斯ク迄謀シ合セ及決定タル義ヲトヒ何方より之説諭タリトモ此期ニ至止ム可キ謂ハレ無之此上ハ阿ノ方ニハ頓着ニ不及ト一決即刻打出シ候由是則十三日朝ノ事ト相見エ申候付紙 本文説諭ノ大旨ハ今度知事候御發途ノ御留守中聊ニテモ紛亂弊ノ義差起リ不申候嚴重取締可申旨大參事始へ吳々被 仰付置候間決而暴動不相成是非堪忍難相成候ハ、先我々が首ヲ斬リ而後發スヘシトノ參事達説諭ニテ漸ク鎮靜ニ至リタル趣同藩安富覺兵衛ヨリ承リ候段大久保來咄申候事 右ニ付淡地詰參事以下種々説諭其内ニ之德島政府ヨリモ爲説得驅付ケ候役目モ可有之兎哉角シテ漸ク夕七ツ時分鎮靜ニ至リ候趣是ヨリ先キ東京へ兵隊總代ヲ引連レ罷出居候少參事ハ前件脱歸ノ事ヲ夢ニモ不知兩日程モ右四人之者ヲ不見受候ニ付段々及詰問候處脱歸之事相分リ大ニ仰天同九日ト賦ニ東京發橫濱より異體ニ乘リ十三日歸藩之處既ニ淡地暴發之跡ナリシト云此一舉稻田手ヨリ敵抗イタシ候様子ハ絶テ相聞へ不申是ハ後日藉口ノ爲ナルヘシトノ世評ニ御座候右ニ就テ尙熟考イタシ候へハ今般ノ暴發ハ内實須本ヨリ誘ヒ出シ本藩兵隊ハ其術中ニ陥リタルニテハ無之哉トノ諸藩考察モ御座候

一當稻田九郎兵衛之未タ幼年ニ而何之辨へモ無之程之事ニ而内願等之事ヲ企候ハ全ク同家重臣トモノ所爲ト相聞へ申候此者共ヲ德島藩ニテハ奸臣共ト稱へ居中候

一譜代之家臣ニ相違無之段徳島藩ヨリ申立ニ相成候ハ朝廷ヨリ御問合ニ依テ由緒書等ヲ以御答被申上候趣ニ相聞ヘ申候  
 一北海道に引越之儀ハ岩相公御内意之様ニも承り申候  
 一本藩ヨリ者稻田家中ヲ奴隸視シ彼ヨリハ本藩ヲ輕蔑ノ意味有之兼テ不居合ノ處一昨年來奥羽ノ戰爭等ニモ稻田兵隊格別奮勵シ御賞典ヲモ戴キ候ニ付テハ彌以本藩ノ兵ヲ輕侮ノ氣味モ顯ハレ候哉然ルヨリシテ本藩ノ兵隊憤怒ニ堪ヘ兼如何ニモシテ押潰サントノ意氣込ニ相成タルモノナルヘシ左モ無テハ少參事ノ兵隊總代ヲ引連レ哀訴ト申儀相分リ兼候ト諸藩ノ考察ニ御座候  
 一今度依 召參府ニ付テモ稻田家ヨリ相應ノ從者ヲ付ケ度トノ事ニ有之候得共本藩ニテ許容無之三四人ノ從者ニテ東行ノ由知藩事候ハ四五十人ノ從者ノ由此等ノコトモ稻田家臣ヨリ怨ミ居候由  
 一元徳島藩老臣ノ家來當時岩相公之御内ニ相成居候者ハ何様奸物ナラントノ世評ニ御座候  
 一高松藩ヨリ彈臺ヘ左之通届ニ相成申候右越境之人數三百人程之由彈臺ヘ數願ノ趣有之取次吳候様トノ事ニ付篤ト趣意柄承リ糺シ不申而之難取次返答ニ相成候處御取次不被成而之御藩後日之御爲宜シカル間敷杯申同藩ニモ憤リノ由其中子金陵會議所ヨリ徳島藩士參リ右ノ者ノ内ニ面會談判致シ度候間高松藩ヨリモ立會吳候様トノ事ニテ其都合ニ相成未タ談判ニ至ラサル内ニ高松出立ノ脚便ニ付其後ノ模様ハ不相分右越境之人數ハ阿州ニ有之稻田領地井ノ尻ト申所ニ居住ノ家中ノ由同所ヘモ兵隊押寄セ來リ候ニ付越境致シ來リ候由尤未タ砲發ニハ至リ不申由  
 徳島藩稻田九郎兵衛萬家來之由多人數高松城下ニ罷通候様子ニ而昨十四日夜香川郡東百相村迄罷越候ニ付所役人罷出様子相尋候處當藩に數願之筋有之越境之趣申聞候間不取敢同所に指留置候段注進申越候依之早速應接之者指出談判之上子細相分次第御届可申上候得共先不取敢此段御届可申上旨申越候以上

高松藩

五月十五日

彈正 豪

御 役 所

一稻田領表高壹万五千石數ニ候得共内實七万石餘ニモ相成居候由然ルヲ今度徳島藩ヨリ十分一之處ヲ以千石ニ檢地致シ候由 付紙 本行之通聞取居候處尙承リ候ヘハ徳島藩今般ノ改制千石ヲ以高ノ至極 依之家中之者ハ如何可被成下哉ト伺出候處ト定メラレ候事ノ由夫故稻田モ千石ノ檢地に相成リ候由ニ御座候事  
 一本藩ノ中ニ可被差加尤仕官望ニ無之者ハ農商ニ飯シ候儀勝手次第ト申様ナル事ニ相成候由然ルニ本藩ヘ出候ヘハ知行取モ士モ總テ卒族位ノ場ニ被召仕候モノト心得候歟何卒別ニ兵隊ニ御編成被下九郎兵衛指揮ヲ受候様被仰付度段願出候由ニ候得共聞届無之左候ハ、稻田家浪人ト申者ニテ苗字帶刀其儘ニシテ被差置被下候様願出候由此儀聞届有無之處ハ相分り不申何様此等モ沸騰ノ一ツト相聞ヘ申候尤本藩ヘ出候ヘハ士族ハ士族ノ列卒族ハ卒族ノ列ニ可被加管ニテ有之タル由同藩安富覺兵衛咄申候段高松藩大久保來ヨリ承取申候  
 一十五日頃ノ事ニモ候哉此許高知藩邸に稻田家來七條何某ト申者罷越同家後室二人士十三人家族共引連危難ヲ遁レ來リ右ノ人數ハ住吉邊ニ忍ハセ置候處脱走人御吟味嚴シキ趣ニ付甚心配致シ候間何卒當御邸内ヘ御カクマヒ被下度段本藩兵隊暴動ノ次第委敷物語致シ及頼談候ニ付公用方森記内ヨリ當邸ヘ御カクマヒ申事ハ所詮難相成筋ニテ候唯今御咄之通ニ候ヘハ御條理相立居候事ニ付直ニ坂府ヘ御申出ニ相成候ハ、如何様卒御取扱可有之ト懇諭ニ及ヒ候處漸ク納得致シ坂府ヘ罷出候由記内ヨリ承リ候段大久保來咄ニ候其後十九日ノ日高松ヨリ報知之次第爲御届大久保坂府ヘ罷出候節右ノ末如何相成居候哉ト傳達ヘ尋見候處府ノ御世話ニテ何方ヘカ被差置御預人ノ様ニシテ番兵等被付置有之趣傳達方申居候由

右七條何某高知邸ニテ咄候趣ニテハ須本城外ニ稻田ノ屋鋪有之家族住居ノ處十三日暴發ノ砌本藩兵隊ノ内ヨリニテ可有之右邸ヘ參リ追付ケ撃込候間早々立退候様申置立歸候ニ付當稻田ノ母後室ト歟何故ニ打込レ候哉彼方ヘ參り可承來旨七條に申付候ニ付罷越候處失庭ニ及捕縛斬テ仕舞ヘト申様ナルコトニテ既ニ死ヲ決シ居候處隊長立出使者ヲ

明治 三年

五〇三

斬ルハ道ニ非ス速ニ放チ飯スヘシト云シニ依テ縛ヲ解カレ虎口ヲ免レ飯リシ由暫ク有テ僧一人驅來リ急ニ御立退キアルヘシ最早打入り來リ候ト申ス内砲聲頻リニ迫リ來リ候ニ付今ハ可致様モ無之表口ハ危ク候間裏口ヨリ立出候ノ中ナドヲ潜リ拔ケ漸ク船場迄逃レ出幸ニ明石迄遣ハシ候船歸リ來リ候ニ取乘リ兵庫迄罷越同所ニテ尙別船ニ乘リ替此地に到着致シ候由右後室二人ノ内一人ハ水口藩知事家ヨリ嫁シ來リ候人ニ付直ニ同藩に送り付候段ヲモ申居候由一德島藩ヨリ此許兵部省に入寮ノ爲メ兵隊三十人上坂致シ藩邸ヨリ願立ノ上十五人丈ケハ入寮被 仰付候管ニ相成居候處十四日ノ報知ヲ聞キ斯ル大事件ヲ承リ片時モ此許ニハ留リ難ク候間差下シ被下度段公用方は願出候ニ付兵部省ノ御規則嚴重ノ所ヲ漸ク願取候事ニ候得ハ被差免候人數丈ケハ是非滞リ候様段々説諭有之候得共承引不致候ニ付無是非歸藩ノ方ニイタシ邸前ヨリ乗船即日出船爲致候處夕ヒツ時分右ノ内一人馳歸リ私共義直ニ出船可致管ノ處歸藩ノ上大坂稻田邸ノ動靜如何ト被尋候時不存ト計ニテハ難相濟相考候ニ付彼方報知ノ模様ヲモ承リ度旁引返シ上陸京町堀稻田邸へ罷越候處門番ノ者相支ヘ候ニ付彼是應接ノ上遂ニ押テ門内へ入込留守居宅へ罷越案内致シ候ヘトモ應スル者無之候故不得止踏込見候處一人モ居不申察スル所門番トノ押引際取自然聲高ニ相成候處ヨリ怖レテ裏口ヨリ逃去リ候モノト相見エ申候私共ハ一刻モ差急キ罷下リ度候得共此儘ニ致シ置候テハ火ノ元モ氣遣ハシク候間御邸内ヨリ番人御遣シ被下度段相答引返シ候ニ付早速本藩邸ヨリ人ヲ差向ニ相成候處最早兵隊ハ引去リ居候由

右ハ德島藩邸ニテ承リ候趣ニ御座候稻田邸近邊ニテ承ラセ候處門前迄參リ何レモ拔刀ニテ詰掛ケ候由ニテ近邊モ殊ノ外騒キ候様子分捕ヲモ致シ候様ノ風聞ニ候ヘトモ是ハ何程ニ可有之哉多分虚説ト相考申候

右德島藩其他諸藩等ヨリ承リ取候次第書取御達仕候以上

午五月廿二日

猪 俣 才 八

德島藩稻田家双方確執之事情探索書取

今般德島知事公依 朝命稻田九郎兵衛召連東京ニ赴ル、ニ付此旨須本ニ報告アレハ兼而達命ナレハ九郎兵衛本月十二

日須本發船德島ニ出府シ知事公同船ニ而神邊<sup>カ</sup>ヨリ洋館ニ移登京之定約ナリ然ニ翌十三日朝德島ヨリ兼而出張之兵隊突然發炮シ城下ヲ火シ且稻田家之所領阿州猪尻ナル所ニ百多ノ臣下在住スレハ此地も德島ヨリ兵隊取圍淡州へ之應援ヲ絶切又德島表之稻田邸にも打入出張之士卒ヲ捕縛シ浪花順路ノ川筋ハ戊兵ヲ置淡州脱落ノ者ヲ擯ント構無殘所分配シタレハ稻田家之者共ハ網籠之魚鳥サレ又辛シテ虎口ヲ逃レ浪花ニ洩來ル者も有ヨシ翌十四日ハ浪花之稻田邸へ德島ノ兵隊兵部省ニ入者三十人押寄亂入シタレトモ邸監細野隼之進<sup>ニ助ニ作ル</sup>ハ先キニ本國ノ動搖ヲ聞家族ヲ脱シ其身も兵隊襲來ヲ聞テ脱シタレハ空邸ニ討入邸第ヲ打釘シテ退引セリ昨日隼之進ヨリ本國動搖ニテ城下大火之趣ヲ政府ニ届ケ又本藩ヨリ兼而嫌疑ヲ蒙タレハ如何程ノ變動可發も難計其時ニ臨決テ手向致スヘカラス脱セラル、丈ケハ脱シ其間ヲ得サレハ死スヘシ假令死ストモ拔刀スヘカラスト嚴令ヲ下シタレトモ時日モ移タレハ死生ノ際ニ臨ミ法令ヲ犯者モアランカ去レトモ斯ク申合セタル旨趣ヲ政廳及東京ヘモ訴タレハ淡州之脱人ハ政府ニテ介抱アリ皆救助小屋ニ差置レ兵隊ヲシテ守衛アリ

九郎兵衛十五才德島知事公同船シタレトモ船中ニテ圍殺シタル説アリ或又神邊<sup>カ</sup>ヨリ脚船ニテ無恙東京ニ赴タル説モアリ不明

抑此舉動ノ起元ヲ尋ルニ一新以來 朝廷ニ於テ稻田ヲ召出シ列藩タラシメントノ議アリテ去々辰年奥羽追討之節朝廷ヨリ稻田家ニ出兵ノ命令アリ是ヲ德島ニ訴ニ不平ナレトモ 朝命ノ重キヲ難默止之ヲ許スト雖舊恩ヲ忘却シ朝臣タランヲ望ムハ不忠ノ極ナリト物議ヲ生スル上版藉奉還以來稻田ノ所領ヲ直ニ德島ヨリ支配ス然ニ收斂萬ニ増タレハ士民憤リ舊主ニ租稅セシコトヲ希望シ士卒モ德島ニ給セラレントヲ憂假令佩刀ヲ農具ニ換ルトモ舊主ノ下ニアランコトヲ望ムハ是ヨリ百事忌疑シテ 天朝ニ訴へ議論紛々タレハ當春三月頃林徹之丞<sup>稻田</sup>小室力藏<sup>德島</sup>二名ヲ 天朝ヨリ德島ニ遣シ説諭スレトモ承伏セス於は今般知事へ御用之儀有之稻田九郎兵衛召連急登京候様命令下リシナリ須本ニ於テ德島兵上發砲之節稻田家ノ者共麻上下ニテ蹲踞スルヲモ打殺シ砲丸刀劍ニ落命シタル者凡三十餘人一人

モ拔刀ノ者ナク只時ノ鳥ヲ刺ニ等シケレハ徳島ノ兵士一人モ疵ヲ蒙ル者ナシ

四月下旬所記

右松江藩中島準作ヨリ廻達仕來候ニ付寫取御達仕候事  
午五月晦日

猪俣才八

五月十四日日本藩近藤彦人外三人江刺縣出仕を命せらるゝ旨の達あり

〔東京より之御用狀扣〕

〔五月十四日桃井少録渡し〕

熊本藩

其藩近藤彦人西島仙五郎野口九平久我儀之助儀江刺縣出仕申付候條此段相達候事

民部省

庚午五月

〔備考、探索書控に六月六日江刺縣より近藤彦人は少屬に西島野口久我三人は藩少屬に任せらるる辭令書を記載せり〕

五月十四日堺縣小參事矢島源助本官を免せらる

〔從東京西京之下廻〕

其藩上矢島源助儀堺縣出仕申付置候處今般免職歸藩於當地申渡候此段及御達候也  
五月十四日

小河堺縣知事

細川熊本藩知事殿

〔全書〕

堺縣小參事被 仰付置候同縣御用ニ付東京に罷越居候處今度被免本官候

去ル十七日委許出立

矢島源助

五月十六日日本藩知事護久東京を發して歸藩の途に就く

〔東京より之御用狀扣〕

五月十六日米田(虎之助)井澤(傳次)津田(山三郎)カ

知事様御暇御願書去ル十日別紙之通被遊御差出候處伺之通聞届候との御付札御用即日御差圖有之候

一右ニ付 天機御伺 御參 内之儀御伺書被差出候處伺之通已刻可被遊 御參 朝旨御付札御用御渡ニ付昨十五日

御參朝之處 龍顏御拜 天蓋被遊御頂戴奉恐悅候

一右ニ付今十六日晝九時之御供揃ニ而御當地御發駕横濱表に兩日 御滞留來ル十九日同所カ異艦に被爲召御渡海之管ニ

御座候

右之段爲可申達如是御座候以上

〔慶順公御隱居御家督一途〕

一御暇被 仰出候付五月十六日東京御發駕同廿七日熊本御着之事

五月十六日九時之御供揃ニ而龍口邸 御發駕芝より馬車ニ被爲召横濱に御着同十七日同十八日同所御逗留同十九日同所御發駕亞米利加飛脚船ヲールコニヤに被爲召同廿日同所發艦同廿一日神邊港着艦廿二日迄滞艦同廿三日發艦廿四日晚長崎着港翌廿五日萬里丸に被爲召翌廿六日曉同港御發艦廿六日夕小島沖御着艦天赦丸より小島川口迄被爲入猶端舟に被爲召小島に御上陸御止宿同廿七日朝五半時之御供揃ニ而同所御發駕益御機嫌熊木被遊御着候事  
但東京御發駕之節鍋島大納言様馬車ニ而六郷迄御見送被成候事

五月十六日我藩箱館戰爭に参加せし隊長志水一學以下の功勞を賞す



〔明治三年 轉職進階帳〕(熊本縣廳所藏)

五月十六日達

辭令

弓削新助同道

志水一學

其方儀箱館戰爭之節隊下を勵し進撃ニおよひ格別相働五稜郭相圍候付而茂指揮行届且降伏之兵隊受取方等諸事都合能取計歸陣之節者榎本釜次郎列護送等別而致心配候付目錄之通被下置旨被 仰出之

御紋附御給一

白銀二枚

同人同道

石寺九兵衛

其方儀箱館戰爭之節隊下を勵し進撃ニおよひ格別相働五稜郭相圍候付而茂指揮行届且降伏之兵隊受取方等諸事都合能取計歸陣之節之榎本釜次郎列護送等厚致心配候付目錄之通被下置旨被仰出之

同御給一

〔石寺永屋書類〕

明治二年五月十六日箱館津輕古營戰爭ノ概略

明治三年五月十六日熊本御花畑御殿ニ於テ一隊被召出御詞令左ノ如ク上官以上ニ被下置其文意大同小異御品羽二重御御紋付御給或ハ御帷子白銀三枚添付セラレ以下悉ク兵士ハ差等ニ應シ少シク差異アリテ御賞與アリ(詞令書は前掲の文に同じ仍て略す)

右國家ノ威靈ト隊士ノ忠勇トヲ籍シテ以テ微功ヲ奏スルコトヲ得タルハ實ニ終天ノ幸ナリシカシテ今將ニ箱館役ノ顯末ト彼ノ七子ノ困躓經營ノ履歷ヲ輯メテ以テ遺忘ニ備ヘ務テ浮虚ヲ事トセス唯其概略ヲ記ス耳  
明治三年八月

石寺九兵衛

後改九郎

永屋百助

後改軍記

五月十八日日本藩權大參事井澤傳次は全權大參事津田山三郎と交代して歸藩の途に就く

〔從東京西京之下廻〕

(五月廿六日發東京詰書記より報知の一節)

一傳次殿儀山三郎殿と交代被仰付去ル十八日爰許出立ニ相成申候

但横濱方知事様御召之異船乗組渡海ニ相成申候

五月十九日酒田縣大參事安場一平膽澤縣大參事に復任す

〔從東京西京之下廻〕

安場酒田縣大參事

五月十九日

太政官

復任膽澤縣大參事

(安場一平は四月三日膽澤縣大參事より酒田縣に轉任せし者なり)

右 宣下候事

五月十九日長崎縣に對し管内各社の氏子改方を命せられたる旨神祇官より通達あり

〔東京より之御用状扣〕(明治二年四月以後)

明治三年

五〇九

別紙其知事に可被相達者也

五月十九日

熊本藩 公用人

氏子改之儀別紙寫之通民部省長崎縣に相達候付其御藩にも爲御心得申入候趣同省懸合有之候就而之右御施行相成候ハ、御管下社職共夫々御達有之候様致度追而社務姓名印章及奉祀社號國所等巨細届出候様御取計可有之候依而此段申入候也

神 祇 官

熊本藩 知事 殿

戸籍編製等之儀ニ付而者追而一般之御規則御確定可相成候得共其管轄之地之目下耶蘇教之混雜茂有之何分遷延難相成候ニ付別紙之通差向規則相立候間先ツ右規則ニ從ひ氏子改可被取計候尤自餘委細之儀之渡邊彈正大忠其他出張ハ、候間可被打合候右相達候也

民 部 省

長崎縣

(別紙氏子改規則あれとも略す)

五月十九日米澤藩は同藩士雲井龍雄保管の命を受く尋て之を米澤に護送し城内に幽閉す

〔探 索 書 控〕

(午七月十二日第二大區隊長、盛岡藩北村正興申立書の内)

當五月十九日雲井龍雄儀米澤藩へ御預被仰付同人出立之節増岡寒吉申候ニハ今般雲井龍雄米澤藩へ御預歸相成候ニ付

而之警衛致候者共ヲ於途中殺害致し龍雄ヲ奪取兼而之志願可再興と彼是相談致候得共逆も人少ニ而一時ニ暴發致候共不相叶義と一ト先圓心寺へ罷歸種々評議中一同東京府御引連ニ相成同府戸籍取調所ニ於而謹慎被仰付罷在候云々

〔中村水雲事蹟〕

當時龍雄の同盟者既に數千に及へり然るに政府の嫌疑龍雄の一身に蝟集し未た事就らざるの前に龍雄は既に逮捕せられて米澤城中に幽閉せられたり是れ實に三年五月にして云々

五月廿日澳太利との條約書及び獨逸條約書の追加を配布せらる

〔東京より之御用状扣〕

今日外務省より御呼出ニ付御所使罷出候處上柳筆生を以日本澳地利條約書並獨逸國條約書前後貳枚御渡ニ相成尤獨逸國條約書之昨年中御渡ニ相成候前後ニ壹枚宛入可申旨口達御座候旨相達申候以上

公 用 人

(條約書見當らす)

五月廿日丁卯艦をして英國軍艦と共に南海を測量せしめらる、につき我藩岡田攝藏に通譯を命せらる

岡 田 攝 藏

〔從東京西京之下廻〕

今般英軍艦合併爲測量被差廻條同艦エ乗組士官之心得ヲ以通辯申付候事

兵 部 省

五月廿日

明治三年

〔明治二年四月以後  
東京より之御用狀扣〕

〔五月廿日小澤大録渡し〕

丁卯艦今般英軍艦と共に南海測量候ニ付其藩岡田節藏義右艦に乘組通辯申付候條此旨相達候事

庚午  
五月

兵部省

熊本藩

五月廿三日江刺縣權知事山田十郎東京を發し赴任の途に就く

〔從東京西京之下廻〕

本行四人者五月廿三日彼方權知事山田十郎一同爰許出立候

其藩近藤彦人西島仙五郎野々口九兵衛久我儀之助儀江刺縣出仕申付候條此段相達候事

庚午  
五月〔此の辭令書は既に五月  
十四日の條に出てたり〕

民部省

熊本藩

〔備考山田十郎の江刺縣權知事拜命は四月某日の條に出つ〕

〔全書〕

〔五月廿五日東京發下廻〕

一近藤氏江刺縣出仕被 仰付置候付一昨廿三日爰許出立致し少ナ之人数ニ相成さむしき事ニ相成申候

五月廿三日東久世通禮使者を東京の我藩邸に遣して其北海道に赴くに際し我藩秋田耕甫を借れ  
ること且つ昨年其臣大村達也が我藩に保管中厚遇せられしことを謝せしむ

〔明治二年四月以後  
東京より之御用狀扣〕

東久世様御使者

市川弘造

右者今般蝦夷地に御越ニ付而秋田耕甫御借受被成候御禮且昨年御同方様御家來大村辰也御預中ハ御手厚御仕向ニ預リ

難有思召右御禮被仰進候段公用司に罷出申述候

畢而達也御預之御禮是迄延引仕候段御斷被仰進候

五月廿三日

公用人

五月廿四日本藩嘉悦市之進監督大佑に任せらる

〔明治二年四月以後  
東京より之御用狀扣〕

熊本藩

其藩嘉悦市之進儀任監督大佑候條此段相達候事

庚午  
五月

民部省

〔從東京西京之下廻〕

五月廿二日着

嘉悦市之進

五月廿五日來廿七日集議院議員を召集し參朝せしめ廿八日開院式を行はせらるゝ旨を達せらる

〔從東京西京之下廻〕

五月廿五日差廻來候御書付寫

庚午  
五月 太政官

集議院

來廿七日第十字議員一同參 朝被 仰付候事

右之通被 仰出候開當日第八字當院參集相揃候上參  
朝可致候事

明治三年

五二三

但着服之儀ハ直垂麻上下之内相用可申事

庚午 五月 太政官

五月廿五日 集議院

右之通被 仰出候間當日第八字直垂麻上下之内着用一

來廿八日開院被 仰出候事

同參院可致候事 庚午 五月廿五日 集議院

五月廿七日日本藩知事護久熊本に歸着す

〔明治三年 記室日記〕

知事様益御機嫌能去ル十六日東京被遊御發途同十九日横濱を異艦に被爲召長崎を萬里丸に御乗替今廿六日小島沖御着直ニ御上陸同所御一泊ニ而明日四時之御供揃ニ而熊本被遊御着座管之段御到來有之候條達筋之儀早々可被取計候以上

五月廿六日

大參事

大司儀衆中

〔全書〕

五月廿七日

知事様益御機嫌能今日四時之御供揃御乗切ニ而小島 御立晝九時前御花畑被遊御着座候事

五月廿九日我藩千本通の邸地を返上し京都府へ交付す

〔明治二年王政日新録〕(熊本縣廳所藏)

五月廿八日

一左之書付河邊持參前田權大屬に面會引渡日限等致談合候處御都合も有之候間明廿九日御引渡被下候様同人を以口達ニ

相成候事

千本通下立賣下ル拜借屋敷

右之先頃相達置候通此節致返上候依之御立合之上御引渡申度候間同邸へ御出張可被下候也

庚午 五月廿八日

熊本藩

京都府

五月晦日我藩兵半小隊東京市中取締を命せらる

〔從慶應二丙寅年正月至明治三年 江戸京都來狀扣〕

以別紙申達候

一先月晦日御達ニ相成候市中取締被仰付段之御書付一通(中略)

六月十三日

津田權大參事

大參事衆中

權大參事衆中

〔從東京西京之下廻〕

六月晦日(六月は五月の誤なるへし)

庚午 五月

其藩半小隊市中取締申付候事

熊本藩

兵部省

五月晦日本藩眞島襄一郎外務省文書司出仕を命せらる

〔從東京西京之下廻〕

明治三年

五一五

眞島襄一郎

但課務翻譯通辯可心得事  
庚午五月卅日

外務省

五月某日東京靈岸島に廻漕會社創設せらる

〔從東京西京之下廻〕

口上達

一今般廻漕會社御取結御趣意之儀者當今各國御交際等之折柄是非ニ通商之道不相立候而者 御國損之基ニ深キ御見込も被爲在是迄廻漕之儀ニ付而者品々御配慮被爲在猶此度廻漕方御改正被仰出不圖も未熟之私共頭取之蒙命總而會社中ニ御委任相成一統冥加至極ニ奉存候然ル上ニ 御國御辨理之端にも相成候半ニ舉而盡力何卒廻漕之道盛ニ行キ候様致度然ルニ異人持船無之而者不安心之様風聞も聞々有之右者全く彼等之浮説ニ可有之歟航海之儀ハ委ク洋中事馴候日本人異人共雇入自今會社中ニ而乍不及屹度御安心可相成法則相立置候得共此上積荷等不集ニ而之實ニ勞して無程而已ふらモ彼等之策ニ陥リ候儀ニ至リ可申哉心痛仕候依之御乘船之御方ニ之勿論積荷等決而龜略無之様且賃銀等之儀ハ別紙之通至當之積を以請取候様仕候間御上下共御荷物其外御用被 仰付候様仕度此段奉懇願候以上

庚午五月

廻漕商社 頭取 中

御公用方 御中

(別紙)

東京廻漕蒸氣船 每月一六定 出帆日

一乘船賃 但自分持兩掛凡七貫目迄之賃金共差出ニ不及上等之間並ニ部屋料之儀ハ其船ニ寄不同有之ニ付以相對取極候事	壹人ニ付食料共並之間金 九兩	但廿貫目以上 定價 貳割増 五十貫目以上 同 三割増 一百貫目以上 同 五割増 百五十貫目以上 同 其品ニ應シ取極メニ候事
一長持 但重目入之分者日方改賃金相定候事	大 金五兩 中 金四兩 小 金三兩	一貳分金 千兩ニ付 金三兩 一壹分銀 千兩ニ付 金四兩 一金札 千兩ニ付 金貳兩
一同寸延 但前同斷	金六兩	一錢 十貫目ニ付 銀 廿五匁 一日本米 百石ニ付 金九十五兩 一支那米 百石ニ付 金七十六兩
一明荷 但前同斷	大 金壹兩 中 金三分 小 金三分	一商荷物極簡壹入依樽物之類者菱垣樽廻船定運賃割増を以取極候事 一積入荷物引當爲替金入用之向者代金ニ應シ貸渡シ可申此利足金百兩ニ付貳兩貳分尙積入荷物非常難破請負相頼度向者荷物代金百兩ニ付金壹兩通用金銀金札共百兩ニ付金三兩差出シ候ハ、請負可申候事
一箒荷駕籠葛籠其外櫃箱箇物類 但駕籠者棒拔取候事	曲尺四方ニ付 銀 九匁 日方拾貫目ニ付 銀拾六匁五分	一奥州筋箱箇其外諸港之便船御用被仰付度聊無龜略取
一大炮小筒其外重目之品		

扱可申候事

但荷物之石敷人數等以書附御申出可被成候事

一着荷之上會社方宛所迄之運送賃届先持之事

右郵船規則中運賃等夫々定置候得共船數之多少物價之釣合方不都合之廉聊加除致し先當分之處書面之通相定荷等大切之取扱無遲滯相届可申候以上

明治三年四月改  
東京 横濱 大坂 神戸

靈岸島大川端元越前侯屋舖

廻漕會社

六月朔日神祇官は藩政に關する諮問に奉答す

〔明治三年ヨリ探素書控〕

先般諸官省に藩政御下問ニ付神祇官ヨリノ御答書

方今府縣ハ僅ニテ海内大凡ハ藩ナリ依之藩政ノ整ト不整トハ大勢ニ關係イタシ又藩々ヨリ貢米有之ト不有之トハ國家ノ休裁ニ拘リ申候就而之藩高之内貢米ノ御定有之度候次ニ藩士祿制以下適宜ノ御定有之度候海陸軍費ノ條目ハ其制ニ當リ候カニ候得共夫ニテハ一體ノ貢米ニ當リ不申候故如何ニ候事  
一藩知事ノ家祿ハ相應ニ御定有之度大小參事も同様之事ニ候左様無之藩々適宜ニ取極メ候而之大藩小藩ニヨリ 朝廷御定之等祿ヨリ増減出來有之不休裁ニ可有之候  
一五萬石以下之小藩實ハ縣ヨリモ僅少ニツテ不休裁之分有之就而之大藩ヲ分チ小藩ヲ合シ候テ相應ニ有之度候左様無之テハ永世ノ法トモ難相成存候右御下問之條々及御答候其餘所存無御座候以上

六月朔日

右七月廿六日福岡藩中村章集會席に持參

六月朔日我藩大少參事の更迭を行ふ

〔熊本藩日誌〕

六月朔日

一左之通

被任熊本藩大參事 長岡從四位様  
大參事被 免被任 佐々木與太郎  
權大參事 米田虎之助  
被任權大參事 小笠原七郎  
被任權少參事 神山源之助  
右大參事被 免 鎌田軍之助  
右少參事被 免

右權大參事被 免

右少參事被 免

住江甚兵衛  
井澤傳次  
松崎傳助  
鎌田平十郎  
井口呈助  
藪作右衛門  
村上求太郎  
池邊吉十郎  
澤村脩藏

〔明治三年記室日記〕

六月朔日

宮内從四位様御事被任熊本藩大參事被爲蒙 宣下候且

又 御同方様向後 從四位様と奉稱候

松井新次郎

明治三年

五一九

右者熊本藩大參事被 免候

藪 一

佐々木與太郎

米田虎之助

小笠原七郎

右者被任熊本藩權大參事旨

宣下之御書付御直ニ被遊

〔明治轉職進階帳〕〔熊本縣所藏〕

六月十二日

長岡從四位

任熊本藩大參事

右 宣下候事

太 政 官

佐佐木熊本藩大參事

任權大參事

右 宣下候事

太 政 官

米田熊本藩大參事

任權大參事

右 宣下候事

御渡候

但座席是迄之通被 仰付置候

右之通候條各隊并組支配方ニ茂可被相知候

以上

六月朔日

奉行所

五月

太 政 官

小笠原七郎

任熊本藩權大參事

右 宣下候事

五月

太 政 官

松井熊本藩大參事

免本官

五月

太 政 官

藪熊本藩大參事

免本官

五月

太 政 官

鎌田熊本藩權大參事

免本官

五月

太 政 官

住江熊本藩權大參事

免本官

五月

太 政 官

井澤熊本藩權大參事

免本官

五月

太 政 官

松崎熊本藩權大參事

免本官

五月

太 政 官

鎌田熊本藩權大參事

免本官

五月

太 政 官

井口熊本藩少參事

免本官

五月

太 政 官

任熊本藩權少參事

〔從東京西京之下廻〕六月二日更に我藩兵半小隊に東京市取締を命せらる

明治三年

六月二日兵部省ニ而御渡之寫  
其藩兵半小隊市中取締申付候事

庚午 六月 兵部省  
熊本藩

六月二日長州脫走人大樂源太郎鶴崎より竹田に至り身を赤座彌太郎に寄す

〔伯爵有馬家修史資料〕

明治三年三月中旬大樂源太郎本名ハ山口眞太郎鶴崎町ニ來リ其ヨリ更ニ中瀬市郎ト變名シテ鶴崎ノ勤王家毛利登トクノニ伴ハレ赤座宅ニ來リシハ三年三月廿五日ニテ三泊シテ詩韻ノ唱和ヲナシ其後六月二日復來リテ謀議ヲナシ爾後豊後國內處々ニ潛匿シ居タリシガ九月十七日久留米藩古松簡二ナル者杵築藩守口如瓶小串ノト共ニ彌太郎ノ門ヲ叩キ大樂ニ面シテ自首ヲ勸メシモ之ヲ聽カズ云々(赤座彌太郎氏談)

〔鶴崎丸山文太氏調書〕

大樂源太郎ハ數十人ト供ニ鶴崎町ニ來リシハ明治三年舊曆二月ノ末方ニ有之又竹田町へ轉セシハ舊六月ニシテ山縣五郎外數十人ハ大分縣野津原村今市村ヲ經大樂源太郎外數十人ハ大野郡、犬飼町田中村ヲ經テ何レモ竹田町ニ入りタル次第ニ有之申候

〔毛利家文書〕

大樂源太郎より毛利到への答書

昨日ハ忝奉謝候賤恙追々快御座候御安意可被思召願上候高論之趣可銘肝仕候文吉來候ハ、御報知奉願候決テ是ヨリ尋不申候也萬端御指揮伏テ願ヒ奉リ候草々拜答

空桑先生 侍史

朝 風(大樂源太郎の一名)

莫日此書モ亦分匿セシメシ後ノモノナリ探索人來リタルカ故文吉ニ用アリトテ外出シテ行キ尋ルハ不可家翁其他ノ同志ニ用アリトテ行クハ不可ト云フノ意ニ答ヘタル書ナリ事極テ危キ場合ナル推知ルヘシ

文吉ハ長州三田尻ノ人小舟ニテ彼ノ土産土燒物ヲ載セ鶴崎乙津邊へ往來セシモノ俠氣アリテ常ニ家翁ト大樂其他ノ志士トノ秘密書ノ傳達ヲナシシモノナリ

又探索極メテ嚴ニシテ鶴崎ニ大樂等ヲ居ラシムル場合トナリ家翁ハ已ヲ得ス長子登四男精六男羅ヲシテ大樂以下ヲ送りテ竹田藩ノ同志赤座彌太郎角石虎三郎等ニ託セシム其後探索益急ニシテ竹田モ亦久シク扶助スヘカサル勢ニ陥ル同志相謀リテ久留米藩同志小河吉右衛門等ニ轉宅ス小河等亦厚ク之ヲ扶助セシカ事遂ニ破レテ掩フヘカラサル窮境ニ臨ム日ナラスシテ官兵西下シテ久留米藩ニ向フ於是乎大樂已下其ノ志ノ就ルヘカラサルヲ察シ意ヲ決シテ同シク死セリト云フ此後之レニ關係連座セシ熊本藩人高田源兵衛古庄嘉門木村弦雄吉海準助我家翁兄登弟羅外數人竹田藩人赤座彌太郎角石虎三郎外數人久留米藩人小河吉右衛門島田某吉田足穂榎本某川島澄之助樋口良臣井上庫太外數人一時皆捕ヘラレテ獄ニ繋カレ皆刑ニ處セラル差アリ高田小河ハ東京ニ護送セラレ死ニ處セラレタリ

六月二日我藩兵隊東京府第六大區三の區及び同五の區の取締を命せらる

〔從東京西京之下廻〕

六月三日東京府に御呼出之上御渡之寫  
熊本藩 半小隊

合事 庚午 六月 東京府  
熊本藩 半小隊

第六大區三ノ區取締申付候事

但第六大隊兵員ト可致交代尤動向之儀之同隊方可承

第六大區五ノ區取締申付候事



但第六大隊兵員ト可致交代尤動向之儀者同隊ヨリ可

庚午 六月

東京府

承合事

六月三日我藩東京市取締を命せられたる兵隊の内半小隊の任務を免せられたき旨を請願す

〔江戸京都來狀扣〕

兵部省御役所

當藩兵隊半小隊市中取締被仰付旨先月晦日御達ニ相成申候處兵隊之儀當時三小隊外詰合居不申吳服橋馬場先和田倉之三御門御警衛被仰付置候付外ニ遊兵迎茂無御座趣申上候處當時迄取締被仰付置候兵隊交代中暫時之事ニ付相勤可申旨委細御口達茂御座候付奉長御請申上候事ニ御座候然處昨二日向又當藩兵半小隊市中取締被 仰付旨御達ニ相成御口達茂御座候付兵隊聯合之儀申談候得共前文中候通之事ニ付此上者何分聯合茂出來兼申候間何卒後之半小隊之被免被下候様奉願候乍併御模様次第ニ者熊本に申遣兵隊呼登相勤可申奉存候此段茂奉伺候以上

熊本藩

庚午 六月

小橋恒藏

六月三日支那の變動に乘し國內攘夷論者の勃興せむことを慮り兵庫縣に對し嚴重に取締るべき旨を達せらる

〔探索書控〕

支那動搖ニ付東京ヨリ兵庫縣に御下知

前略然之支那於天津暴徒共宗旨ノ事より魯佛公使及岡士等殺害いふし候段報知有之横濱より佛之軍艦差向英之陸軍練出し候勢ニ有之頗る不條理ナル舉動ニ相聞外國一統餘程之憤怒いたし居所々ヨリ北京に攻入燒拂可申トノ決議有之哉

ニ相聞候就而者御國內草莽攘夷論ヲ主張致し候輩又此新聞ヲ得手ニ引付朝鮮ヲモ攘夷論也扨ト種々流説ヲ設ケ諸人ヲ煽動し又之彼ニ習ひ暴動等萬一ニモ有之候而之決して不相濟次第兼而其邊取締向無御如才候へ共此砌猶精々御懸念有之候間嚴重御取締可有之候依而此段申達候也

六月三日

三

職

兵庫 知事 殿

右監察附屬山田五次兵衛より借受寫取申候

右件々御達仕候事

七月十七日

猪俣才八

六月三日我藩權少參事試補の任命あり

〔熊本藩日誌〕

六月三日

右任權少參事試補

宮村 庄七五三ト改

坂本 彦彦衛ト改

白木 大彈次ト改

右任辨務長官

早川 助 作

一記室之儀辨務局ト改幹事之辨務次官ト役名替候事

山田 五次 郎

六月五日我藩兵隊東京市中一區の取締方を免せらる

〔從東京西京之下廻〕

六月五日兵部省に御呼出御渡之寫

熊本藩

其藩兵隊市中取締一區差免候事

牛小隊

六月 兵部省

第六大區五ノ區取締差免候事

東京府

熊本藩

六月七日我藩兵隊東京市中取締を免せらる

〔從東京西京之下廻〕

庚午六月

兵部省

六月七日兵部省に御呼出御書付寫

熊本藩

其藩兵隊市中取締差免候事

六月七日我藩兵吳服橋、馬場先、和田倉三門警衛の増員を命せられ又虎門、新橋門の警衛を命せらる

〔從東京西京之下廻〕

其藩兵牛小隊虎御門新橋御門警衛申付候事

〔六月七日兵部省に御呼出御書付寫の續〕

但明石藩ト交代可致事

兵部省

其藩吳服橋馬場先和田倉三御門警衛兵員自今一小隊半出張申付候事

庚午六月 兵部省

熊本藩

六月八日氏子改假規則を布達せらる

〔從東京西京之下廻〕

六月八日御廻狀

口達

戸籍編制之儀追而一般之御規則可被 仰出之處目下遷延相成次第も有之候付差向別紙之規則ニ隨ヒ氏子改可致候事

庚午六月八日

六月九日御廻狀

氏子改假規則(省略)

六月八日對州會計所は朝鮮釜山浦にて曩に我汽船砲撃を受け其後彼國情一變して通商杜絶せる旨を報告す

〔探索書控〕

〔明治三年ヨリ〕  
以內狀令啓上候於長崎表 天朝御官員蒸氣船へ御乗組朝鮮通辯三人中野許多郎御乗せ組長崎發船四月初旬尾崎浦に暫時寄船直ニ朝鮮釜山浦へ御乗込ニ相成候處彼國より申向候ニハ蒸氣船之舩ニ見受候處日本人異人乗合と相見へ甚以不相心得事件ニ候貴國之儀ハ誠信之御國柄ニ候得ハ砲發及無禮候而者不相濟次第ニ付日本人丈ハ早々揚陸御取計被下候ハ、蒸氣船ハ手前速ニ打拂可申段申聞候内早速館守に御官員御揚陸方應對中早や砲發ニおよひ繋船不相叶無據退帆有之候と相聞え其後彼國平生之振合と相違昨今入送物全壅塞當時商路ヲ絶候姿ニテ談判事一切打合不申是等ハ御誠信之御臺休ニ茂相關り不容易事件實ニ不安恐念之次第ニ御座候彼國之情休ハ尙追々可申進候此段爲可及御告知如此御座候恐惶謹言

午 六月八日

名宛四人有り略ス

午 七月十一日大坂ニ達ス

午 七月廿七日

猪俣才八

六月九日國事犯罪者を既決未決共に寛典に處すへき旨を府藩縣に達せらる

〔從東京西京之下廻〕

六月九日御廻狀

凡國事ニ係リ順逆ヲ誤リ犯罪ニ至リ府藩縣ニ於テ咎申付有之候者并ニ未タ所分ヲ經サル分トモ去巳年九月被 仰出候  
御趣意ニ基キ罪之輕重ニ應シ其管轄府藩縣ニ於テ寛典之處置可致旨被 仰出候事

但禁鋼預ケ等 朝廷ヨリ御處分相成居候者且死流難容見込之者ハ可伺出候事

太 政 官

六月十日維新記録編輯の資料を各藩に徴せらる

〔從東京西京之下廻〕

六月十日御廻狀

今般記録編輯ニ付而者戊辰正月ヨリ已巳九月迄之際左之通諸達以下夫々部類ヲ分無漏脱書取寫書相添早々可差出此旨  
相達候事

一軍防局軍務局軍務官大總督府鎮將府ヲ始メ諸道總督并各處參謀等ヨリ諸達書類

一諸道戰爭之形狀届書之類

一都而諸願伺届書類

庚午

下ヶ紙 六月

兵 部 省

本文諸願伺届書類と申儀不決ニ而相伺候處何事ニ不寄前件軍務局初に差出候分ハ都而諸務へ付候事迄も書出候様ニ  
と申可有之候事

六月十一日日本藩知事護久藩士を熊本城内に召集し其家督任官の旨を達し且つ藩政革新の要旨を垂示す

〔慶順公御隱居御家督一途〕

一於熊本御藩中之面々に御書附御讀聞せ之事

(中略)

知事様 正四位様御上段に御出座正四位様御意被成下御取合之權大參事御請申上左之御書附筆役讀之

我等儀昨年知藩事蒙 宣下候付而者專 朝旨を奉し藩政一新之儀日夜苦心罷在候處所勞等ニ而充分之盡力茂届兼候付

今般退隱奉願新從四位に家督且知藩事被仰付候事ニ候就而者改革筋之儀右之志を繼當知事より追々施行可致候條いつ

と茂同心協力父子之存意相立候様一際奮發勵精之程頼入候也

右畢而御取合之權大參事御請申上左候而 知事様御意被成下右同人御請申上左之御書附筆役讀之

正四位様今般御願之通御隱居被 仰出我等儀家督且熊本藩知事蒙 宣下誠以難有事ニ候我等不肖之身を以大任を蒙り

恐懼之至候得共奉 命之上者 正四位様思召を繼只管 朝意を遵奉し一藩之治教を施行ハムし度存慮ニ候間いつと茂

彌以此意を體し同心戮力知事之職掌を輔け一際勉勵頼入候也

右舉而右同人御請申上 御入

〔熊本藩日誌〕

六月十一日十三日

一今度御隠居御家督ニ付而藩中之面々御城に呼出(中略)

左之書取隊長々々に知事様より御直ニ被仰聞  
朝命欽奉藩政維新之儀ニ付正四位様御深慮之旨被爲在 朝廷に件々御伺之筋有之御入 朝之思召ニ候處近年御病氣ニ付我等御委任之命を受今般登京會慮之旨ヲ以件々相伺候處方今皇國一致王化大行之日ニ當り當藩之風習兎角因循固僻ヲ不免全ク 朝旨未貫徹様御聽込ニ相成居右類之藩々有之ニ於テハ不得止屹度御譴責ニ可相成哉ニテ當藩之議誠以危急存亡之秋ニ立至り奉對 朝廷恐懼戰慄之至ニ候然處正四位様平素御欽奉之御誠心を表出し今度件々御伺取之御深慮等詳細達 天聽候處正四位様之御眞誠初テ 天朝ニ貫通し辱クモ我等別段之召命を蒙 天顏拜謁殊更藩政一新皇國興隆セヨとの御懇篤之諭言ヲ賜り恐多クモ御親酌ニテ 天蓋頂戴種々厚キ御慰勞有之三條公初參議列猶 聖旨ヲ繼テ奮發勉勵セヨトノ旨ヲ傳フ我等感激奮泣 天恩之深キ實ニ不知所拜謝是全ク正四位様之御忠志相顯候處ヨリ右様之御鴻恩ヲ蒙り候而已ナラス萬事連ニ御聞届ニ相成御願之通御隠居被仰出猶正四位之宣下ヲ賜り恐悅至極我等茂家督被仰付被テ藩知事職 宣下ヲ蒙リ不肖之身斯ル 朝命之辱キヲ蒙り候段誠ニ身ニ餘リ難有仕合奉感銘候此上ハ我等一身ヲ抛チ 朝旨ヲ奉シテ藩政ヲ一新シ正四位様之御忠志ヲ繼述シテ普ク上下ニ貫徹セシメシ事ヲ欲ス一藩ノ士民孰カ王臣ニアラサラン孰カ 王命ニ背キ奉ル者アランヤ但卑下賤愚之徒深遠ノ 朝旨ヲ不奉窺或ハ巷説ニ惑ヒ或ハ私見ニ泥ミ是迄方向ヲ誤候者モ不少候得共是全ク本心ニアラス皆見聞ノ愆也依之是迄之儀悉皆我等共不行届ト自反致し以往一藩更始し今度正四位様ヨリ新ニ御伺取之御趣意ヲ以人才之黜陟ヲ初メ民政兵制官員祿制等數件之政事順序ニ依テ改正致シ一藩王政行直り候様令勉勵候覺悟ニ候條有官無職之無差別一致 朝旨ヲ遵奉し正四位様之尊慮ヲ奉體シテ我等ヲ

補佐シ奮發興起致候様頼入候就而者諸官員ノ進退モ可致候處私之愛憎ヲ以テ其人ヲ舉措スルニ無之只其才之長短ヲ以共職之應否ヲ量リ公論ヲ以テ審擇致し候得は在職之族は才力ヲ竭シ専ラ其職ヲ務テ事業ヲ起シ無職之輩は平素之孝悌文武ニ身ヲ委ネ風俗ヲ維持シ一人モ皇國江忠ヲ盡サ、ル者無之一民モ王化ニ服セサル者無之 聖王之大道一藩ニ相立四海ニ及ヒ不日ニ春風和氣之王國ト相成候様銘々心懸肝要ニ候也右之大趣意改而及告諭候間反復熱慮心底を不殘御受之儀申出右之候様一度ニ不解者は懇諭ニ及ヒ猶不解者は最終ニ王化ニ不服者也王化ニ不服者は決テ此藩ニ在ベカラス一藩ノ士民末々ニ至マテ篤ト右之趣意ヲ眞知し決而不心得之族無之愈以皇國之爲ニ奮起勉力忠誠ヲ可抽者也

六月

知事

六月十二日我藩管内石高戸數人口調書提出すへき旨民部省よりの達あり

〔從東京西京之下廻〕

六月十二日御書付渡

熊本藩

戸籍編製之儀者追而一定之規則相定可相達候得共夫迄之處別紙雛形ニ從ひ在來之人別帳を以戸數人員其外總計不洩様取調早々可差出候事

但屬下藩々に者其藩ニおひて同様相達取調メ可差出事

庚午 六月

民部省

雛形

華族

何人

一管轄高

何萬石

但男

何人

一戸數

何萬戸

女

何人

一人員

何萬人

士族

何人

内

但同斷

明治三年

五三一